幻界戦線フロントワールド

級長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻界戦線フロントワールド

【Ｎコード】
Ｎ６４８６Ｘ

【作者名】
級長

【あらすじ】
我々が普段目にする漫画やアニメ。それらの正体は何だと思う？
それは異世界からの情報だ。作者の頭に電波が如く、異世界の情報が届き、それが作品になるのだ。我々の住む世界に情報を流す異世界は沢山ある。
今日はその異世界を旅した者達の話をしよう。
世界を廻る冒険の幕が開く。オタクの少年ルーウェンと傭兵の少女ジンが漫画やアニメ、ゲームの世界を守るため戦う爽快な冒険活劇の始まり始まり。あのキャラ達の夢の共演や対決もあるかもね。

プロローグ（前書き）

注意

二次創作が苦手な人はＬＲ同時押しで逃げてください。

時折キャラ崩壊してる奴がいる危険があります。（いろいろ保障できません）

二次とか言ってるくせに妙にオリジナル要素が多い（基本的に物語の根幹）です。

プロローグ

プロローグ

【ポートランド】　ビジネスマンション

ここは交易の世界【ポートランド】。幾多の世界が交わる場所。いくつもある世界はグミシップという乗り物で自由に行き来出来る。例えるなら、宇宙に浮かぶ惑星と惑星の間を旅する様に。

この様に行き来自由なので、世界と世界で争いが起こらないようにする機関や、交易を管理する組織が必要だ。ポートランドは世界をまとめる本拠地となる世界だ。

世界政府の本部や交易管理組織が多数存在する。

交易管理組織【ユニバース】の本部付近に立てられたビジネスマンションに今日も朝日が照り付ける。ここはユニバースで働く者や交易会社に勤める単身赴任のサラリーマン向けに作られたマンションだ。

しかし、その一室に会社員のイメージとは程遠い住人がいた。

「う……ん？」

先ほどまでその住人は１ＬＤＫのシンプルな部屋のベッドで寝息を立てていた。部屋は綺麗にまとめられ、備え付けの家具以外無駄なものはなかった。

住人は幼さの残る少女だった。中学生くらいだろうか。短い茶髪を乱して、金色の瞳はまだ寝ぼけているのか半開きだ。体を起こして、周りを見渡す。何故かベッドには少女の身の丈ほどある刀が置かれていた。

「寝てた？」

少女は目を擦って呟いた。彼女は横になるだけのつもりが、そのまま寝込んでしまったようだ。それは服装からも伺える。

深い緑のジャケットにズボン。どこぞの兵士みたいな服装をしていて、ジャケットは前を開けただけで脱ぎもしていない。
「シャワー……」
少女は呟いて、シャワールームに向かった。

▼

「ふぅ、スッキリした」
数分後、少女はスッキリして戻ってきた。寝ぼけていた表情もキリッとしたものになってる。服も同じデザインのものであるが着替えてる。ジャケットは手に持っていて、普段ジャケットの下に着てるであろう黒いタンクトップからは、健康的な白い肌があらわになっている。
左肩には、目の様な入れ墨が入っている。首にかけたタオルで濡れた髪をおおざっぱに拭き、少女は息をついた。
「おっ邪魔しまーす！　ジン生きてる？」
「なっ、る、ルーアっ！　鍵は閉めたはず！」
息をついた瞬間、扉が開けられ一人の少女が部屋に入る。ルーアという少女曰く、部屋の住人の名前はジン。おおよそ、かわいらしい少女には似合わない名前だった。
ジンは急いでジャケットを羽織った。女の子同士とはいえ、肌を見せるのは恥ずかしいタイプに違いない。
「なぜ？　鍵を閉めたのに……」
ジンは慌ててジャケットの前を閉めながらルーアに聞いた。ルーアは鍵を取り出して、何気なく言った。
「マスターキー」
「管理人権限か」
ルーアはこのマンションの管理人の娘だ。こんなビジネスマンションにジンみたいな同い年の女の子が引っ越してきたのがうれしいのか、なにかと世話を焼いてくる。

「で、何の用？」
ジンはそっけなく聞く。別にルーアのことを鬱陶しく感じてるわけではないが、ジンはつい相手を突き放してしまうのだ。
「いや、昨日帰りが遅かったじゃん。大丈夫かなー、って」
「心配は無用だ」
答を聞いたジンが返した瞬間、ベルがけたたましく鳴り響く。ジンは刀をベッドに取りに行った。
「な、何？」
「警報、か？　空港から異世界の生き物が逃げ出したのかもしれない。ルーアはここで、扉に鍵をかけて待ってろ。警報の長さからすると、危険性の高い生物が大群で脱走したかも」
「わ、わかった」
ルーアはジンの言う通りにした。武器を見てわかる通り、ジンはこんな事態が起きた時のためにユニバースに雇われた傭兵だ。
ジンはベルトで刀を背負うと、ベランダに出た。エレベーターも階段も使わず、ベランダから飛び降りるつもりなのだ。
「はっ！」
飛び降りて、地上に難無く着地する。降りた場所はマンションの近くに通う道路だった。道路には既に、脱走したと思われる生物がいた。
「な、ＳＥＥＤ？」
ジンは驚きの声を上げた。ジンが見かけたのは小人のような姿をした、パノンというＳＥＥＤだ。
「ＳＥＥＤ……。『システムオブグラール』で封印されたはずなのに？」
ジンは戸惑いを隠せない。
ＳＥＥＤとは、『システムオブグラール』という世界に現れた侵略者のことだ。封印されたという報告を世界政府は受けていた。しかし、こうしてジンの前にＳＥＥＤはいる。
「せっ！」

数匹がかりでパノンがジンに飛び掛かる。刀を抜いたジンは一刀でそれを切り裂く。
「急がないと、停泊港は大変なことに……」
ジンは刀を仕舞わず、道路を駆け抜けた。

グミシップ停泊港

「なんだったんだ、あれは？」
ジンは呟いた。停泊港までの道に、青いスライムやゴブリンやらクリボーやら、おまけに戦国時代にでもいそうな歩兵軍団など一貫性ゼロな集団に襲われた。返り討ちにしたが、少しダメージを負ってしまった。ＳＥＥＤ以上に戸惑ったせいで、隙が出来てしまったのだ。
停泊港は空港みたいな仕組みで、ポップな宇宙船みたいなデザインのグミシップが停泊してる。仕組みの関係上、当然海の上だ。
滑走路には青い大トカゲのランポスが大量にいて、占拠といった感じだ。ランポスのクーデターみたいだとジンは思った。
「とりあえず、掃除しないと」
ジンは滑走路を駆けて、ランポスを切り伏せていく。時々、ランポスの爪で傷つきながらジンは確実にランポスの死骸を積み上げる。
「貴様がボスか！」
半分ほどランポスを蹴散らしたあと、赤いトサカの大きなボスが姿を現した。この固体をドスランポスと呼ぶ。
「うあっ！」
ドスランポスが飛び掛かり、ジンの左肩を切り裂く。ジンとしては避けたが、昨日の疲労がとれないせいか動きが鈍っていたのだ。ジャケットが裂けて、目の入れ墨が覗く。
（しまった、最近戦い詰めだったからな……。疲れが残ってるのか）
ドスランポスは再び飛び掛かる姿勢をとる。ジンは避けることを

やめて、カウンターを取ることにした。
ドスランポスが飛ぶ。ジンはそれに合わせて前進する。そして、刀を振り上げドスランポスを両断した。
「よし！」
「おやおや、君がジン君かね？」
ドスランポスに勝利したジンに声がかかる。ジンは声がした方を振り向く。不意打ち的に声をかけられたので、ジンは緊迫した表情になった。納めた刀に手をかける。
「誰だ！」
「そう怖い顔しないでよ。強いて言うなら、人は私をしまっちゃうおじさんと呼ぶ」
「しまっちゃうおじさん？」
振り向いた方には、ピンクで茶色い水玉模様の、二足歩行のヒョウがいた。ジンは感じる殺気と名前のギャップに戸惑った。疑問の多い不思議な日だとジンは思った。距離は離れてるので、安易に近づかないようにジンは心掛けた。
「そう、この騒ぎを起こしたのも君を呼び寄せるためさ。私は政府から君を確保するよう言われてる」
「私を、確保？」
しまっちゃうおじさんと名乗る獣の言葉を聞いて、ジンは平静を保てなくなっていた。自分が確保される理由に心当たりがあるのだ。
ジンは左肩を押さえて言った。
「まさか……、【サイクロプスの目】？」
「そうさ。サイクロプスの目を持つからさ」
サイクロプスの目とは、ジンが生まれながらに持つ入れ墨のことだ。これを見ると、大抵の人間がジンを『世界の破壊者』と罵る。ルーアが部屋に入った時、急いでジャケットを羽織ったのもこのためだ。
自分に世話を焼いてくれるルーアがこれを見た時を想像すると、彼女は悲しみで張り裂けそうになる。

「この印がどうした！」
「私も意味はよくわからない。だが、雇われの身である以上、上の命令には逆らえないさ」
ジンの問い掛けに答えた瞬間、しまっちゃうおじさんはジンのすぐ目の前に来ていた。確かに、距離は離れていたはずだ。ジンは常識外れな出来事に、対応できなかった。
「目を持つ子はしまっちゃおうね～」
「うぐっ、あ！」
しまっちゃうおじさんのボディーブローはジンのか細い身体をたやすく吹き飛ばす。ジンはグミシップに激突して止まった。
「か、はっ……！」
ジンは口から大量の血を吐いた。あばらも折れて、息をするのも苦しいくらいだ。
「さて、しぶとい子はしまっちゃおうね～」
「う、ああっ！」
立ち上がれないジンをしまっちゃうおじさんが蹴り飛ばす。ジンは刀を抜くことすら許されなかった。
「トドメ、か」
しまっちゃうおじさんがジンに近寄る。彼女は力無く横たわっており、動かない。
「う、うぅ……」
「丈夫な子もしまっちゃうよ～」
ジンは無抵抗なまま、しまっちゃうおじさんが放った衝撃波に吹き飛ばされる。一撃ごとに上に吹き飛び、地面に激突する前にもう一撃、もう一撃と受ける。
「くあぁ！」
最後に特大の衝撃波を受け、ジンは鈍い音を立てて地面に落ちた。
「そろそろしまっちゃうよ～」
しまっちゃうおじさんがジンに寄り、掴もうとする。ジンは完全に動かなくなっていた。

しかし、ジンをしまっちゃうおじさんが掴む前に空港が揺れた。
「しまった、ポートランドの崩壊が予定より早くなったか！」
しまっちゃうおじさんの顔に動揺の色が浮かぶ。空港の滑走路がひび割れ、グミシップが割れ目に落ちる。
「しまった！　目を持つ者が落ちる！」
ジンもまた、割れ目に引き込まれていった。しまっちゃうおじさんは駆け寄るが、落下に間に合わなかった。
「逃がしたか！　悪運の強い子め！」
しまっちゃうおじさんは悔しそうに地面を踏み鳴らす。その間、空港だけでなくポートランド全体が崩壊していった。

ビジネスマンションでは、ルーアが揺れに堪えながらジンの帰りを待った。不安の表情であるが、目はしっかりとジンが向かった停泊港を見据えていた。
「ジン、大丈夫かな……？」
部屋が斜めに傾く。マンションが割れ目に引き込まれてるのだ。
「ジン……」
ルーアは友人の無事を祈りながら、割れ目にマンションと共に転落した。

▼

この日、世界政府の拠点【ポートランド】は崩壊した。

1　漆黒の騎士（前書き）

世界ガイド

トワイライトタウン

キングダムハーツシリーズに登場する世界。夕暮れの町。現在、王様により世界を失った人々の避難所になっている。

町に路面電車が走り、地下通路も広がる。イベントが行われる広い空き地や時計塔もある。

1　漆黒の騎士

トワイライトタウン　屋敷

ここは常に夕暮れの、煉瓦造りの町、トワイライトタウン。
名所という名所はなく、強いて言えば駅の時計塔くらいしか見るものはない。町中に地下道が通い、町の外れの森には怪しげな屋敷がある。
その屋敷の部屋で、新聞を読む者がいた。赤い装束に身を包み、顔すら赤い包帯で隠した男だ。部屋は書斎みたいなもので、大量の資料が棚や机に置かれている。今、男が座ってる椅子の前にある机にも、資料が大量にある。机の脇に置かれた冷蔵庫が異彩を放つ。
「ふむ。ルーウェンの言う通り、もう新聞やテレビは信用出来ないな。世界間ネットを見るか」
男は新聞を畳むと、ごみ箱に放り投げた。普段からそうやってゴミを捨ててるせいか、最近は百発百中の勢いでごみ箱にシュートできるようになった。新聞がごみ箱に入ると同時に、書斎の扉がノックされる。
「ディズ先生ー。パトロール終わりました」
「そうか。ああ、そうだ。ちょっとわからないことがあるから来てくれないか？」
ディズと呼ばれた男はノックした人間を部屋に呼ぶ。部屋に入れられたのは、黒いフード付きロングコートを着た、銀髪の少年だった。
「ルーウェン。世界間ネットの見方だが……」
「画面に青いｅのマークがありますよね？　それを押して下さい」
「こうか？」
ディズはノートパソコンを開いて、ルーウェンと呼んだ少年の言う通りにｅのマークを押した。しかし、少年が言ったのはクリック

のことで、ディズは画面をタッチして押そうとしている。
ルーウェンはディズの近くまで行き、パソコンを操作して教えた。
「あー。ここにあるこれをこう動かして、こう」
「なるほど」
ディズはようやく理解した。元々頭のいい人間なので、この程度のデジタルデバイトは乗り越えられる。
しばらくネットを見ていたディズだが、あることを思い出したように言った。
「ハネカワが呼んでいたぞ、ルーウェン。なんでも、お前が拾った奴が目を覚ましたとかな」
「羽川さんが？　じゃ、行ってきます」
ルーウェンは書斎を後にした。ディズは机に置かれた資料のうち、表紙にジャンプと書かれた雑誌を取り出しつつルーウェンを見送った。

屋敷　客室

この屋敷にはいくつも客室がある。ディズは主人だが、ルーウェンや先ほど話題に上がった羽川という人物も、基本的に客室を利用して暮らしている。
「羽川さん、呼びました？　おっと、ナミネもいるのか」
ルーウェンはあるノートを持って普段は空いてる客室に入る。そこには、眼鏡にみつあみの優等生スタイルでキメた羽川翼と、白いワンピースに金髪が特徴のナミネがいた。この屋敷は元々ディズとナミネしか住んでなかったが、ある事情により羽川とルーウェンが暮らすことになったのだ。
「ルーウェンくん、来た？」
「来ましたよ。で、そいつの容態は？」
「怪我は大したことないけど、不思議なのは治りが早いことかな？」

羽川は部屋にあるベッドを見た。ベッドには茶髪の少女が寝かされている。傍らの椅子にはナミネが座っている。

「俺的な気掛かりは、コイツの左肩にこのマークがあることだが……。これはなんだ？」

ルーウェンは手にしたノートを羽川に見せた。そこには、目を象ったマークが描かれている。

「黒歴史ノートね。ルーウェンくんがリアルアースの住人なら、世界の情報ってことで納得いくけど」

ルーウェンが見せた黒歴史ノートとは、ルーウェンが故郷の世界、リアルアースで書いた小説の設定だ。あまりに中二臭いので、羽川には黒歴史と呼ばれている。

リアルアースとは、この世界において特殊な立場にある世界である。リアルアースはトワイライトタウン初め、様々な世界の情報を受信する。リアルアースで漫画やアニメと呼ばれるものは、作者がその情報を受けて作ったものだ。

さらにルーウェン達リアルアースの住人は、リアルアースを一歩出ると姿や能力が一変する。これに関しては、ディズも理由がわからない。そもそも、リアルアースという世界の存在すら知らなかったのだ。

「ルーウェンも彼女の住んでた世界はわからない。けど、ソラに繋がる人ではない。それはわかる」

ナミネが口を開いた。ナミネは『ソラとソラに繋がる者の記憶を操る能力』を持つ。彼女がそう言うからには、この少女はソラと無関係ということになる。リアルアースの仕組みから、世界に詳しいルーウェンも少女のことを知らなかった。

「こりゃ、本格的にモブキャラの可能性が出てきたな……」

「あれ？　ルーウェンくん、これ」

ルーウェンが少女をモブキャラ認定したが、黒歴史ノートをめくっていた羽川がなにかを見つけたようだった。

「なんすか羽川さん？」

「多分、その子の名前はジンよ。ノートに書いてある設定と一致する」
「なん……だと……？」
ルーウェンはノートを確認した。名前はジン・クレッシェンド。茶髪に金眼、身の丈ほど長い刀を背負って戦うなどなど、少女の特徴に一致する。拾った時の服装や、壁に立て掛けられた刀が、彼女をジンだと証明していた。
「う……」
「あ、起きた」
「ちょうどいい。本人に聞こう」
話し声が聞こえたのか、少女が目を覚ました。開いた目は金眼だった。初めに話し掛けたのは羽川だ。
「大丈夫？　どこか痛まない？」
「ここは……くっ！」
羽川の言葉に反応した少女は起き上がったが、傷がまだ痛むようだ。脇腹を押さえて苦しそうにした。
「聞きたいことは山ほどあるが、名前だけ今は聞こう。俺はルーウェン・ヴァイサス。こっちの優等生が羽川翼で、こっちはナミネ」
「私は……ジン。ジン・クレッシェンド。ここはどこだ？」
ジンは周りを見渡して、場所を確認する。とりあえず、彼女がジンであることはわかった。
次にジンは自分の状況を確認する。服はパジャマに代えられ、傷の手当がしてある。しかし、傷の手当がされてるという現状がジンをある不安に駆り立てた。
「まさか、見たのか？　目を！」
「ここはトワイライトタウン。目ってのが入れ墨のことをいうなら、見たな」
「っ……！」
ジンの身体が固まる。左肩を押さえて硬直することしかできない。しかし彼女は、そこでふと気が付いた。サイクロプスの目を見た者

は例外なく、彼女を迫害した。けれども今のジンは、目を見られているのにぬくぬくと寝ていられた。これはどういうことだろう。
「見られたくないってなら謝るが……」
「いや、別に構わない」
「そっか」
ルーウェンは謝ったが、ジンは布団を被って寝ることでやり過ごした。下手に目の事情を話して、目の意味がバレてもまずいからだ。
ジンは何故だか全身から力が抜けるような気分だった。妙な安心感があった。いままでは目のことがバレないように気を使って過ごしていた。けれど、今は目のことを気にせず休める。少なくともルーウェン、羽川、ナミネの三人は目の意味を知らない。
（こんなにゆっくり眠れるの、いつ以来だろ）
ジンは重くなったまぶたをそれに逆らわず、閉じた。布団のせいか、温かい気持ちに包まれた。
（そうだ。ジンと暮らしていた頃以来だな）
ジンとは本来、彼女の名前ではない。彼女の恩人の名前だ。そんな大事な人のことを思い、ジンは少しだけ泣いた。
（ルーウェン、翼、ナミネ……か。この三人なら、少しだけ心を許してもいいかな？）
ジンは目がある関係か、人に心を許さない。心を許して親しくなっても、もし目が発覚したらその分辛いだけだ。だけれど、この三人は目の意味を知らない。なら少しだけ、心を許しても構わないかと感じた。
ジンは三人の存在を確認する。そこでふと、あることに気付く。ルーウェンは目を見た。傷は手当てされてた。傷は当然、服の下にもあった。
「っ……！」
ジンは顔が熱くなる感覚を感じつつ、勢いよく起き上がる。そして、壁に立て掛けられた自分の刀まで跳び、それを抜き放つ。抜いた刀をルーウェンの首筋に近づけた。

「見たのか？」
「見たから謝るって言ったよねさっき。まさかの無限ループ？」
ルーウェンは慌てたように言った。言葉からするとルーウェンはジンの台詞の意味を理解出来てないようだ。ジンの言いたいことを察した羽川が、ジンに告げる。
「大丈夫。手当ては私とナミネでしたから、ルーウェンは見てないよ」
「ああ、なんだそうブァ！」
ルーウェンがジンの言いたいことを察した瞬間、ジンが峰でルーウェンの首筋を打つ。ルーウェンは盛大に壁へ吹き飛んだ。
ジンによる、最大級の照れ隠しだった。

数分後

「俺の世界、リアルアースも羽川さんの世界、フェイクテイルズも壊されたわけだが。どうも原因がわからんな」
ジンの強力な照れ隠しを喰らったルーウェンは復活して、状況を説明した。ジンの世界、ポートランド以外にも崩壊した世界はあるようだ。ジンはベッドに座ってそれを聞いていた。
「リアルアースって世界が案外特殊でさ、他の世界と違うみたいなんだ。まず、俺の現在の姿はリアルアースの姿とは違う。リアルアースは世界中の情報を受けとって、それが漫画やアニメになる、とかな」
「リアルアースが崩壊してから2ヶ月。政府からは発表はなにもないの」
ルーウェンの言うことには、リアルアースという世界は特殊らしい。ジンはそういう細かいことはわからないので、ナミネの情報に耳を傾けた。
「政府が？　行政を行うポートランドが崩壊しても、立法に関わる国会は別の世界にあるはず……」

「ポートランドの方は崩壊の理由がわかってるの。ディズさんの言うには、ポートランドには二つの指輪があって、それを何者かが奪う際にミスがあったようね。あの指輪は二つ同時に台座から外す必要がある。片方だけ外すと、もう片方を奪われないように、ポートランドという世界を崩壊させて指輪の所在をくらます」

そのプロセスを無視したからポートランドは崩壊した、と羽川は言う。ジンは指輪の話しを聞いて何かを思い出したように言った。

「そうだ、指輪！　私の首に、鎖で指輪がかかってなかったか？」

「えっと、これ？」

羽川は鎖を通された指輪をジンに差し出す。紅い宝石が散りばめられた、銀の指輪だ。

「よかった、流血のリング……」

「ポートランドの指輪って、そんな感じの奴か？」

大事な物だったらしく指輪が見つかってホッとしたジンにルーウェンが聞く。ルーウェンは自分の右手の薬指に付けた指輪を見せる。黒い宝石でできた盾の付いた、銀の指輪だ。気になったジンは聞いてみた。

「それは？」

「断罪のリング。この指輪の効果はわからないが、なんかすごいってディズが言ってた」

「確か、流血のリングは使用者が流した血の量だけ手にした刃物の切れ味を増すって効果があったな。その指輪はどこから？」

ジンは流血のリングの効果を思い出しつつ、ルーウェンに指輪の出所を聞いた。ルーウェンはあっけらかんと答える。

「昔、誰かからもらった。誰だっけ？」

ルーウェンが答えた瞬間、サイレンらしきものがけたたましく鳴り響いた。

「これって……」

「外敵侵入警報？」

ナミネと羽川がサイレンの意味に気付き、慌てたように言う。

「外敵？」
「このトワイライトタウンには、自分の世界を破壊された人達がたくさん避難してきてる。なかには非戦闘員もいるから、外敵は危険なの」
よく意味の分かってないジンに羽川が説明する。放送が現在、外敵に関する情報を流していた。
『トワイライトタウン駅に外敵発生！　姿からして無人遠隔捜査のマシナリーと思われる。至急、戦闘員は……』
放送はそれだけ流すと、いきなり切れた。そして、別の声で放送が入る。
『やあ、君らが抵抗勢力の【漆黒の騎士】だね？　早く目を持つ者を差し出して欲しいな。隠す子はしまっちゃうよ？』
「しまっちゃうって……。あいつ！」
放送を乗っとったのは、しまっちゃうおじさんだった。ジンを倒し、ポートランドを崩壊させた張本人だ。ジンは声ですぐにわかった。
「私が行く。あいつは私だけが狙いだ」
「死ぬ気か？　お前まだ病み上がり……」
ルーウェンの言う通り、ジンの怪我では万全の状態ですら倒せなかったしまっちゃうおじさんに勝てるわけがない。そんな奴と戦うとは、まさに死にに行くようなものだ。
「でも、私は行く！」
ジンは刀を背負い、指輪を鎖で首にかけて部屋を後にした。ルーウェンはやれやれと頭を掻いて、羽川に告げる。
「羽川さん。ロクサス達に駅の敵をやらせてください。ジンは俺が追います」
「わかったわ。ロクサスに伝える」

トワイライトタウン　空き地

トワイライトタウンの中心街、トラム広場の隣にある大きな空き地。そこは時々イベントが催されるくらい広く、何もないのだ。部屋を出たジンはそこにたどり着いた。正直スリッパでは走りづらかったが。

「はぁ、はぁ……。どこにいる！」

「やあ、君がジン君だね？　病み上がりなのに無理する子はしまっちゃうよ？」

「黙っ……れ。私が狙いなら、私だけ狙え！」

肋骨が折れてるせいで息をするだけでも苦しいが、ジンは刀を抜いて言った。

「じゃあ、遠慮なく……」

しまっちゃうおじさんは言うなり、ジンに接近した。そして、容赦なくボディーにパンチを撃ち込む。

「ぐっ……あ！」

「しまっちゃおうね～」

ジンが空き地の壁に激突したのを見届けると、しまっちゃうおじさんは手を振った。それと同時に、しまっちゃうおじさんの後ろの地面から巨大な岩倉がせりあがってきた。

「私のとっておきな岩倉にしまっちゃうからね～」

「な、それ……は」

岩倉の扉が開かれる。その瞬間、凄まじい重力がジンを襲った。

「まずい、吸い込まれ……」

「この岩倉の中は重力が発生しているから、なんでも簡単にしまえちゃうよ～」

ジンの体が浮き上がる。元々小柄というのもあるが、ダメージで力が入らず、その場に踏ん張れないのだ。

「うあっ！」

「しまっちゃうよ～！」

「風車斬り！」

ジンが岩倉に吸い込まれる寸前、何者かがしまっちゃうおじさん

に爆撃に近い斬撃を叩き込んだ。ジンは爆撃に吹き飛ばされ、横に反れたので重力から逃れられた。
斬撃を放った張本人は、上空から空き地に降り立った。当然、岩倉の重力に捕まらない位置だ。
「やれやれ、原作無視もここまでくれば笑い話だ。お前、戦闘要員じゃないだろ作品的に」
「だ、誰だね！　邪魔する子はしまっちゃうよ！」
しまっちゃうおじさんは斬撃で吹き飛ばされ、岩倉の淵に手を掴んでしまわれないように必死だった。
「ルーウェン・ヴァイサス。あと、名前を聞く時は自分から名乗れよしまっちゃうおじさん」
「ルーウェン、お前……」
斬撃を放った張本人、それはルーウェンだった。ルーウェンは背中に剣の鞘を背負い、フードを被っていた。鞘の中身である剣は右手にあった。ルーウェンは漆黒の片手剣をしまっちゃうおじさんに向けて言った。
「お前ら、何が目的だ？　冥土の土産くらいには聞いてやる」
「ぐぬぬ……。我々の目的は八元素のリング。ポートランドにある二つはちょっと失敗したけどしまっちゃったよ～。あと、世界中からエネルギーを集めてるけど、あのお方の考えは私にはよくわからない」
しまっちゃうおじさんは岩倉から出ると、重力に耐えながら答えた。全力でダッシュして、なんとか岩倉にしまわれずにいる。
「さあ、真実を知った子はしまっちゃうよ」
「出来るもんならやってみろ。俺はさっきの風車斬りで足を狙った。岩倉に吸い込まれるのは時間の問題だぜ？」
必死に走るしまっちゃうおじさんに対し、ルーウェンは余裕を見せていた。しまっちゃうおじさんは足を痛めており、走るのも苦しそうだ。
「だが、悪役はここで油断して、主人公に負ける。だが俺は容赦

無しだ！　風車斬り！」
ルーウェンは剣を振る。爆撃に近い斬撃がしまっちゃうおじさんを襲う。しかも、何十発と。ルーウェンは本当に容赦無しだった。
まるでグレネードランチャーを連発されてるかのような爆撃の嵐に、しまっちゃうおじさんは遂に耐えれなくなった。
「う、ぐぁー！」
「原作無視するような子はしまっちゃうよ」
しまっちゃうおじさんは地面から引きはがされ、岩倉に吸い込まれた。ルーウェンは黒いカードを取り出して呟いた。
「そうだ、これも持ってけ」
ルーウェンの投げたカードも、しまっちゃうおじさんと共に吸い込まれる。岩倉は地面に沈んで消えた。

同刻　暗い王座

「来たか。えらく苦戦したものだ」
黒装束で姿がよくわからない男が会議室みたいな部屋で呟いた。円卓が部屋の中央にあり男はそれに資料を並べて、近くの床からせりあがった巨大な岩倉を見た。
「サイクロプスは手に入ったか？」
男が岩倉に話し掛けるも反応がない。岩倉の隙間から滲み出る血を見た男は岩倉を開けた。そこには大量の血液と一枚のカードがあった。
「なんだ。とある世界のらっこが妄想したこの生き物がリアルアース住民のトラウマだと聞いたから具現化させたものを……。まいいさ」
男はカードを拾いあげる。カードは黒くて、そこに白抜きのマークと文字が書いてある。裏には盾と鳥の紋章に英語で『漆黒の騎士団』、表には十字架と英語で『ルーウェン・ヴァイサス』と記されている。

「漆黒の騎士団、ルーウェン・ヴァイサス……か」
男は作戦が失敗したのに面白いと言わんばかりに笑った。そして、両手を見る。左右の手にそれぞれ二つずつリングがはめられている。
「常闇のリングと天光のリングはポートランドから手に入れた。煌炎のリングと水龍のリングはすでに我が手のうち……」
世界を崩壊させた張本人は暗い王座に高笑いを響かせた。

トワイライトタウン　空き地

「さっき投げ込んだカードはこれか……」
ジンはベンチに座り、ルーウェンが岩倉に投げ込んだものと同じカードを見ていた。ルーウェンは応援にきた赤毛の男と話していた。
「ルーウェン、倒したのか？」
「ああ、余裕余裕」
ツンツンした赤毛の男はアクセルというらしく、えらく長身でルーウェンのものとはデザインの違う黒いフード付きコートを着ていた。
「お前、いきなり強くなったな……。この前までストラグルでロクサスはおろかピンツにも勝てなかったのにな」
「雛見沢行った時かな？　そこを境にいきなり腕があがったつうか」
ルーウェンの強さに関して釈然としない内容の話を聞いて、ジンは自分が真面目に修業したことをあほらしく感じた。
ルーウェンは首にかけたロザリオを丁寧に磨いている。コートのせいでジンはルーウェンがロザリオをかけてるなんて気付いてなかった。
「カードの十字架とそのロザリオは何か関係でも？」
「ああ、これは俺の師匠から貰った」
「師匠？」
やはりその強さはよい師匠を持ったからか、とジンは納得した。

一人の自分よりよっぽど訓練の効率がいいと感じたのだ。
「で、このカードの漆黒の騎士団ってなに？」
「それは俺達のチームの名前だ。トワイライトタウンに集まる世界を壊された難民達を守り、この異変を解決するために集まった」
ジンの疑問に答えたのはアクセルだった。
「最近世界中で、『タイガーフォース』を名乗る連中が八元素のリングと『目を持つ者』とやらを狙っている。当面の目的は奴らより先に八元素のリングを得ることだ」
ルーウェンが追加で説明した。タイガーフォースという組織がなんであるかジンには察しがついた。目を持つ者とやらを狙ってたあたり、しまっちゃうおじさんもその一員なんだろう。
漆黒の騎士団。ジンに行く宛てなど無いので、彼女はこの組織に身を置くことに決めた。

2．8月32日（前書き）

世界ガイド
どこかの山奥
『ぼくのなつやすみ』に登場する世界。平凡な昭和の夏休みを楽しめると大人に人気だが8月31日以降の日記を書こうとすると……？

2．8月32日

ジンが漆黒の騎士団に入団して三日目。傷も少し癒えたので彼女は仕事に参加する事にした。今、食堂でルーウェンに仕事の説明をしてもらってるところだ。机が並び、組織の人数に対し広いため全員がいるのに寂しく感じる。

「これがカードだ。敵対組織のメンバーを倒したらこれを置いていけ」

「なんでこんな目立つ真似を？」

ルーウェンから黒いカードの束を貰ったジンは呟いた。傭兵としての発想である。名が売れれば確かにフリーの傭兵なら仕事が増えるし、組織所属の傭兵は名が売れれば存在だけで組織の威厳を高める。ただ、それは傭兵の話。ルーウェン達漆黒の騎士団は傭兵ではなく、単なるタイガーフォースに対するレジスタンスだ。

「警戒されると逆に動きにくいんじゃない？　ユニバースみたいに防衛一方の組織じゃないみたいだし」

「そうかもな。けどさ、俺にはあるポリシーがあるんだよ」

ジンの意見にルーウェンは同意した。しかし、そんな戦略的なものより優先すべき理由が彼にはあるようだ。ジンはわけがわからず考え込んだ。

アクセルが二人の会話に入る。ジンにヒントを出すつもりみたいだ。

「漆黒の騎士団は仕事の関係上、人を殺さなきゃならない時がある。そうだな、これはルーウェンが初めて人を殺した時に考えたシステムだった」

「人を……、殺す？」

ジンが言葉を濁らせる。彼女は傭兵だが、モンスター専門なので人を殺すことはない。人と戦うにしても、やるのは拘束するまでだ。

「正解は、そいつを殺した事に責任を持つって意味だ。復讐なら

ぜひ俺までって。要するに、殺すからには殺される覚悟を持てってことさ」
ルーウェンが正解を言って立ち上がった。仕事には屋敷の裏に止めてあるグミシップで向かう。
「殺される覚悟、か」
ジンはルーウェンの言葉を復唱した。その言葉はどこかで聞き覚えがあったのだ。
『殺していいのは、殺される覚悟のある人間だけだ』
「え……？」
一瞬、ジンの脳裏に声が過ぎった。ちょっと自分の声に似てたが、自分はこんなこと言った覚えはない。
「どうしたの？」
声をかけられたので、ジンは振り向いた。そこにはアクセルと同じ黒いコートを着た黒髪の少女がいた。
「シオン。あれ？　ロクサスは？」
「先にグミシップに乗ってるって。ジンの補佐と、行く世界に興味が出たって」
シオンと呼ばれた少女はロクサスの居場所を答えた。ロクサス、アクセル、シオンの三人は漆黒の騎士団でも、外の世界に行かずトワイライトタウンを警護する役割にある。今回、ロクサスは新人であるジンの補佐のために付き添うことにしたのだ。

グミシップ

「俺の夏休みは、あと七日間で終わる」
「日帰りだ。残念だったな」
グミシップのロビー。その多少広いだけで何もない空間にロクサスとルーウェンがいた。ロクサスは金髪の少年で、普段はアクセルと同じコートを着てるが、今日は白基調の私服だ。ルーウェンと髪色や服装でいい感じに対照的だ。

「海がないのが残念だけどな」
「山奥だからな。今回は異変が起きてるし、遊ぶ余裕ないかもな」
ルーウェンは紙の束をロクサスに渡す。ロクサスはそれを見て驚きの声を上げた。
「え？　夏休みが続いてる？　８月３２日なんてあったか？　うるう年？」
「あー、たしかにうるう年ってなんで８月にもってこないんだろうな」
「４０日も休んで、まだ休むつもり？」
二人の他愛もない会話にジンが割って入る。彼女は確かにルーウェンやロクサスと同い年だが、傭兵であり学校には行ってない。それにジンが働き詰めるのはサイクロプスの目によっていろいろ考えるのを防ぐためだ。身体を動かさないと余計な事を考えてしまうため、なるべく休みをとらないようにしてる。サイクロプスの目で考えるのはどれも辛いことばかりだ。４０日も休んだらストレスで死んでしまうかもしれない。
「それよりルーウェンは、人を殺したことあるの？　アクセルから聞いたけど」
「あるよ。つっても、正確な数に入るか微妙だけどな」
「そう……」
ジンは自分の意識をサイクロプスの目から遠ざけるためにルーウェンに聞いた。朝言ってた、殺される覚悟のことだ。
「あ、もしかしたら殺される覚悟より殺す覚悟の方が大変かもよ」
「早く行こう」
ルーウェンが余計なことを喋る前にジンはグミシップを発進させるべくロビー先端の操縦席に座った。操縦席は椅子とモニターがあるくらいで、あとはハンドルしかない。足元にブレーキとアクセルがあるかもしれない。
グミシップは高速で浮上して、気付けば宇宙のような空間にいた。トワイライトタウンが惑星みたいに見える。

「目的地は？」
「自動操縦だ」
ロクサスの指示通り、モニターを自動操縦モードにして目的地としてインプットされた場所を選択する。ディズはユーモアに欠けるタイプらしく、目的地の名称は『目的地１０月６日』としか書かれてない。
「目的地って結局どこなの？」
「資料がある。それと、世界間ネットも忘れずに」
ルーウェンがジンに資料を渡す。単なる紙の束だが、これが行く世界の情報である。
世界間ネットとは、世界の王である人物が今回の敵、タイガーフォースが世界を跨いだ行動をしてるため世界中で情報を共有できるように作ったのだ。この世界間ネット設置にはリアルアースの住人も関わってるらしい。
「夏休みを楽しめる世界、か。夏休みマニアのロクサスが付いてきたのも頷ける」
ジンは資料を見ながら言った。別にロクサスは夏休みマニアではなく、単に夏休みに未練があるってだけなのだが。
「夏休みがまだ続いてるってどういうこと？」
「さあな。着いてからのお楽しみだ」
ルーウェンはジンの質問をはぐらかしつつ、窓の外を見た。

山奥　獣道

「ここに命樹のリングがある。八元素のリングがあれば、リアルアースを元に戻せると聞いたのだが……」
山奥に一人の少年がいた。中学の夏服らしい服を着た黒髪の少年だ。名前はバン・グローリー。リアルアースの住人だ。
「しかし漆黒の騎士団とはとんでもない奴だな！　殺した相手のところにこんなカード置いときやがって、まるで快楽殺人犯だ！」

バンは黒いカードを取り出した。そのカードにはルーウェン・ヴァイサスという名前と十字架が白抜きで書かれていた。
「そう思うだろクレア！」
「別に……。武器を持って相手を攻撃したら、それは殺されて当然なんじゃない？」
同意を求めたバンの声を、クレアと呼ばれた少女は一蹴した。金髪を伸ばした、赤い目をした少女だ。白い騎士装と鎧を纏っている。手には槍が握られていた。
「まったく、クレアはわかってないな。相手を殺しては意味がない。大事なのはわかりあうことさ」
「相手が殺す気満々だったら無理かもね」
クレアはやれやれとお手上げのポーズをとった。立派な思想ではあるが、実現する力がなければ結局口先だけなのだ。
「あれは、グミシップか？」
バンは空を見上げると走り出した。クレアは一応追い掛けるのだった。

広い邸宅　庭

ジン達が着陸したのは、大きな家の庭先だった。着陸といっても、グミシップは浮上しておりジン達は飛び降りたのだが。
「この家、誰もいないな」
「見ろよロクサス。この家焼き物やってるぜ」
「あ、本当だ。離れに工房がある」
「うわー！　棚が崩れた！　ロクサス、キーブレードだ！」
ルーウェンとロクサスの会話にジンは頭を抱えた。さっきまで人を殺すの覚悟なのと言ってたからシビアな任務が待ってるかと思えばこの始末。本来人の気配がしない建物ほどやばいというが、この二人にはその基本セオリーがわかってないようだ。
「なんの、一文字スラッシュ！」

「キーブレード、必要なかったな」
「あー！　今度は牛小屋に！」
ジンは完全に呆れ、二人を呼び戻すことにした。このままでは奇襲されたら一巻の終わりだ。こんなに緊張感のない戦闘要員をジンは見たことがなかった。ユニバース所属の同僚もプライベートでふざけてこそいれど、仕事の時は連携の為の軽口が精々だ。
「ちょっと、ロクサス、ルーウェン！」
「牛がキレたぁー！　ロクサス、キーブレードだ！」
「なにやってんだ！」
ロクサスとルーウェンが走って戻ってきたと思ったら牛に追い掛けられていた。牛は怒り狂っておさまりそうにない。
ジンもルーウェン達につられて牛に追い掛けられた。横に逸れればよかったが、あまりに突然のことに避けきれなかった。敵襲ならまだしも、味方が牛を怒らせるとは。
「この家は牛も飼ってるのか」
「ルーウェン！　なに遊んでるの！」
「俺が悪いみたいにいうな！」
状況を冷静に分析するロクサスとは対照的にルーウェンとジンは全力で逃げた。牛という生き物はなかなかに早い。プロの傭兵にすら追い付きそうだ。
気付けば家を出て山道にいた。そして、前には人影。
「誰だ？」
「敵か？」
牛に追い掛けられるというマヌケな構図ながら、ロクサスとジンは警戒した。世界を巡るにはグミシップが必要だ。一応、グミシップはすべて王の管理下にあり、漆黒の騎士団にもグミシップの運用状況は伝わる。事前にその手の情報がなかったため敵の、つまりタイガーフォースの可能性を考えたのだ。
「お前がルーウェンか！　この快楽殺人犯め、倒してくれる！」
「面倒臭い中坊だな……。コイツは俺がやろう。お前らは仕事を

続けろ」
人影は中学の夏服を着た人物、バン・グローリーだった。ジンとロクサスは脇に逸れ、牛の追撃を振り切った。
「これ以上命を奪うのをやめろ！」
「やれやれ、お前はなにもわかってない」
「なに……？」
ルーウェンは牛に追われながらバンに向かって走る。
「というわけでくらいやがれ。猛牛アタック！」
そして、飛び上がった。牛は飛んだルーウェンの下をくぐり抜け、バンに激突した。
「ギャアアァァ！」
「悪いな。俺の相手は俺だ」
ルーウェンは声高らかに宣言した。

広い邸宅　子供部屋

「仕事はたしか、原因の調査よね……？」
ジンは仕事をするために着陸した家にとんぼ返りした。仕事とは、今だに八月が続いてるというよくわからない状況を調査することだ。
ベッドと机のある狭い子供部屋をジンは調査していた。そこで彼女は興味深いものを見つけた。絵日記だ。
「なにこれ？　８月６７日？　どうなってるの？」
その絵日記はいろいろと奇妙だった。ベッドに腰をかけて読んでいると、８月３１日以降が奇妙なのだ。いや、この絵日記すべてが奇妙であることにジンは気付いた。
「なにこれ……？　書いたページの上からまた８月３２日以降の日記を？」
その絵日記は何度も同じページに日記を書いたあとがある。辛うじて日にちだけ読み解けたが、それ以外の内容はさっぱりだ。始めのページなど、三回ほど上書きされていた。

「よくわからない」
ジンは絵日記を机に置くと家を出た。家は調べつくした。住人がいない。離れと牛小屋はルーウェンが壊してしまった。もう家にめぼしいものはない。
「スターズ……」
「へ？」
庭に出たジンは声を聞いた。声の方を振り向くと、そこには黒いコートを着た大男がいた。肌が爛れ、所々紫色の触手が覗いている。
「こいつは！」
ジンが知るよしもないが、ルーウェンなら、リアルアースの情報で彼の正体を見抜いたはずである。
「ユニバースのデータバンクにあった、追跡者？」
追跡者ネメシス。ある世界で開発された生物兵器だ。コートにはタイガーフォースとアルファベットで刺繍してあり、タイガーフォースに所属してあることがわかる。
「化け物の相手は私の役目、か」
さっきまで人を殺すのなんだの迷いのあったジンの瞳は、まっすぐにネメシスを見据えた。

山奥　獣道

「何を調べたらいいかも、わからないなんて」
ロクサスは自虐気味に呟いた。夏休みといえば海とばかり考えていたロクサスは、山でやることがわからないのだ。
「あ。あれは？」
ロクサスは目の前を虫が横切ったのに気付いた。大型の甲虫、ヘラクレスオオカブトだ。しかも、羽の部分がなんか白い。
「これは、ヘラクレスリッキーブルーじゃないか！」
ロクサスはカードの絵でしか見たことのない虫を追い掛けることにした。

山奥　町へ下りる道

「何故人を殺す！」

「あっちが殺そうとしたからだ！」

バンとルーウェンは死闘を繰り広げていた。バンの武器は篭手が大型化したナックルだが、ルーウェンと互角だ。下る道のため、相手より高い位置にいることが勝負の鍵だ。牛はバンに殴られ、気絶していた。

「何故むやみに殺す！　無力化するだけでいいはずだ！」

「相手が殺す気ならこっちも殺す気でいかねぇと死ぬんだ！　わかったか中坊！」

「それは甘えだ！」

バンが両手の拳を使うのに対し、ルーウェンは片手剣のみ。手数に差があるはずだが、ルーウェンはバンの攻撃をすべていなしている。実力はルーウェンの方が上だ。

「甘えだと？」

ルーウェンとバンは言い争いながら戦っていた。バンにはルーウェンが戦った相手を殺す理由がわからないのだ。

「そうだ。それは甘えだ、ルーウェン・ヴァイサス！」

「バンとか言ったな……。誰一人殺す覚悟がなくて、なにが守れる？」

二人は手を止めた。ルーウェンが上の方にいる。バンはルーウェンの考えが理解できないとばかりに叫ぶ。

「誰かの犠牲の上に生かされて、その人は嬉しいと思うのか！　俺は誰も殺さず、リアルアースを復活させるためにタイガーフォースに入った！」

「リアルアースの住人、か。やれやれテンプレ批判乙。たいてい犠牲になる奴って、守りたい奴の命を狙ってるんだろ？　なら殺すのが一番そいつを安心させる方法だ。人の命を守るってのは、そん

な甘い発想で出来ることじゃねぇ！」
「この人殺しめ！　そんなのは間違ってる！　敵だった奴も、いつかは仲間になれるかもしれない！　その可能性をお前はみすみす見逃すのか！」
バンにそう言われたルーウェンはというと、やれやれお手上げだと肩を竦めた。
「握り拳とは握手できないさ。今の俺とあんたがそうだ。もしそんな可能性があるなら、戦ってる時にわかる。もう一度聞こうバン・グローリー。お前の目的はなんだ？」
「俺の目的は、なにも奪わず、なにも失わず、リアルアースを取り戻すことだ！」
バンは拳を突き上げ、宣言した。ルーウェンはそれを見下す目で見ていた。
「お前はその目的のためになにを捨てた。俺は捨てた」
「人の命をか！」
「いや、自分の潔白さ。俺には守りたいものがある。今の仲間、羽川さん、ナミネ、ディズ、ロクサス、アクセル、シオン、避難所のみんな、そんでジン。守りたいものは大きくなる一方だ。俺は、それを無くしたくないから、代償を払った。これがその代償だ！」
ルーウェンが歩き出し、バンが身構える。ルーウェンから溢れるほどの闇が流れ出す。
「うっ！　いきなり持病の心臓病がヤバくなったぞ……！　あとは、頼む……。バタリ」
そして、苦しんで倒れた。
「な、なんだ？　おい、大丈夫か！」
バンは今まで戦っていた相手だということを忘れ、ルーウェンに駆け寄る。
しかし、それは罠だった。
「スキあり！」
「ぐあっ！」

ルーウェンはバンが近づくのに合わせて起き上がり、アッパーを決めた。バンは吹き飛び、かなり道の下の方で頭を打って動かなくなった。

「これが俺の代償だ！　正々堂々だの、もう捨てた！　ようは勝ちゃいいのさ！　頭の打ち所が悪かったかな？　死んだだろうし、おいていくか」

ルーウェンは黒いカードをコートから取り出し、バンに投げた。ルーウェンは仕事をするため、家へ戻った。

広い邸宅　庭

「くそっ！　強い……！」

ジンはネメシスに押され気味だった。傷が完治してないこともあり、一挙一足が身体に響く。

自分の攻撃すら傷に響くため、なかなか攻撃を出来ずにいた。そのため、彼女に分の悪い防御中心の戦いになってしまう。ジンの持ち味は（本人は認めたくないが）小柄な身体を生かして高速で敵の懐に潜りこむ攻撃主体の戦闘。傷が原因で速度を出せず、そのスタイルができないのだ。

「どうすれば……」

ジンは考えた。しかし、まともに頭を使って戦ったことのないジンには難しい。考えてるジンの耳に、エンジン音が鳴り響いた。

「ヤッホー、ジン～」

「ルーウェンっ？」

ルーウェンがバイクに乗ってやってきた。バイクはウイリー走行をしており、そのままネメシスにぶつかった。ネメシスはよろけて倒れた。

「今だ！」

困惑するジンにルーウェンの声がかかる。ジンは我に返り、立ち上がろうとするネメシスに駆け寄った。

「流星、」
ネメシスが彼女の姿に気付いた時には、すでに遅かった。ジンは太刀を横に薙ぎながら駆け抜けた。
「極爪！」
ネメシスの身体に一筆書きで星を書いたような切り傷が刻まれる。ネメシスは崩れ、動かなくなった。
「そのバイクどうした？」
「グミシップに積んであったの忘れてた。サラマンダーだ」
ジンはルーウェンのバイクに目を向けた。漆黒の大型バイクである。サラマンダーという名前にはジンも聞き覚えがあった。
「サラマンダーって、グリフォンやフェンリルに並ぶバイクブランドの？」
「まあ、グリフォンみたいなデザイン重視のでくのぼうより速いけどな。オフロードはフェンリルの専門だが、オンロードならサラマンダーだ一番速い。初仕事の後に世界まわって修業しててさ、その時に手に入れた」
「なるほど。私もバイク持ってるが、軍用のバハムートって味気ない奴だな」
「バイクトーク中悪いが、こちらを向いてもらえると助かる」
バイクトークに花を咲かしてる二人に、不意に声がかかる。少女の声で、やたら凛としていて落ち着いている。そこには白い騎士装をまとった金髪の少女がいた。伸びた金髪が夏の風に吹かれ、優雅になびく。
「バンを倒したようだな。なかなかの腕だ。私はクレア・ハーディ。強さを追い求める者だ」
クレアは緑色の、豪華な飾りが付いた厚い本を持っていた。
「君の信念はなかなか見上げたものだ。なにかを守るために、自分の潔白、つまり自らの安全や平穏を率先して捨てる。私程度にはとても追いつけない領域だ。そして、そうした者は強い」
クレアは本の飾りの中央から指輪を取り外した。それは緑の宝石

が付いた、葉を模したデザインのものだった。
「これは命樹のリング。八元素のリングが一つ。これがあればリアルアースが復活したり、フロントワールドって兵器が動いたりするとの話だが、私にそれは関係ない。これを狙って強い奴がたくさん来るってだけで、私は充分だ」
「八元素のリングだと？」
ルーウェンがクレアの長い言葉にようやく入れた。クレアはルーウェンを見つめて言葉を続ける。
「そうだ。この本がこの夏休みが終わらない原因だ。この家の日記帳から思い出を吸い取り、命樹のリングに力を与えていた。ルーウェン・ヴァイサス、これは再会の約束だ。リングが欲しければ私を追い、タイガーフォースに抗え。本来なら今戦いたいところだが、君はすでにバンと戦った。連戦は君が不利になる」
クレアは緑色の本をルーウェンに投げ渡し、ネメシスの足を掴んで引きずっていった。
クレアの姿がなくなると同時に、二人の前に一人の少年が現れた。少年は顔や服の配色がめちゃくちゃで目も当てられない状況だ。
「ルーウェン！　本、見てっ！」
ジンの声を聞き、ルーウェンが渡された本を見た。本は勝手にパラパラとめくれ、文字が溢れだした。文字は光になり山に降り注ぐ。山の緑はたちまち紅葉していく。暑い空気は冷えていった。
「どうなっているの？」
「この本が、一人のガキの妄想を具現化したみたいだな。ディズが言ってたけど、八元素のリングってのは大半が未完成なんだ。この本は多分、命樹のリングを完成させるための装置なんだと思う」
ルーウェンはジンに本を渡しながら、彼女の疑問に答えた。ジンは本の表紙裏を見て呟いた。
「命樹のグリモア。我、人の思い出を得てリングを生むものなり。つまり、思い出がリングの栄養ってこと？」
「多分な。詳しくはディズに聞かないとわからないや」

ルーウェンとジンは、秋の装いとなった山を眺めた。秋の風がジンの頬を撫でる。

思い出。彼女にとっては楽しい思い出よりも悲しい思い出が多い。思い出を栄養にするということがまだ、ジンには理解が出来なかった。

3．ルーウェン・ヴァイサス散る（前書き）

世界ガイド　バロウズ邸

クロックタワーに登場。迷路のように入り組む大邸宅。迷いやすい点とシザーマンに目をつぶればよい物件。つまりわけあり物件。

3．ルーウェン・ヴァイサス散る

トワイライトタウン　屋敷の会議室

「原因がわかった。恐らく命樹のグリモアは焦っていた」
会議室にディズとジン、羽川はいた。先日の任務で見つけた命樹のグリモアが異変を起こした原因がわかったのだ。
「焦ってた？」
「このグリモアは命樹のリングを完成させるための装置に過ぎない。思い出という栄養を得るための消化器官のようなものだ。何らかの理由で命樹のリングの完成が急がれ、栄養をより多く得るために夏休みを続けたと考えるのが妥当だ」
「夏休みって、思い出がたくさん出来るもの。思い出が欲しかったら夏休みを繰り返すのが一番早いわね」
ディズの解説に羽川が付け足す。命樹のリング完成と共にグリモアが夏休みの呪縛を解いたのも納得できる。
「理由はだいたいわかったけど、夏休みってのは思い出を大量に残すものなのか？」
ジンは夏休みをあまり知らず、メカニズムは理解出来たが夏休みの実態を掴めずにいた。
「夏休みってのはそういうもんさ。ま、俺ら受験生は大変なだけだけどな」
「ルーウェンって、『受験生』だったのか？　言葉は知ってるが受験生ってのもよくわからない」
ルーウェンが会議室に入る。手には前回の仕事の報告書がある。
「ああ、高校受験の真っ最中だ。幸い、羽川さんのおかげで学校通うより成績がうなぎ登りだがな」
「高校？　ルーアも時々言ってたっけ」
ジンはポートランドの友人に思いを馳せる。世話焼きで、なにか

と助けられた。今はどこで何をしてるのやら、少しだけ気になっていたところだ。
「ルーウェン。情報が入った。リアルアースの住人が目撃された。この写真だ」
「これは？」
ディズがルーウェンに一枚の写真を見せる。その写真には一人の少女が写っていた。ルーウェンはその写真をまじまじと見て言った。
「こいつ、リアルアースでのクラスメイトじゃないか！」
「え？」
「やはり、か。リアルアースの住人はリアルアースにいた時と姿が違う。が、知り合い同士なら認識可能。トラヴァースタウンでそんな研究結果が出ていたのでな」
「しかも俺の片思いの人じゃないか！」
ディズの解説もそこそこにルーウェンはソワソワしだした。片思いだそうだ。
「今回の仕事は彼女と接触し、避難所に連れて来ることだ。グミシップのメンテナンスが済み次第向かえ」
「了解！」
ルーウェンは走って会議室を出て行った。ジンはなにやら釈然としない気持ちでそれを見ていた。

トワイライトタウン　避難所

ジンは気づくと避難所まで来ていた。ルーアのことを考えていて、知らないうちに着いていたのだ。
町に設置された避難所では今も多くの人々が暮らしている。王様の支援のおかげか生活には困らない段階まで来てるが、被災者の自立など、課題はまだある。マンションみたいなもので、避難所というより仮設住宅に近い。
「初めまして。貴女が新しい漆黒の騎士団メンバー？」

「え、ええ」
避難所の近くにある公園に入るといきなり声をかけられた。声をかけてきたのは金髪の女性だ。羽川と同い年か少し上かもしれない。
「私はヨヨ。よろしく」
「ジン・クレッシェンドだ」
ヨヨとジンは互いに自己紹介した。ヨヨという名前はちょっと耳にしたことがある。どこかの世界の王女だった。
「ルーウェンはどうしてる？　最近あの子、顔見せないから」
「大丈夫だ。生きている」
「そう。ならたまには顔を出すように言っておいて。あの子、かなり無謀なことやるから。貴女も、トリートメントくらいした方がいいかもね」
ヨヨはジンの茶髪に触れて言った。ジンは服装などオシャレをしない。気にかけるのは最低限の身嗜みのみだ。髪は整えているが、実は痛みまくって体以上にボロボロなのだ。
「あ、ああ」
ジンもルーアと同じ空気をヨヨに感じたからか、拒絶は出来なかった。

トワイライトタウン　空き地

「すげぇロクサス！　こんな虫どこで捕まえたんだ？」
「仕事で行った世界で捕まえたんだ」
ロクサスとその友人である少年、ハイネは空き地のベンチに座って話していた。ロクサスの持っている虫かごには、ヘラクレスリッキーブルーが入れられている。
「それよりさ、八元素のリングは見つかった？」
「この前相手に一つ渡った」
そんなネガティブな情報を流しつつ、ロクサスは夕暮れの町を眺めていた。

グミシップ　ロビー

「で、準備出来たと聞いたから来たのに、こいつの浮かれようはなによ」

グミシップに来たジンはルーウェンがやたらソワソワしてるのを目撃した。

「目的地はバロウズ邸、か。一つの世界の、誰の家かなんてよく特定したわね……」

「バロウズ邸はお化けが出るって有名なんだ」

「お、お化け……？」

お化けと聞いた瞬間、ジンの顔色が変わった。お化けとかダメなタイプかもしれない。

「お化けとか苦手か？」

「そ、そんなことはない！」

ジンは必死に否定するも、お化けが嫌いだと顔に書いてあるような状態だ。凶悪モンスターに立ち向かうユニバースの傭兵にも弱点はあるのだ。

「んじゃ、いっちょ行きますか！　バロウズ邸へ！」

ルーウェンはモニターに向かって、自動運転の操作をした。

コントロールルーム

「これが、フロントワールド」

黒装束の男が、中央に大きな羅針盤のようなもののある部屋にいた。部屋は広く、部屋の隅に縁取るように水が流れている。

「リアルアースという結界を得ることで封じられていた最終兵器。リアルアースの住人すら防衛システムの一環に過ぎない、か。封印が解け、姿形の変わったクレア君やルーウェン・ヴァイサスが高い戦闘能力を有するのも理解出来る」

男は羅針盤の淵を指でなぞりながら呟いた。羅針盤にはサイクロプスの目が刻まれている。ジンと関係があるのだろうか。
「そういえばバン君の友人が仇討ちに必死になってたな。バン君は生きてるのに、せっかちな子だ。まあ、ルーウェンがこの程度で負ければそれまでの戦士でしかないということか」
男は羅針盤を見ながら、これからの計画を組んでいく。世界を統一する為の計画を。

バロウズ邸　ロビー

「あ、お客さんみたいよ暁美さん。出るね」
「その必要はないわ」
豪邸というより迷路に近い間取りを持つバロウズ邸。そのシックな佇まいをしたロビーに二人の少女がいた。一人は栗毛のよくいそうな感じの少女。彼女がルーウェンの片思いの人だ。
「またシザーマンを奪いに来た連中かもしれない」
もう一人の少女は長い黒髪をなびかせ、地味な色合いやデザインではあるが魔法少女のような衣装に身を包んでいる。彼女は魔法少女の暁美ほむら。ざっくりいうと現在、バロウズ邸はほむらのものだ。
彼女がバロウズ邸に来た当初はシザーマンがいたが、どうやったのか鋏を奪って樽に押し込めてしまった。魔法少女とは恐ろしい。その後、リアルアースが崩壊してバロウズ邸に行き着いた栗毛の少女を住ませている。
「タイガーフォースの人ですね……。暁美さんに任せる」
栗毛の少女はほむらに来客を任せると、ロビーの奥へ行った。ほむらはゴルフクラブを取り出し、玄関へ向かう。
「ちわー。漆黒の騎士団でーす」
扉の向こうから声がした。ほむらは慎重に声の主を確認した。
「馬鹿ね。そんな怪しげな団体の名前出して開ける人いない」

扉の向こうからは少年の声以外に少女の声も聞こえる。タイガーフォースの連中は今まで、男しか来ていない。女性を連れて来たのだろうか。
「新聞と魔法少女の契約なら間に合ってるわ」
ほむらは漆黒の騎士団と名乗る二人に返事をした。しばらく二人はキョトンとしたように黙った。
「魔法少女？」
「クロックタワーに魔法少女はいなかったな。なら、他の世界から来た奴だな」
（こちらの正体を知らない？）
タイガーフォースとほむらはシザーマンを巡り何度か戦闘した。ただ、人の家に土足で上がり込むタイガーフォースが悪く、ほむら自身はシザーマンなんかいらないと思ってるが。
それなのに扉の向こうの二人はこちらの正体に気付かない。タイガーフォースではないとほむらは判断した。
「入って」
「お、センクス」
ほむらが扉を開けると黒コートで銀髪の少年と、茶髪の少女がいた。少年はほむらの一つ年上くらいだった。さっさと屋敷の奥へ歩いていく少女は同い年だと判断した。
「俺は漆黒の騎士団メンバー、ルーウェン・ヴァイサス。こっちはジン。実は、こいつを探しててな」
ルーウェンと名乗る少年はコートの懐から写真を取り出す。それには栗毛の少女が写っていた。ほむらは思わず驚く。
「メイ……？」
「知ってるのか。メイ、か。この世界じゃその名前なのな。俺はメイと同じ、リアルアースの住人だ」
ルーウェンは事情を説明した。ほむらは少し、彼のここを訪れメイを探した目的に興味が出た。

バロウズ邸　中庭

「一つ、聞きたいことがある」
「なに？」
「リアルアースが崩壊した時の状況」
ほむらとルーウェンがロビーで話し込んでる間、ジンはこっそり屋敷の奥へ向かった。少しでも屋敷の情報が欲しかったのだ。歩くうちに中庭に出て、栗毛の少女メイと会ったのだ。
中庭にはプールがあり、泳げないジンはプールの必要性に疑問を感じたが今は黙殺することにした。
メイは頭を捻ってジンの疑問に答える。
「うーん。いきなり崩壊したから、わからない」
「なら、崩壊の前に異変はなかった？」
「それならあるよ。日本中に大きな建物がたくさん建てられた。新型の発電所だった」
ジンは新型の発電所という言葉に注目した。ルーウェンも同じことを言っている。ディズも『新型の発電所』以外、情報のなさ故仮説しか立ててなかったが、リアルアース崩壊の原因はわかった。いや、もしかしたら羽川やヨヨの住んでた世界の崩壊理由も同じかもしれないとディズは言っていた。
「新型の発電所が、もしも世界からエネルギーを吸い出す施設だとしたら、エネルギーを吸い尽くされて世界は崩壊した、か」
ジンはディズの仮説を呟いた。普段はアイスばかり食べていて、研究者にそぐわない服装をしてるディズだが、研究者としての頭脳は天才的なのだ。それ故、一応ディズの仮説は正しいとジンは考えた。
「タイガーフォースはなんのために世界を……？」
ジンは難しいことを考えるのが苦手だ。クレアがまとめてくれたにも関わらずルーウェンの言った「殺す覚悟と殺される覚悟」のことが理解出来てない。

「あ、あれは？」
しかし、ジンの思考は打ち消された。敵襲があったのだ。
「敵か！」
塀を飛び越えて来たのは、緑色の四角いモンスターだった。シューという音がしており、四角で出来た雪だるまみたいな感じだ。腕はなく、足と思わしき四角は四つついている。そんなモンスターが大量にいた。
「メイは逃げて。こいつら、嫌な予感がする……！」
「わ、わかった」
メイが中庭からいなくなったことを確認すると、ジンは背中の刀を抜いた。

バロウズ邸　ロビー

「こいつら、クリーパー！」
「知ってるの？」
ロビーにいたルーウェンとほむらのもとにも中庭にいたモンスターが現れた。玄関を爆破して侵入したのだ。
「ああ。こいつら爆発するんだ。こんな屋敷リフォームされるぞ！」
ほむらはルーウェンの言葉を聞きながら銃を構えた。魔法少女的な武器ではなく、本物の実銃だ。それでクリーパーの内一匹を仕留める。
「自分の意思でしか爆発しない、撃っても爆発しないのね」
「よし、なら俺が全部斬る！」
「その必要はないわ」
ほむらはクリーパーの性質を確認するとルーウェンの提案を却下しつつ、左腕に丸い盾の様なものを装備した。こちらは色合いが地味だが魔法少女的なアイテムだ。
ほむらは魔法を発動させた。すると、一瞬でクリーパー達は風穴

を開けられて倒れた。
「な、なんだぁ？」
「時間を止めて、その間に全部倒した」
「時間停止能力……？」
ルーウェンは魔法少女としてはこれまた地味で反則レベルな能力に驚いた。ルーウェンとしては盾から光が出て一掃するものだと思っていたのだ。
「さあ、今日こそリアルアース復活の為にシザーマンを渡してもらう！」
タイガーフォースの人間と思われる武装集団がクリーパーの爆破した扉を乗り越えてきた。全員がマシンガンの様な重火器を持っている。
「やれやれまたリア充か。俺としては別にリアルアースに帰れなくてもいいんだが」
「貴様！　バンの言ってた快楽殺人者！」
ルーウェンの言葉に武装集団が反応した。実際、ルーウェンが殺した数は二人に満たないのだが。
「快楽殺人者はどっちだか……。お前ら、そんなたいそうなもん持ってるからどうせ殺されないとか思ってんだろ？」
「当たり前だ！　こんなもん持って、剣に負ける奴いるか！」
ルーウェンの問い掛けに武装集団は即答した。しかし、ルーウェンは嘲笑の目を向けて笑い飛ばす。
「それなら戦術に立つ覚悟は、無い！　では昔話をしよう。俺は漆黒の騎士団に入った当初、サポート要員だった」
ルーウェンは昔話を始めた。剣を抜いて、指揮棒の様にもてあそび、演技がかった仕草をする。
「俺は護身用に銃を隠し持ってたんだがな。ある日トワイライトタウンの避難所が制圧されたんだ。そんで、俺も捕まった。相手はマシンガンを持っていた。今のお前らみたいにな」
「それがどうした？」

ルーウェンの昔話を武装集団はさほど真剣に聞いていなかった。当然である。いきなり戦闘中に昔話を始める人間など正気ではない。

「俺は捕まってるとヤバそうだから、スキを見て反撃したんだ。敵の頭に俺の弾丸が命中して、即死だ。そん時俺は何となく理解した。こんなに武器の性能差があっても、相手が武器を持ってりゃ反撃されて死ぬんだ、って」

「意味がわからん。その時の敵は馬鹿かもしれんが、俺達は違う。そこまで馬鹿ではない。スキなど見せん」

「いいや同じだね。圧倒的な人数差と武装差があるから自分だけは死なないと思ってやがる。そんな奴に武器を持つ資格も人を傷付ける資格もない……！」

ルーウェンは右手に持った剣を武装集団に向け、首にかけたロザリオを掴んだ。そして、武装集団に確固たる覚悟を持って宣言する。

「ロッソ・ファンタズマ。二度とそんな薄っぺらい覚悟で武器を持てん様に、腕一本貰っていくぜ」

その瞬間、ルーウェンの姿が揺れた。

バロウズ邸　中庭

「うっ……あ」

ジンは中庭に倒れていた。クリーパーの爆発に巻き込まれたのだ。ジンのとった戦法はこうだ。クリーパーを連れて中央のプールに飛び込み、爆発させる。クリーパーは爆発までに全滅させられる数ではなかったが、彼女はユニバースのデータベースからクリーパーの情報を端的に知っていた。結果として爆発のダメージはジンと建物共に半減させれたが、それでも彼女は再起不能レベルのダメージを負ってしまった。屋敷の方はプールの水が無くなった以上の損害は受けてない。

ジンはずぶ濡れで中庭の壁に背中を預けた。こうしていると、昔を思い出す。サイクロプスの目が原因で差別を受けていた頃だ。よ

く雨宿りもろくにできず、雨に打たれて座り込んでいた。
「ジン……私は、まだ、生きて……」
ジンというのは彼女の名前ではない。彼女を拾ってくれた傭兵の名前だ。ジンは恩人の事を思い出して目を閉じた。

5年前　ポートランド郊外

時はしばらく遡る。ポートランドの郊外にバス停があった。屋根もない、ベンチだけのバス停だ。雨の日だった。
ただでさえ小柄なのに、今よりいくらか小さいジンはそのベンチに寝ていた。理由は単純。金がなくどの宿にも泊まれなかったし、サイクロプスの目が原因で誰の助けも借りられないのだ。当時、サイクロプスの目が原因ということもわからなかった少女は涙も涸れ、点々と各地をふらふら渡り歩く生活をしていた。
そんな折、バス停を一台の車が通る。バスではない。もうこの時間では始発までバスは来ない。屋根のついた軍用のジープだった。
ジープから下りる人影をジンは見た。サイクロプスの目を持つと知れれば、二言目には罵声が飛ぶ。そんな状況になれていた彼女はベンチから動こうとしない。
人影は銀髪の青年だった。青年の口が開く。ジンとしては罵声を浴びせされる覚悟は出来ていた。ただ、殴られたり痛い目にあうのは嫌だったが、逃げる気力もなかった。
「大丈夫かい？　こんなところで寝てたら風邪ひくよ？」
しかし、青年が口にしたのは罵声ではなかった。この青年が、ジンの恩人であり彼女が名前を受け継いだ初代ジン・クレッシェンドである。

現在　バロウズ邸中庭

「何となく似てるのよね……」

ジンは膝を抱えてまどろんでいた。ルーウェンと初代ジンは外見が似ている。まるで生き写しだった。しかし、性格までは似ていない。初代ジンは紳士的だったが、ルーウェンはひっちゃかめっちゃかだ。

ジンは気付けば眠りについていた。

バロウズ邸　ロビー

「貴方、その魔法……！」

「え？　知ってる？」

ほむらはルーウェンが行ったことに驚いた。いきなり敵の腕を落としたことではない。

ルーウェンが発動したロッソ・ファンタズマという魔法だ。これは分身魔法で、原理としては相手に幻覚を見せているのだ。

「それは、佐倉杏子の……」

「杏子を知ってるのか。見なかった？　探してるんだが。ロッソ・ファンタズマもそいつから使い方を習った」

ルーウェンはあっけらかんと言った。この技はほむらの知り合いからの受け売りなのだそうだ。

「おいこれはどういうことだ！　計算違いだぞ！」

目の前で仲間の一人が腕を落とされた瞬間、武装集団は逃げ出したが、それと入れ代わりに一人の男が来た。

「やけに制圧が遅いと思ったら、たった二人に足止めされていたのか！　クリーパーはどうした？　おい、おい待て！」

「あ、黒幕来ちゃった」

男は武装集団に声をかけるも、武装集団は泣き言を喚いて逃げてしまった。男は一人取り残された。

「貴様がルーウェンか。よくも私の華やかな人生の邪魔をしてくれた。これ以上人生設計狂わされると困るんだよキモオタ風情が！」

男は気を取り直してルーウェンに喚いた。しかし、ルーウェンは

剣を構えて動かない。
「言いたいことはそれだけか、ゆとり」
「そんなこと言っていいのかな？　こっちには人質がいる！」
ルーウェンの反応に対して男は、人質を取り出した。人質の姿を見たほむらが思わず叫ぶ。
「メイ！」
「暁美さん！」
人質はメイだった。クリーパー2匹がメイを拘束している。男は高笑いをしている。
「てめぇ！　人質を取るってことは、死んでも文句ねぇよな！」
「いいかキモオタ。人質がいるということはこちらに君は手出し出来ない」
男は自信満々に語る。しかしルーウェンは、剣を構え続けた。
「私が時間を止めて……」
「その必要はないぜ。俺に案がある」
ほむらの提案をルーウェンは却下した。ルーウェンは一歩、男に向かって歩く。
「何もできんだろ？　私の能力でクリーパーを操ってるのだ。キモオタ風情にはない能力だ」
「知るか。ネタバレ乙」
ルーウェンは剣を振り下ろす。すると、男が爆風に吹き飛ばされた。風車斬りだ。なぜ斬撃なのに爆発するか不明だ。
「なっ！　なにを……！」
男の精神が乱れたことで能力の支配が解けたのか、クリーパーはどこかへ行ってしまった。洗脳系の能力は扱いが難しく、術者が精神の平静を欠けば容易に解ける。三ヶ月そこいらで完全習得出来るものではない。
ルーウェンは男がコントローラーの類を持ってないことを確認すると、男を攻撃して術を解除した。そうすれば男はクリーパーに指示が出せなくなる。

男は人質を失い、自分が非常に危険な状態にいることに気付いて慌てだした。
「ま、待って、許してくれ！」
「許さん」
必死な命乞いもルーウェンは無視する。
「私が悪かった！」
「俺は悪くない」
男はこの状況を打開する最後の手を思いついた。手持ちのナイフでもう一度メイを人質に取るのだ。手持ちのナイフといってもペーパーナイフだが、首筋を切れば充分人は死ぬ。
「フハハッ！　形勢逆転だ！」
男はメイに向かって飛び掛かる。しかし、ルーウェンも同時に動いていた。
「てめぇはとことん救えねぇ男だ」
男がメイに届く前に、ルーウェンは男を切り裂いた。踏み込みで男を通り過ぎ、男が真っ二つになるのを確認したらバク転でもとの位置に戻る。剣を収めたルーウェンは、メイまで歩いていった。その手には剣ではなくやたら豪華な花束があった。
「な、なに？」
遠くで見てるほむらは戸惑った。思わず目を擦って、何時からかかけてなかった眼鏡までかけて確認した。そのくらい、ルーウェンの行動は意味不明だった。
当のメイも困惑している始末だ。
「リアルアースにいる頃の俺じゃあ、自分に自信が無くて言えなかったんだ。けど、俺は今なら言える気がしたんだ」
「？」
ルーウェンは恥ずかしそうに目をメイから反らしながら、武装集団に言った時とは違う覚悟を持って言った。
「あなたが好きです！　付き合って下さい！」
ルーウェン全力の愛の告白が世界に響き渡った。しかし、メイの

心には響かなかったようだ。
「あの、意味不明です。あと、タイプじゃない」
ルーウェンは花束を取り落とした。ほむらは見てられないとばかりに屋敷に入った。

バロウズ邸　中庭

「ふふっ、いいじゃないか少年。まさに青春だ」
「あなたは？」
中庭に着いたほむらを待っていたのは、白い騎士装をまとった少女、クレアだった。プールサイドに腰をかけて、ジンを膝枕している。
「失礼。私はクレア・ハーディ。タイガーフォースの人間だが、同僚の馬鹿が迷惑をかけた」
クレアは丁寧に喋る。ジンを芝生に寝かせたクレアは、ほむらに向かって提案する。
「すまないが、必要ないならシザーマンを譲ってはくれないか？」
「初めからそうやって頼めばいいのよ。武器なんか使わないで」
「恩に着る」
クレアはそう言うと、小屋まで歩いていった。

バロウズ邸　寝室

「ここは？」
ジンが気づくと、寝室のベッドに寝かされていた。近くの机ではほむらとディズが話している。
「これはデカントアビリティという品だ。人の意思と能力が物を介してやり取りされる。佐倉という魔法少女からルーウェンがこのロザリオを受けとったのだろう」
「それで、佐倉さんの魔法をルーウェンが……」

ジンはそんな話を聞きながら、痛む体に鞭をうって起き上がる。
「っ……」
「起きたかね？」
「ディズ！　なんでこんなところに？」
ディズがバロウズ邸にいることの不自然さに気付いたジンは驚きの声を上げる。
「闇の回廊で来た。この建造物に興味が出てな」
「そうか」
ディズはサラリと質問に答えた。さすがに大人の対応だ。本当はおいしいアイスが町にあるから来てたのだが。
ジンはベッドから下りると、服を取り出すためにたんすを開けた。今の彼女はパジャマ姿だ。
「風雲たけし城」
ガチャリ。
たんすを開けたジンは即座にたんすを閉めた。ルーウェンが中にいたのだ。なんかこれ以上にない暗いオーラをまとって。
「ついに人を殺した罪深さに堪えれず、おかしくなかったか……」
「原因は失恋だ問題はない。確かに人を殺してはいたが」
ディズはジンのツイートをフォローして言った。明らかに笑いを堪えていた。研究と結婚したようなディズでは、今のルーウェンは滑稽にしか映らないようだ。漆黒の騎士団では数少ない男性組なのだから、少しは理解して欲しいとこだが。
「これでいいの……？」
「大丈夫だ問題ない」
ディズはたけし城（たんす）に篭るルーウェンを放置して部屋を出た。ジンは組織内の男女比率の偏りに不安を感じ始めた。

3．ルーウェン・ヴァイサス散る（後書き）

解説

暁美ほむら

『魔法少女まどかマギカ』に登場する魔法少女。時間を操る魔法を使う。

クリーパー

『マインクラフト』に登場するモンスター。爆発してせっかく建てた建物を破壊、リフォームするため匠とよばれる。落雷でパワーアップした姿は巨匠と呼ばれる。みんなのトラウマ。

シザーマン

『クロックタワー』シリーズお馴染みの追跡者。みんなのトラウマで不死身らしい。今回は樽に押し込められてたが、タイガーフォースに回収されたため再登場の可能性が高い。

番外　ハロウィン（前書き）

「ハロウィンって最初は収穫祭だったんだと。じゃあなんでお菓子をあげるようになったかって？　知るかバーカ！　リア充爆発しろ！　いや、斬る！」

『ルーウェン・ヴァイサス、フラれた直後にハロウィンについて語る』

番外　ハロウィン

トワイライトタウン　屋敷

「トリックオアトリート！」

「いきなりなに？」

コスプレしたルーウェンがいきなり叫ぶため、ジンは驚いてしまった。今日はトワイライトタウン全域でハロウィンパーティーが行われている。

ルーウェンのコスプレは吸血鬼。銀髪で中二病全開な外見の彼にはうってつけだ。

「世界崩壊はみんなの心に傷を作ったからね。それを癒すのも、漆黒の騎士団の仕事よ」

「そうなのか」

羽川に諭され、ジンは納得した。しかし、ディズの姿を目にした瞬間疑問が浮かんだ。

「あれはトナカイの角じゃないか？」

「間違えてるね」

トワイライトタウン　駅前

「いつもの格好でそれっぽくなるところが凄いな」

ロクサスはアクセル、シオンと黒コートで死神コスプレだった。ロクサスのつぶやきも理解出来る。

「私を忘れてもらっては困るわ」

そんな三人にほむらが近付く。いつもの格好でコスプレに見えるグループは仲良く町を練り歩くことにした。

トワイライトタウン　トラム広場

トラム広場はトワイライトタウンでも広い市街地だ。その市街地に高笑いが響いた。
「フハハハハ！　凶華様の華麗なるコスプレを見るがよい！」
「あ、ここにもいたよそのままでコスプレみたいなの」
通り掛かったジンと羽川が足を止める。高笑いをしていたのは乱崎凶華という小柄なネコミミ少女。ジンより頭一つ小さい。一応、魔女のコスプレをしてる。ショートカットの頭にあるネコミミは付けてるのではなく、生えてるようだ。
「で、誰？」
「避難所の子供達のリーダーみたいなものよ」
「凶華様はこれでも二十歳なのだが……」
ジンの質問に羽川は的確に答えた。しかし、当の凶華は不満げだ。実際酒もタバコもする大人だし、（特殊な事情があるが）家庭も持っている。だが、その姿はまだ子供だ。
「あ、凶華さーん。勝手に行っちゃだめですよー！」
「猫が増えた！　まだ本編出てないのに！」
ジンが声の方を向くと、猫がもう一人。ジンと同じくらいの背丈の女子高生、中野梓だった。先日の事件（第四話の話なのでジンがメタ発言せざるをえなかった）で知り合った軽音部のギター担当だ。ツインテールにした黒髪に合わせた黒のネコミミは生えてるわけではなく、カチューシャのようなもので付けたのだ。服装自体は高校の冬服だが、ご丁寧に尻尾がついてる。
「梓！　来てたの？」
「先輩と来ました」
久しぶりの再開に話が弾む二人。猫ばかり増えてることは、もう気にしない。
「男のネコミミ需要も忘れてもらっては困るなって、ルーウェンの奴が言ってたな。レディに親しまれるなら気にしないが」
「ウルフ・エニアクル！」

こちらもまた、避難所の子供達の人気者が白いネコミミを付けて登場した。ウルフ・エニアクルは地球連邦の軍人とジンは聞いていた。モビルスーツというロボットを操るらしい。白い髪に褐色の肌、性格に問題があるが卓越した操縦技術と親しみやすさで人気とか。ジンもウルフが操縦してるジェノアスという白いモビルスーツを見たことがある。あれに子供達を乗せているんだそうだ。

「ジェノアスはカスタム機でウルフ好みの白で塗られて……。ルーウェンってメカが好きなのよね」

「俺はあんたみたいなレディが好きだ。お菓子をあげずに悪戯されたいくらいだ」

「はいはい」

ウルフの言葉を無視すると、ジンは羽川の方を見た。ウルフに絡まれる前に場所を移りたいと考えたのだ。

「にゃおん」

「は、羽川？　いや……、ブラック羽川？　猫が増えすぎてついに？」

羽川は既にブラック羽川と化していた。ブラックというが髪も耳も白い。なぜこうなるかというと、それは羽川だからとしか説明できない。

「ど、どうにかしないと……。うわ！　猫バス！」

対応するためディズを予防としたジンだが、行く手を猫バスに阻まれる。また猫だ。

「だれか……、どうにかして。私、猫アレルギー……」

ジンのつぶやきは夕暮れの中に消えた。

番外　ハロウィン（後書き）

作者の級長です。今回は急遽、ハロウィン話書きました。次からは予定立ててやるッス。

急遽やったから、本編未登録のあずにゃんや時期的にいろいろ早かったウルフさんの二次登場とかになりました。

では、また本編をお楽しみ下さい。

4．砲火後ティータイム（前書き）

世界ガイド
桜ヶ丘高校
『けいおん！』に登場する高校。これといった特徴はない普通の学校。しかし、リアルアースでは有名なスポット。

4．砲火後ティータイム

トワイライトタウン　トラム広場

「なんだかんだ、大義名分掲げてもまだまだ子供なのよね」
以上がルーウェンの実情を聞いたヨヨの反応だ。ルーウェンは現在、フラれたショックでたんすに閉じこもっている。
「じゃあ、私そろそろ行く」
ナミネに頼まれた買い物を済ませたジンはヨヨと別れた。買い物は食料品で、荷車を使わなければならないくらいの量だ。だが、ジンの力ならたやすい。ジンは荷車を押して帰ることにした。
「しかし重いな……。怪我があるとはいえ、こんな程度で音を上げるほど私は弱かったか？」
ジンは首を捻った。普段の自分なら余裕と思っていた重量だが、怪我のせいかなんなのか、体が悲鳴を上げている。
「ジン、大丈夫？」
「シオン！」
ジンが立ち止まっていたら、巡回警備中のシオンが近付いてきた。シオンはナミネがジンにこんな無茶を頼んだのは、ジンに戦える身体でないことを自覚させるためと知っていた。だからジンを見守っていたのだ。
「闇の回廊を使うよ。そっちの方が楽だし」
シオンは手をかざして闇の回廊を開く。楕円型に闇が広がり、入口になる。この闇の回廊は世界間の移動だけではなく、同じ世界の中を移動することも可能だ。いわばどこでもドアだ。
「……」
本来、楽を好まないジンはシオンの提案に乗るのをためらった。しかし、身体が限界なのも事実だ。仕方なくここはシオンの言う通りにしたジンだった。

屋敷　会議室

「ふう。なんか身体の調子がおかしいのよね……」
「休んだら？」
ジンが会議室で体調不良を漏らすと、羽川が休むことを提案する。確かに最近激戦続きで、身体が丈夫なジンもそろそろ限界だ。しまっちゃうおじさんと戦う前から、ユニバースの仕事で蓄積した疲労もある。
「今回の仕事は簡単よ。ある世界に行って、八元素のリングを持ってくるだけ。タイガーフォースも見つけてないみたいだから、戦う必要はないんじゃないかな？」
羽川が提示した資料には、震土のリングが桜ヶ丘高校から発見されたと書かれている。
「なるほど。行ってくる」
「それと、新しいメンバーがいるから連れて行ってね」
「新しいメンバー？」
羽川の言葉に部屋を出かけたジンは立ち止まる。そして、新メンバーは彼女が瞬きをする間に現れた。
「ほむら！」
「ここが本部なの？　思ったより落ち着きがあるのね」
新メンバーは暁美ほむらだった。ほむらは黒いカードをジンに投げ渡す。
「時計のマーク。私が三日月でルーウェンが十字架、と」
ジンはカードに書かれたマークを見た。このカードを持ってるということは、既に手続きは終わらせたみたいだった。あることが気になったジンはほむらに聞くことにした。
「メイは？」
「トラヴァースタウンの避難所に行かせたわ。ここじゃいづらいでしょうから」

ほむらの答えに、たしかにとジンは納得する。自分がメイでも、ふった男と出くわす可能性の高い町には住みたくない。避難所は様々な世界に展開しており、トワイライトタウンはその一つに過ぎない。どの避難所も王様と呼ばれるネズミに支援、管理されている。

「私の魔法は時間操作。武器は魔法で出ないから、現地調達よ」

「パイプ爆弾はいくつか持ってくのね。ゴルフクラブまで持って」

「世界によっては武器になるものがない場所もあるって赤い人が言ってたから」

ほむらはリュックに自作の爆弾を詰め、ゴルフクラブを持った。赤い人とはディズのことだろう。

ジンもユニバースの都合でいろいろな世界を知ってるが、とある動物しかいない森の世界では斧くらいしか殺傷能力のあるものがないとか。スコップも辛うじて武器になるかどうかだ。

「じゃあ、行こう」

「ええ、私には探さなければならない人がいるもの」

ジンとほむらはそれぞれの決意を持って、グミシップへ向かった。

トワイライトタウン　地下通路

「こんなところにいた」

「……ヨヨか……」

トワイライトタウンには地下通路が通っている。その地下通路の奥で、ルーウェンはぐったり倒れてふて腐れていた。

「そりゃあ、あんな告白じゃフラれるわよ」

「あれが本気で成功すると思っていた俺は一体……」

ヨヨの言葉にルーウェンは力無く応える。彼はショックと同時に自己嫌悪にかられているようだ。

「この世界には女なんか五万といるわよ」

「そんなこと言ったってぇ……」

ルーウェンは完全に再起不能だった。なんかいろいろダメな状態。

「そうだ。気分転換しない？」
「気分転換？」
ヨヨは気分転換を提案する。確かにこんな時は忘れるのが一番だ。次にヨヨは、具体的な方法を提示する。
「サラマンダーで走るとか」
「サラマンダー？」
ルーウェンはオンロード最速ブランドの大型バイクを所有している。それがサラマンダーだ。正式名称はサラマンダーＲＸ－７０『ファイアドレイク』だ。
「いいコース知ってるのよ」
ルーウェンはひとまず起き上がり、ヨヨの提案に乗ることにした。

桜ヶ丘高校　運動場

グミシップは運動場に着陸した。リアルアースによく似た外見の校舎にポップなデザインのグミシップは浮いている。
「ここに震土のリングがある……」
「グミシップはこんな目立つ場所に置いてあっていいの？」
ほむらが言うなり、グミシップは天高く浮上した。着陸したのは上空から飛び降りるのがジンの身体に負荷をかけるためである。しかし、目立たなくなったわけでもなく、逆に未確認飛行物体として扱われかねない雰囲気だ。むしろ、そちらの方が厄介だ。
ほむらはまだ魔法少女に変身しておらず、自分が通ってるという中学の制服のままだ。制服のデザインがブレザーなので、中学の制服といえばセーラーといったイメージの強いジンは、ほむらを一瞬高校生かと思った。
「音楽室にあるんだな」
ジンは資料の地図を暗記しており、音楽室に迷わず歩く。ほむらもそれについていく。校内はそれほど入り組んでなく、当然のように罠もないのですんなり音楽室にたどり着いた。ジンとしては、八

元素のリングのうち一つを保管してるならもっと警備を厳重にしてほしいところだ。
「うー。学校自体初めてだから緊張する」
「緊張するなら職員室じゃないかしら？」
「羽川がアポ取ってあるから大丈夫だけど」
ほむらのツッコミは軽くスルーして、ジンは扉をノックした。
「はーい。今いきますね」
扉を開けたのは、黒髪ツインテールの女子高生。背丈に関してはジンと同じくらい。
「資料にあった、中野梓ね」
「は、はいそうですが？」
ほむらの固い言葉に、梓はつい敬語で話す。ほむらは中学生なのだが、雰囲気では梓より年上に見えてしまう。
「おっ。連絡くれた漆黒の騎士団の人？　あまり黒くないな」
奥からカチューシャで前髪を上げた部長、田井中律が出てきた。黒くないとか言われたジンは反論出来ずに呟いた。今の彼女達に黒要素はほむらの黒髪ロングしかない。ルーウェンがいれば黒要素は格段に跳ね上がるのだが。
「新規メンバーは黒要素が徹底されてない」
「そうなのか」
「納得されましてもっ……！」
ジンは早速ペースを掻き乱された。しかし、奥の音楽室を見ると人数が足りないことがわかった。もうあと、3人いたはずだが。だが本題は震土のリングを手に入れることだ。人数が足りなくても問題はない。
「しかし、学校という割に人がいないな。今年度で廃校するのかここ」
「いや、普通に休日だから」
ジンのボケ（本人は真面目に思った）に律は間髪入れずツッコミを入れた。こういうやり取りは慣れてるのかもしれない。

「チャリティコンサートの準備で先輩達は体育館にいます」
梓の言うことには、残りの三人、唯、澪、紬はチャリティコンサートとやらの準備をしてるためいないのだ。彼女達軽音部はリアルアースでも人気が高く、ファンも多いとか。チャリティコンサートの収益を避難所に寄附して、自分達の世界を無くした人達の自立を支援するようだ。軽音部も漆黒の騎士団と違う方法で、この事態に立ち向かっているのだ。
「まあまあ中入って。ゆっくり話そうじゃないか。なんたらのなんとかとやらは職員室前のトロフィーが並んだ場所にあるから、さわちゃん来るまで待ってて」
「震土のリングですよ」
梓のツッコミを受けつつ、律は二人を音楽室に入れた。音楽室には疑問が残るレベルで私物があったが、ジンは本来の音楽室を知らないので気づかなかった。
「で、この私物の山はなに？」
「お恥ずかしい……」
ほむらだけは気付いた。部長の律も中学生に言われては面目もない。
「あれ？　音楽室ってこういうのがあるんじゃ……？」
「これは私達が持ち込んだんですよ」
「え？　違うの？　てっきりこのぬいぐるみで一人演奏会とか……」
「寂し過ぎる！」
「じゃあ、この薬局にありそうなカエルの置物はこの世界特有の楽器とか……」
「なんか天然ボケが唯より酷いな……」
律は疲れたようにうなだれた。ジンは本気なのだが。実際、一人演奏会はやったことがある。梓もそんなジンを唯と比較してみる。
「一見、しっかりした唯先輩みたいに見えますけど」
「あの子、あれで傭兵なのよ。私なら絶対雇わない」

ほむらは絶対を強調した。ジンは傭兵としては一流だが、まだ中学生くらいの少女だ。そうした歳相応な部分も、あるにはある。
ぼろくそに言われたジンはしばらくガックリなっていた。ほむらの絶対に雇わないが大打撃らしく、所謂『ｏｒｚ』状態になっている。彼女は社会経験が少ない分、アイデンティティの大半を傭兵という肩書に頼っている。そこを突かれると弱いかもしれない。
「……！　この匂い！」
ジンはいきなり顔を上げた。なにかの匂いに反応したようだ。ほむらも気を配るが、音楽室には甘い匂いがする一方だ。
「こいつ、ケーキの匂いに……！　結構薄れてると思っていたが、結局『戦えそうな唯』か！」
「なんですかその称号……」
「伏せろ！　これは火薬の臭いだ！」
律と梓の会話にジンの緊迫した声が割って入る。ほむらが状況を確認する前に、音楽室の壁が爆発した。
「なっー！　音楽室が爆発した！」
律が驚くが、爆発での負傷はなかったみたいだ。梓とほむらも同様だ。三人共、爆発が強く吹き飛ばされはしたが致命的な傷はない。だが、
「う、ぐっ……。大丈夫、か？」
「ジン！」
律は起き上がってジンに駆け寄る。三人のダメージが少なかったのは、ジンが壁になってくれたからだ。彼女は小さな身体で爆風を遮るため、太刀を抜刀して横に凪いだ。しかし、三人は守れてもジン自身に及ぶ分まではダメージを防げなかった。
「大丈夫か！　なにが起きて……」
膝をつき、太刀を支えにしてようやく立っているジンに、律が心配そうに声をかける。ほむらは壁に開いた穴から、爆撃を行った犯人を見つけた。それも複数。
「二足歩行のロボット？」

ほむらは敵を確認すると、魔法少女に変身した。光に包まれたと思ったら、すぐに衣装が変わってるため律も梓も驚いた。
「私が爆撃を抑える。その間に避難して。敵は複数よ」
「わかった。私が二人を誘導する」
ジンが同意すると、ほむらは消えた。時間を止めて敵のいる場所に向かったのだ。時間停止には制限があるらしく、非戦闘員である律と梓を避難させる間中時間を止めておく、なんてことは出来ないようだ。それなら、負傷したジンの代わりに敵を引き付けようというのが、ほむらの算段だ。
「行こう。ほむらでも全部の敵を引き付けられるとは限らない」
ジンは律と梓を連れて、音楽室を後にした。

今週のアイキャッチ（ルーウェンが体育館の中、ステージを背景に剣を構える）。
ＣＭ。こだまでしょうかのあれ。挨拶の魔法1分バージョン。
ＣＭ明け。アイキャッチは無く右下のロゴのみ。

桜ヶ丘高校　体育館

「もしかして熱狂的なファンとか？」
「どう見ても、違う！　そしてさっきの謎描写に疑問はなに！」
体育館にいて難を逃れたはずの唯、澪、紬の三人は敵に銃を突き付けられていた。唯の天然に澪は全力でツッコミたくなった。正直、それくらいしかこの現実から目を背ける方法が無かった。澪はさっき挿入されたアイキャッチとＣＭにも触れておく。こういうのをメタ発言という。
音楽室は爆撃されたが、楽器はすべて体育館にあったので無事だ。だが、敵はその体育館すら跡形も無く吹き飛ばしかねない雰囲気を持っていた。
「我々はタイガーフォースだ！」

「リアルアース復活の妨害は許さない！」
タイガーフォース所属の兵士達はリアルアース出身らしく、リアルアース復活なんていう大義名分を掲げていた。しかし、実際はオタクの聖地に等しいこの高校を破壊したいだけであった。
「で、核未搭載小型メタルギア部隊は？」
「フェーズはすでに、校舎の爆撃に移ってる」
「いいなー。そっちの方がよっぽど楽しそうじゃん」
「キモオタ共がブヒブヒ喚くのが目に浮かぶようだぜ」
「ホントだな。あんな奴らがいるからリアルアースは崩壊したんだ」
兵士達の言動からそれは伺い知れる。節度を失った軍隊ほど恐ろしいものはない。彼らは武器も持ち、軍服も着てるが、軍人としての気概は持っていなかった。まさに、遊び感覚で破壊と殺戮を振り撒いている状態だ。もしかしたらタイガーフォースのトップである男が襲撃を人が少ない休日にしたのは、これを事前にわかっていたからかもしれない。ともすれば、タイガーフォースは優秀な指揮官を有することになる。破壊大好きアホ軍団を使いながら、敵側の犠牲は最小限で済むように計算されていたのだから。彼らの目的もまた、震土のリングだ。
「じゃ、漆黒の騎士団が死ぬの待ちますか」
「あと3分は持つかな？」
「お茶でもどうぞ」
「おい！」
敵にお茶を勧める紬。澪は止めたが、何故かあったティーポットから紬は丁寧に人数分お茶をいれる。
「あ、じゃ、いただきます」
「おい待て、毒が入ってるかもしれない！」
「え？　じゃあ俺が毒味してやるよ」
迂闊な兵士が紅茶を勧められるまま飲もうとするのをリーダー格の兵士が止める。しかし、黒いコートに包まれた腕が伸びて、紅茶

のカップを取る。そして腕の主は紅茶を飲んだ。
「うまいな。俺コーヒー派なのに。ホントにうまい紅茶飲んだことないからかな？」
腕の主は、銀髪を揺らして感想を述べた。背中の片手剣は大人しく鞘に収まっていたが、この殺伐としていた雰囲気の中、いつ抜かれてもおかしくない。
「というわけで、ルーウェン・ヴァイサス参上！」
「貴様いつから！」
腕の主はルーウェンだった。兵士達は一斉に銃を構える。ルーウェンは芝居がかったポーズで肩をすくめながら答えた。
「おっぺけぺーのよいよい、あらほらせっせの下りからいた」
「いつだ！」
「さっき挿入されたアイキャッチ、あれ思い出せ。背景がここだったろ？」
言われて澪や兵士達はアイキャッチを思い出す。そして同時に納得した。
「「あれか！」」
「あれだ。先週までなかったものがあっただろ？　わざわざ幻影魔法で見せた甲斐があったぜ」
「貴様ふざけてるのか！」
兵士の言葉にルーウェンは急に真面目になった。所作の端々、彼の一挙一動に殺気が滲んでいる。
「大まじめさ。少なくとも、殺される覚悟もなく武器を持つお前らよりは、な」
ルーウェンは目隠しの帯と耳栓をそれぞれ三つ、澪達に投げ渡した。
「それしとけ。特に澪。こっからはあんたの嫌いな、流血の時間だぜ」
澪は血という言葉に反応して、即座に目隠しと耳栓をした。
気分転換したルーウェンは、もう精神的なダメージから立ち直っ

ていたのだ。

桜ヶ丘高校　運動場

校舎の反対側ではほむらが核未搭載小型メタルギアの相手をしている。ジンは辛うじて二人を避難させた。

「私を置いて、先に、行ってて！」

「ジン！　出来ねぇよ！　死亡フラグだろ！」

しかし、状況は最悪だった。運動場の中央で敵に囲まれてしまったのだ。ジンには律と梓を守りながら戦う力は残されていない。二人だけでも逃がしたいが、律の人格がそれを許さなかった。避難する間ジンは二人を守るために、敵の砲撃を身体で受け続けてダメージが蓄積している。

「敵の二足歩行マシナリーはグリナ・ビートSが3セット。シノワ・ヒドキが15機。グリナ・ビートCは30機。四足歩行マシナリーはシーカー、ボーマルタ、ティレントスが数えられないくらい、か。全部グラール製のマシナリーね」

ジンは即座に敵の勢力を確認した。とても倒し切れない数だ。全開の彼女でもできるかどうか、そのレベルの話である。

「あ、ヘリコプター」

「え？」

梓が上空の音に気付いて見上げると、ヘリコプターが滞空していた。ジンはそちらに気を取られる。そしてヘリコプターから人影が降りてくるのを見た。

「こいつは！」

人影は地面に降り立った。人影の正体はネメシスだった。ネメシスはロケットランチャーを装備している。

「馬鹿な！　こいつは倒したはず！」

ネメシスは前回戦った時と違い、上半身のコートがはだけて触手が発達している。

「まずい！」
ネメシスはロケットランチャーをジン達に向けて放った。ジンはすぐ、二人の壁になるように前に出た。
ロケットランチャーの弾頭は光と熱を放つ。

桜ヶ丘高校　校舎裏

「あなたは？」
「ブラックロックシューター……」
ほむらはメタルギア軍団を半数ほど削ったところで、思わぬ支援を受けた。黒いコートを着た、長い黒髪のツインテールをなびかせる少女だ。背中のフライトユニットもよく映える。ブラックロックシューターという長い名前を呟いた少女は、バヨネットと呼ばれる銃剣を先端に付けた長大なキャノン砲をメタルギア軍団に向け、連射した。ほむらが気付くと、メタルギア軍団はいなくなっていた。

桜ヶ丘高校　運動場

ジンは死を覚悟していた。しかし、いつになっても膨大な熱は彼女のか細い身体を焼かない。爆発音はすでにした。熱も感じた。ジンはゆっくりと目を開けた。
すると一台のバイクが目の前に転がっていた。
「キノひどい」
「バイクが喋った！」
バイクがいきなり喋るため、律が驚いた。バイクなんて喋るものじゃない。
「エルメス、ナイス！」
「投げたのはキノじゃないか」
少し離れたところから声が響く。セーラー服を着た短髪の少女だ。ガンベルトをしていて、銃のホルスターといくつかの緑色ポーチが

ついている。
「一気に片付けてご飯にしよう！」
キノという少女はポーチから銃を取り出して敵に向ける。出した銃はミニガンというガトリング砲。大きくて、ゲームなどでは人が持って使用してるが本来はできないくらいの反動がある。
キノはジンより少し大きいだけの体格なのにも関わらず、ミニガンを敵に難無く掃射。敵の集団はあっという間に壊滅した。
「あとはデカブツだけ！」
キノはミニガンを仕舞うと、ポーチからロケットランチャーを出す。ＲＰＧ７。ゲームではお馴染みのザ・ロケットランチャーというべき品。
「ファイアー！」
ロケットランチャーはネメシスに直撃、体勢を大きく崩した。ジンもすかさず援護を行う。
「流星爪！」
振った太刀から飛んだ斬撃がネメシスに命中する。ネメシスはダメージがかさみ膝をついた。キノはロケットランチャーの筒を捨てるとホルスターから大型リボルバーを取り出す。
「ビッグカノン、魔射滅鉄！」
「キノ。相手魔物じゃない」
「威力は充分！」
キノはバイク、エルメスの忠告を無視してビッグカノンと呼んだリボルバーを放つ。弾丸はネメシスの頭にクリーンヒットして、頭を消し飛ばした。
運動場での戦いはその一撃で収束した。
「あれは……？」
ジンは安心して身体から力が抜けた。しかし、意識が薄れる中、体育館の方へ向かう見覚えのある少年の姿を見つけた。名前はたしか、バン・グローリー。

桜ヶ丘高校　体育館

「これはどういうことだ！」

「命ははかないな。ほんの一閃の太刀筋で散ってしまうのだから」

体育館にバン・グローリーは到着した。しかし、目の前に広がっていたのは惨劇だった。開けられた扉の外に、体育館を占拠する予定の仲間の死体がぶちまけられていたのだ。ルーウェンはチャリティーコンサートの会場である体育館を極力汚さないように、事前に体育館中の扉を全開にして敵をそこから叩き出しながら戦ったのだ。軽音部の三人は既に避難させてあった。

「どういうつもりだ！　まだ攻撃を行ってない人間すら殺すとは！」

「決まった…！」

「てめぇ！」

ルーウェンは自分の世界に入っていたため、バンの憤りなどどこ吹く風である。ルーウェンなら、『武器を構えた時から戦いだ』と答えたであろうが。

「お、いつぞやの甘ちゃんじゃないか。お仲間のお肉でも引き取りに来たのか。人肉なんかマズイからやめとけ。廃棄は任せたが」

「そういう意味じゃない！　なぜ皆を殺した！」

「知るかゆとり。自分がめちゃくちゃ弱くてグズのノロマなせいで仲間守れなかったの棚上げして逆ギレかよ。ま、仲間が武器持っても覚悟は持てないクズぞろいじゃつるんでるあんたの程度も知れるってもんだ。あいつらの最後の言葉教えてやろうか？　『助けてー。命だけはー』だってお。あひゃひゃ、マジウケるんですけど！　武器持ってる時点で死ぬことくらい覚悟しとけし！　あー、腹痛てぇ！」

ルーウェンはバンに嘲笑を向けながら笑い転げた。武器を持つからには死ぬ覚悟を持つのが当たり前なルーウェンにとって、タイガーフォースの兵士の末路はどんな漫才よりも笑えるのかもしれない。

「ルーウェン・ヴァイサスーッ！　てめぇに人間の心はねぇのか！」
「あるよ。少なくとも無駄な犠牲出して楽しんでるお前らより、な。あいつらみたいなクズをほかっておくと、罪の無い人間の血と涙が流れる。俺が手を汚せばそれを防げるんだ。こんな簡単なこと、やらないって奴の方が人間の心ってのが無いぜ」
ルーウェンはすぐ正常に戻り、バンに告げる。これが覚悟を決めた人間と軽い正義に燃えるマヌケの違いだ、と言わんばかりに。しかし、それはバンの怒りに油を注ぐ結果となった。
「説得してやめさせればいい！　なんで殺すんだよ！　説得を諦めた時点で、その主張は間違ってる！」
「おーおー。甘ちゃんが吠えとらっせる。怖いよー」
ルーウェンは始めからまともに取り合わなかった。完全にバンを茶化し始めた。
「貴様ーッ！」
「おやおや。説得でやめさせるんじゃなかったのかい。結局てめぇの信念はその程度か」
バンはルーウェンに殴り掛かった。しかし、ルーウェンは慌てず身体を右に反らして避ける。
「おらよっと」
ルーウェンはバンの顔面を殴り飛ばした。バンは１０ｍほど飛んでいった。ルーウェンは剣を抜いてバンに近寄る。
「なんかさ。お前を生かしておくと誰かが悲しむことになる気がしてる。だから斬る」
「や、やめろ！」
「竜巻破裏剣！」
「うぎゃー！」
バンの悲鳴が体育館に響き渡った。

数分後　桜ヶ丘高校音楽室

「すげー！　本当に元通りだ！」
「朝メシ前、とかいうとこよ」
ほむらの魔法で時間を巻き戻された校舎は元通りに直った。皆を集めてお茶会ということになった。
「わーいケーキだ」
「……」
キノとブラックロックシューターはそれぞれの反応をする。エルメスはバイクからストラップになっていた。ほむらは二人の素性に関してルーウェンに聞いてみた。
「誰？」
「キノコ王国のサーキットで知り合った。連絡受けて、戦力になるから連れてきたんだ」
「連絡？」
ルーウェンが不可解なことを言う。世界を渡ったのは闇の回廊だとしても、ほむらもジンも、ルーウェンに連絡など寄越してない。
「ヨヨが桜ヶ丘高校で大規模な敵襲って、教えてくれてさ。そうだ、震土のリングは？」
「あ、さわちゃんに『来るな』ってメールしたから、後少し待っ……」
「その必要はないわ」
ほむらが律の言葉を遮り、震土のリングを差し出した。
「爆撃でトロフィーの入ったショーケースが割れたから、直す前に取っておいたの」
「すごーい。これならケーキを半分食べて時間戻してって、いつまでも食べれるね！」
「時間戻した時に吐き出すことにならないか？」
唯がほむらの魔法の応用を思いついたが、澪の現実的な意見に実践をやめさせられた。
「ジンさんもどう？」

「あ、ああ……」
紬に誘われ、ジンはぎこちなく輪に入る。みんなで騒ぐのは苦手かもしれない。
けれどもジンは、たまにはこういうのも悪くないと感じた。

4．砲火後ティータイム（後書き）

解説

メタルギア

メタルギアシリーズお馴染みの歩行戦車。通常の戦車では立ち入れない場所にも入れる。本来は核を搭載してるが、桜ヶ丘高校制圧戦で投入されたのは小型の核未搭載機。メタルギアシリーズ本編にはない、タイガーフォースオリジナルのバリエーション機。

ネメシス

バイオハザード3に登場する追跡者。みんなのトラウマ。今回は第二形態で登場。ちなみにあの後、クレアが回収したため再登場の可能性あり。

謎の美少女ガンファイターライダー・キノ

高校生の木乃が変身した姿。学園キノに登場する。大量の銃器を使う時雨沢得なヒロイン。ストラップのエルメスは喋り、バイクに変身する。大食いで有名。

番外　ポッキーの日（前書き）

「ポッキーってなんだ？　食えるのか？」

『ジン・クレッシェンド、知らないポッキーという単語について語る』

番外　ポッキーの日

１１月１１日　ホウエン地方　ミナモシティ

自然豊かなホウエン地方。その港町ミナモシティ。そのデパート屋上で、赤い髪を黒いリボンでポニーテールにした少女がフェンスにもたれて言った。

「今日は何の日だ？」

隣に立つルーウェンはそれにすかさず答える。

「あれ？　杏子って誕生日今日？」

「違う！　ポッキーの日だ」

杏子はポッキーをくわえて言った。確かに、今日の日付はポッキーに見えなくもない。

「そんな事言ったらプリッツとかトッポも当て嵌ま……」

「無粋なことを言うんじゃねぇ。あたしは今日を、ポッキーの日として認識しているのさ」

杏子謎のこだわり。やはり、ポッキーをトレードマーク的に用いる杏子はポッキーに並々ならぬ思いがあるのか。

「で、味は何が好きなんだ。俺は個人的に苺だな」

「ノーマルに決まってんじゃん」

そんな杏子は決まってノーマルのポッキーを食べている。プロのポッキーマニアには、ノーマルが一番なのか。

「ポッキーといえばポッキーゲームだが、今回はやる必要ないだろ」

「ポッキーゲームねぇ」

ルーウェンがポッキーで思いついた話題を振るが、別にポッキーゲームをしたいわけじゃない様だ。実際、女の子と面と向かって話すことすら、ルーウェンには困難だ。今も杏子と目を合わせていない。漆黒の騎士団メンバーはルーウェンと話す時、ルーウェンの目

線があらぬ方向にいってるのに気付いているのだろうか。羽川やほむらあたりなら気付いてるかもしれないが、他人の目を気にしないジンや、色気より食い気な木乃は気付かないだろう。

「今思えば、漆黒の騎士団って女率高いよな。あれから男増えた？」

「増えたのは女だ」

杏子が男女比について聞くと、ルーウェンは頭を抱えながら答えた。研究と結婚したみたいなディズや、軟派なアクセルならまだしも、思春期のルーウェンとロクサスには女の子しかいない空間は命を削り取られるだけだ。しかも、両方奥手だ。

ルーウェンの様子を見て、杏子が悪戯っぽく笑う。

「今度同盟組まない？　魔法少女連盟と」

「俺とロクサス殺す気か。さらにその屍を踏み越えてアクセルが電話番号とか聞くとこが容易に想像できるからやめよう」

杏子は予想通りの答えを聞いて満足そうだった。

番外　ポッキーの日（後書き）

今回はポッキーの日いうことでこんなの書きました。てか、また本編より先にキャラ出るしｏｒｚ

ポッキーといえば、まどかマギカの杏子だろうということで、本編合流前に出しました。次の話で出ます。ルーウェンの幻影能力はお察しの通り、彼女から貰ったものです。デカントアビリティって奴です。

それはさておき、級長的には一人の知識で漫画やアニメ、ゲームをフルカバーするのは限界ッスマジで。

そこで感想などで、出して欲しいキャラのリクエストお待ちしてます。作品名と名前があればググれます。では、この辺で。

5．ひとりぼっちは寂しいもんな（前書き）

世界ガイド
カイナシティ
ホウエン地方の港町。市場が開かれフレンドリィショップ涙目な町。実際、市場でこそないが浜辺にある海の家で買えるサイコソーダはいいきずぐすりより回復量が多くて安い。

5．ひとりぼっちは寂しいもんな

トワイライトタウン　屋敷

屋敷の会議室では、あることを決めるためにルーウェン、木乃、ほむら、ブラックロックシューター（ＢＲＳ）の四人が集まっていた。

キノは変身ヒロインなので変身前の姿、つまり高校生の木乃、になっている。だが、ほとんど違いが見られない。強いて上げるなら、ポーチの留め金の動物が変わったくらい。

まず、ルーウェンが口を開いた。

「ディズ曰く、『他の世界の知識があるジンとルーウェンに後一人を加えた三人一組で行動すべし』だそうだ。そこで俺は、くじ引きを行う」

「くじ引き……？」

ＢＲＳはルーウェンが差し出したくじ引きに興味を示した。くじ引きは秋葉原お馴染みのパン缶の空き缶に割り箸が三本入ってる。恐らく、この三本の内一本の先端が赤く塗られてるに違いない。

「それで、ジンは？」

「スマン、遅れ、た……」

ほむらがジンの所在について聞くと、会議室の扉が開いてジンが現れた。太刀を杖にしてグズグズのグダグダのフラフラだ。額に冷えピタを貼り、肩で息をしていて苦しそうだ。

「風邪か。ならもう一本赤い棒を追加して……」

「大丈夫、だ、同志ルーウェン！　私はまだ、戦える！　新技、の……アイディアが固まった今！　我々は何も怖くはない！　万国の労働者団結せよ！」

「どうしたんだ？　資本主義の現実でも垣間見たのか？」

ジンのキャラ崩壊ぶりは完全に大丈夫じゃない感じを滲ませてい

た。強がろうとして、昔の社会主義者みたいな台詞だとルーウェンは独断と偏見で思った。
ほむらと木乃はルーウェンが粛清される前にジンをたしなめた。
「これは誰がどう見ても、戦闘の疲労が蓄積してるわね……。しかもその死亡フラグ、まんまマミよ」
「大変！　私がお粥作ってあげるから寝てて！」
「木乃の料理なんか食べたらお腹壊むぎゅ！」
エルメスが余計なことを言うので木乃は握り潰した。ストラップ状態のエルメスは簡単に握り潰される。
しかし、ジンのキャラ崩壊はやばいことになっていく。作画だったら目のハイライトが消えてるかも。
「なるほど、貴様らは我らが『病は気から主義』に反感する退廃した『コンビニ受診主義者』なのだな！　私の健康状態について疑うことは階級的な犯罪であり、病は気から主義の勝利を疑う医師協会的反動分子であることを示すものである！　粛清が必要だ！」
ジンは太刀を抜き放つと、ルーウェン達に向けた。流石に混乱もここまでくるとやばい。ルーウェンも仲間までは斬ることなどできない。
「ウラーぁぁぁあああああぁぁぁぁぁアァアアア！」
「ダメだ！　これはロシア語で万歳を意味する言葉！　こいつ完全に社会主義に染まった！」
「なにをどうしたら風邪で社会主義者に転身するのよ！　私の周りで赤いのは佐倉さんだけで充分！」
「ロシアってピロシキが美味しいよね」
「今って食べ物の話をしてる場合？」
「……」
ルーウェン、ほむら、木乃、エルメス、ＢＲＳがそれぞれの反応をする中、ジンの太刀が振り上げられる。正直、ルーウェンも全快のジンの一撃を見たことはない。だから防げるのか、そもそもどんな技で来るのかも予測がつかない。

さらにいえば、錯乱状態のジンは全快時以上の力を発揮する危険もある。ルーウェンは覚悟して、ジンの技を待った。
「両断、絶爪！」
「まったくの新技？　いや、太刀に気を込めて切れ味増してる！」
振り下ろされた太刀は、紅いオーラをまとっている。対するルーウェンは背中の鞘から剣を抜く。
「練習中の技だが、逆にちょうどいい！　『ミラージュ×ビューア』！」
ルーウェンは剣に青いオーラをまとわせた。ルーウェンの方が若干強そうだ。これならいける気もする。
「一つ問題がある」
「なに？」
ルーウェンの呟きに木乃が反応する。
「これって幻影だから、威力増えてないんだよね」
「ダメじゃん！」
「ＷＲＹＹＹＹ！」
ついに吸血鬼みたいな叫び声まで上げ始めたジンに、ルーウェンの新技はなすすべなし。ミラージュ×ビューアは相手の視覚を騙す技なのだ。ルーウェンは遺書書いといてよかったとか考えていた。
「ロード、ローラー、だ……ッ」
しかし間一髪、ジンは太刀を振り下ろす前に倒れた。息が荒く、ずいぶんと苦しそうだ。

屋敷　ジンの部屋

「あー、互いに死ぬかと思った」
「戦闘のダメージが回復しきってないのね。しばらくは仕事させない方がいいわ」
羽川の言う通り、ジンはここまで全ての戦闘で重大なダメージを受けている。それが今日になって爆発したのだ。

「んじゃあサクッと薫風のリングとってくる」
「よろしく」
ルーウェンは仕事に行くため部屋を出た。屋敷には多数の部屋があり、漆黒の騎士団メンバーには一人ひとり部屋が割り当てられている。ジンの部屋はほとんど何もなく、ジンが住み始める前と対して変わってない。あるのは始めから部屋に置かれていた机、ベッド、クローゼットくらいだ。
羽川はジンの額に濡れタオルを乗せて、もうちょっとなにか置けばいいのに、と思った。

屋敷　ロビー

「で、今回行くのは俺、ほむら、木乃の三人か」
「私は上空から町を警護する」
ルーウェンは出立メンバーを発表した。ＢＲＳはフライトユニットを起動して飛び立った。あのフライトユニットはかなり速く飛べるみたいだ。
「じゃあ行くか。今回の仕事は薫風のリングの回収。アクセルが同行する。場所はカイナシティか」
「カイナシティはホウエン地方の港町で、ミナモシティとの連絡船が出てるわ」
ルーウェンにほむらが情報の補足をする。港町に木乃が反応した。食い物関係だ絶対。
「港町なら新鮮な魚介類が？」
「木乃、仕事優先。それにコイキングくらいしか魚いないんじゃない？」
急造ルーウェンチームは波乱含みでグミシップへ向かった。

カイナシティ

「ついたぞカイナシティ」
「あ、アクセルどっか行ったわ」
「アイス巡りでしょどーせ」
ルーウェン、ほむら、木乃の三人がカイナシティに降り立った。アクセルは勝手に動こうとしたのをほむらに見咎められていた。
「海岸沿いの警備だ。俺に任せとけ。俺、強いから」
「じゃあ、私は市場の警備！」
「私は町でまどかの目撃情報を調べるわ。ルーウェンは博物館のクスノキ館長と交渉して薫風のリングを貰って」
アクセル、木乃、ほむらはルーウェンから離れて行動した。確かに配置的にはカイナシティ全域を警護できるが、目的は薫風のリング。なら博物館に戦力を集中させるのがいいとルーウェンは思っていたのだ。
「お、おい？　俺ってこん中じゃ一番弱くないか？　しまっちゃうおじさんだって不意打ちだし、今までの敵は雑魚過ぎんだよ！」
「頑張れ」
アクセルの薄情な一言でルーウェンは町の真ん中に置き去りにされた。ルーウェンは強いと思われがちだが、本人は自身を過小評価してる点がある。
ルーウェンのリアルアースでの能力は勉学、運動共に平均以下。周り曰く、『無茶苦茶に頑張る以外才能ない』とか。しかもその努力すらやり方を間違えて徒労に終わることが大半だ。今回こそ、ロクサスやハイネという優秀なコーチを得られた。しかし、ルーウェンの戦績は不意打ちで勝ったり雑魚を片付けたり、（全部無傷で乗り切ったが）そんなもんだ。
ルーウェン的には仲間からの援護が受けられて、相手を単なるリア充と侮れるなら楽だ。しかし、ネメシスやしまっちゃうおじさんという敵と一対一で張り合う自信はない。本人に自覚はないが、それらと戦ってルーウェンは充分勝てる力を持っている。
これならルーウェンの力をクレアの方が正しく評価してるという

ものだ。
「大丈夫かぁ～？」
ルーウェンは一抹の不安を感じつつ、博物館に向かった。

博物館　入口

「食うかい？」
「えっと、杏子？」
ルーウェンは覚悟を決めて博物館に特効した。遺書の場所（正直、ガンプラの台座の裏だったか、壁時計の裏だったか曖昧）を確認し、黒いカードを名刺代わりに入口の人に名乗ればいい。しかし、博物館の玄関口で知り合いに捕まった。
赤い髪を黒いリボンでポニーテールにした、青緑のパーカーを着た中学生くらいの少女だ。彼女はルーウェンを見るなり、ポッキーの箱を差し出してきた。本人も一本くわえている。
「杏子、ここにいたのか」
「なんだよ。貨物グミシップの警護をしてここに着いて、クスノキ館長からあんたのこと聞いたから、あたしが師匠として様子を見に来てやったんだ。戦績目覚ましいみたいだね」
彼女は佐倉杏子。ほむらと同じ世界に住む魔法少女だ。ルーウェンは彼女から幻影魔法のデカントアビリティを受けとったのだ。
「ほむらと会った。今この町にいる。漆黒の騎士団のメンバーになった」
「よかったな。あいつも友達ができて」
ルーウェンはほむらと会ったことを告げる。ほむらは親友、鹿目まどか捜索のためにメンバーになった。その際、ほむらはまどか捜索を個人行動として優先させることを条件にした。そのくらい、ほむらはまどかのことが大事なのだ。
「なるほど。そうだ、さっき護送したコンテナがあっちにあるんだ。お前の好きなガンプラってのもあるから、見て行くかい？」

「マジ？　いやー、ガンプラがこっちじゃ入手困難だから助かるよ！」
杏子とルーウェンは同時に港の方を見る。港は連絡船、タイドリップ号がミナモシティに出たり、最近は貨物グミシップの停泊港になっている。貨物グミシップからの貨物コンテナが置かれている場所がその隣にあるのだが、

そこがなんの前触れも無く爆発した。

「なっ……！」
「コンテナが！」
杏子とルーウェンは驚いた。あまりにいきなりなことなので、町はパニックに陥る。
「食い物をっ……！　粗末にしやがって！」
杏子はくわえていたポッキーを噛み締めた。ルーウェンの耳にポッキーが折れる音が届く。杏子はその生い立ちから、食べ物を粗末にすることに憤りを感じたのだ。コンテナには食料が入っていた模様。
「大変です！　武装した連中が潜水艦を奪い、逃走しました！」
爆炎に照らされる二人に、クスノキ館長が駆け寄り伝える。杏子はゆっくり口を開く。
「オイ、ルーウェン。お前のグミシップ、水中行けるかい？」
「行けるぜ」
ルーウェンの答えを聞いた杏子は、ほむらの様に変身した。赤い光に包まれ、それが晴れた時、杏子は赤い衣装をまとい、槍を手にしていた。
「戦闘、開始だな」
師匠の行動を理解していたルーウェンは、グミシップを呼ぶコントローラーを操作した。

カイナシティ浜辺　海の家

「これがサイコソーダアイスか。美味いな」
アクセルは浜辺の海の家でサイコソーダアイスという新製品を食べていた。これはサイコソーダをシャーベットにして、バータイプのアイスにしたのだ。見た目がシーソルトアイスに似ていたので、食べた時は驚いたのだ。
アクセルはアイスを食べ終わり、当たりでないことを確認すると立ち上がる。
海の家を出ると、なにやら騒がしい。観光客の悲鳴だろうか。アクセルがよく見ると、火の玉が空から降っている。空には一匹のモンスター。雰囲気から、ポケモンでないことをアクセルは理解した。赤い体に黒い翼、レッドアリーマーだ。
「わかりやすく腹にタイガーフォースのマーク。やるか」
アクセルは牽制にアイスの棒を投げた。レッドアリーマーはアクセルに気付いて体を向ける。
「ぎぎゃぎゃ！（訳：お前の髪型ダサいな！）」
「俺とやる気か、とでも言いたそうだな」
アクセルはレッドアリーマーの言葉を勝手に翻訳する。実際、間違っていたが、アクセルにわからなくてよかっただろう。もし、アクセルがレッドアリーマーの言葉を理解できたら、レッドアリーマーは即消し炭だからだ。
こうして、赤い両者は向かい合った。

カイナシティ　市場

「オマエノシワザダッタノカ」
「木乃、口調」
到着早々、市場が無残に荒らされてるという惨状を見た木乃は（魚介類が食べられなかったため）怒りに燃え、犯人探しを開始。そ

して、犯人を見つけたのだった。木乃の口調は狂気に満ちていた。一見すると事件の黒幕が犬だったことを知り落胆するような口調だが、声には犯人を銃殺刑にするという意思が滲んでいる。
犯人の正体、それは化け物だった。巨大なピラミッド状の兜を被り、肉屋のエプロンのようなものを着た大男だ。手には巨大な鉈。周りにはゴキブリの様なクリーチャー、ラージローチを従えている。大男のクリーチャーの名はレッドピラミッドシング。ジンがユニバースのデータベースから得ていた情報をまとめた資料に両方共載っていた。
「ならば、変身だ木乃！」
「了解！　誰も見てない！」
木乃はホルスターのビッグカノンを取り出し、天高く突き上げ引き金を引く。
「フローム！　マイコールド！　デッートハーンズ！」
変身ヒロインの台詞としては意味不な言葉を叫び、謎の美少女ガンファイターライダーキノの戦いは幕を開けた。

カイナシティ沖　水中

「待ちやがれ！」
「なんであの潜水艦、グミシップより速いんだ？」
杏子とルーウェンは逃げた潜水艦をグミシップで追っていた。何故か潜水艦の方がグミシップより速く、追跡は難航していた。
「この辺は海流が速いからね。潜水艦には海流突破機能があるけど、グミシップには無いからかな？」
クスノキ館長の説明に、杏子は首を傾げる。よくわかってないらしい。グミシップの運転はルーウェンが行っており、彼は理解出来ている様で、策を練っていた。
「あいつらの行く場所がわかれば、海流のない場所までグミシップは飛んで移動できるんだが」

「ルーウェン君。通信だよ」
クスノキ館長が通信を取る。通信は運転席のモニターに映される。
『グミシップのパイロット、聞こえるか？』
「あ、赤い彗星のシャア？　しかも逆シャア版？」
通信を寄越したのは金髪をオールバックにした赤服の男、シャア・アズナブルだ。リアルアースでも有名なので、ルーウェンは知っていた。
『私を知ってるなら話は早い。今私は君達の後ろにいる。幸い、昔に乗ってた水陸両用のズゴックだ。しかし、こう海流が速くては敵わん。そこで策がある』
「あの赤い彗星の策に協力できるなら光栄だ。どうすればいい？」
『君達のグミシップは形状的に充分海流を切り裂ける。だが、パワー不足だ。私のズゴックはパワーがあるが海流の抵抗をもろに受けている。なら、君達のグミシップで海流の抵抗を消し、私のズゴックがパワーで押す。そうすれば速くなるはずだ』
「なるほど。ズゴックでも抵抗は受けにくいが、流線型であるグミシップの方が海流を受け流し易い。だから、グミシップを壁に、後ろの抵抗がない場所からロスのないパワーで押す。グミシップもエンジンを飛ばすから速くなる、と」
「おい待て、なに話してるのかあたしにはさっぱりだ」
杏子の困惑を放置し、ルーウェンはレーダーでシャアのズゴックがグミシップの後ろに付いたことを確認する。
快進撃の始まりだ。と言わんばかりにルーウェンはエンジンを全開にした。

カイナシティ　浜辺

「おらよ！」
「ぎぎゃぎゃぎゃぎゃ！（訳：髪型の割に繊細な武器だな！）」
カイナシティの浜辺では、青空の下、火の玉とチャクラムが飛び

交っていた。観光客は逃げてしまったのでアクセルは存分にチャクラムを飛ばす。レッドアリーマーは飛びながら、火の玉以外にいろいろなものを吐いていた。
「ちっ、厄介な！　だが、段々と動きが掴めてきた。パターンがあるな！」
アクセルはレッドアリーマーのパターンを掴んでいた。傍目には、パターンなどわからないが、ずっと戦えば理解できるようだ。アクセルはパターンを見つけるにしても、早い方だが。
「だが、隙が出来るのを待つ俺じゃねぇ。一気にカタを付ける！」
アクセルは跳びはね、砂浜に降りる。そして、地面をまさぐった。レッドアリーマーはチャンスと思い、空中からアクセルにダイブする。
しかし、それがアクセルの策なのだ。
「かかったな！　大当りだ！」
アクセルは何かを投げる。それは、先ほど牽制に投げたアイスの棒だ。レッドアリーマーは反射的にそれを避ける。
「そこだ！　燃え尽きろ！」
「ぎゃ？」
右に避けたレッドアリーマー。しかし、アクセルはそれを読んで、左右にチャクラムを投げていた。レッドアリーマーは避ける際、左右に避ける確率が高いとさっきまでの戦いで理解したのだ。
「ぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃー！（訳：こんなダサい髪型の奴に負けるだとー！）」
レッドアリーマーの体にチャクラムが突き刺さる。そして爆発。アクセルは爆炎に背を向けて呟いた。
「記憶したか？　俺、強いだろ？」

カイナシティ　市場

「どーするのよこれー！」

キノは困惑していた。レッドピラミッドシングがいつまでも倒れないからだ。新鮮な魚介類、じゃなくて市場を破壊した犯人は不死身だった。

キノ的に思いつく強力武器をぶっ放したが、レッドピラミッドシングはびくともしない。今しがた、ミニミマシンガンも撃ち尽くしたとこだ。

「ならば！　パンツァーファウスト3！」

キノはポーチからパンツァーファウスト3というロケットランチャーを取り出した。発射の際、後ろに爆炎が飛ばないので狭い部屋からでも撃てる代物だ。

「ファイアー！」

キノは容赦無くそのロケランを放つ。レッドピラミッドシングに命中するも、彼は持ちこたえた。

「次！　ヘカート！」

キノが次に取り出したのはヘカートという対物ライフル。対物、というから戦車やヘリコプターを撃つもので、決して人を撃つものではない。キノはそれをレッドピラミッドシングのボディに向けて乱射。反動が強く、普通のライフルの様に持って使えないはずだが、それをキノは平然と乱射していた。

「嘘っ……！」

レッドピラミッドシングはそれでも、弾丸が貫通することなく膝を付く程度だった。キノは最終手段に出る。ビッグカノンだ。

「ターゲットロックオン！」

「魔物じゃないよ？」

「わかってる！」

キノがビッグカノンのハンマーを上げる。しかしその瞬間、声が響いた。

「その必要はないわ」

声と同時に、レッドピラミッドシングの頭上にタンクローリーが

降ってきた。
「逃げろっ！」
状況を理解したキノは全力ダッシュでその場を離れる。タンクローリーの運転席がレッドピラミッドシングを押し潰すと、後方タンクの重みで運転席も潰れる。そして大爆発。
爆発の後には誰もいなかった。
「死ぬかと思ったー」
「まどかはこの町に来てないわね」
ほむらはいきなりキノの隣に現れた。時間を止めていたのだ。タンクローリーもほむらが投げ込んだようだ。
「少しは周りを見てよね」
「問題ないわ。貴女達ならすぐ逃げれるでしょ？」
エルメスからの非難をほむらは平然といなした。きっとタンクローリーで特効するのに慣れてるんだとキノは思った。
「そうだ！　あいつは？」
「逃げたみたいね」
レッドピラミッドシングは生きているとほむらは告げた。キノは一抹の不安を感じて消し飛んだ市場を見ていた。

海底洞窟　入口

「追い詰めたぞ！」
「海底洞窟の入口を塞いでおいてよかったよ」
潜水艦を奪って逃げた犯人は遂に追い詰められた。犯人は黒いマントの様なものを着た男の様だ。ルーウェン、杏子、シャアの三人が男ににじり寄る。
「私の正体を知りたいか？」
「すっげえ知りたい！　お前絶対様子見に来た黒幕さんだろ！」
男がルーウェンに聞くと、ルーウェンは興奮気味に答えた。男は

やれやれと言わんばかりにマントを脱ぐ。
「君の予想通り、私がタイガーフォースのリーダー。名前は……、＊（アスタリスク）とでも名乗っておこう」
そう言ったタイガーフォースリーダー、＊の姿は荘厳そのものだった。
全身を白銀の鎧で包み、顔も隠している。鎧の布地は黒なので、コントラストがよく映える。
「結局顔見えねーじゃん」
「君も過去を捨てたのか。奇遇だな、私もだよ」
杏子が辛辣な言葉を、シャアが共感の声を投げかける。対してルーウェンは二人とベクトルの違う反応を見せた。
「すげっー！　ラスボスらしいな第一形態から！　カッコイイ！」
「君は見る目があるようだね。私はまだ3回の変身を残しているが、それは終盤のお楽しみだ」
ルーウェンと＊は気が合いそうだ。その分では、タイガーフォースという組織名の由来がトラウマを変換した虎馬、つまりタイガーホースの鈍りからきてることも理解してるだろうと＊は思った。
「私の手には現在、煌炎、水龍、天光、常闇、命樹のリングがある。君には震土がある。八元素のリングは我々の目的に必要なのだ。譲ってくれないか？　もちろんただではないさ。リアルアースも復活出来るし、君の欲しいものはなんでもやる」
＊はルーウェン達に交渉を持ち掛けた。＊はどうやら、リアルアースを直す方法を知っているらしい。ルーウェンは少し考えて言った。
「お前、リアルアースとかが崩壊した理由がわかるのか？　少し気になっていたところだ」
「ああ、それか。ポートランドは部下が天光と常闇のリングを手に入れる際、同時に取らねばならんのをしくじったから保護機能が働いて崩壊した。もう片方の行方をくらますシステムだった。その他は……、世界からエネルギーを生み出す新型の発電所を開発した

のだが、それを資金調度のため世界の政治機関売った。案の定、彼らは扱い切れずに世界を保つエネルギーまで吸い上げたさ。特にリアルアースの日本の都知事はアホでね。リアルアースは一度、どうしても崩壊させる必要があったから調度いい」
＊はルーウェンの質問に答える。ルーウェンが答えをメモしてると、退屈そうな声が聞こえた。
「＊……。喋り過ぎだ。まったく、人には話が長いという割に、自分が一番長いじゃないか」
「すまないクレア。待たせたね。出番だ」
砂地の地面に、クレアはふわりと降り立った。洞窟の天井に彼女は潜んでいたのだ。白い騎士装は＊と並ぶに相応しい。
クレアは＊の隣に立ち、リングを見せる。
「それは、薫風のリング！」
クスノキ館長が驚く、クレアが手にしてるリングは薫風のリングだ。右中指のリングが命樹のようだ。薫風のリングは館長室に置いてあったのだ。恐らく、逃げ出す前に持ち去ったのだろう。爆破事件の犯人がこの二人なら、片方が爆破し片方がリングを入手、その後合流なんてことも可能だ。
「命樹を中指にしてるわけか？　これは君との決闘の誓いだ。いわば、婚約指輪みたいなものだ」
「いや、聞いてねぇ」
＊の時と打って変わり、ルーウェンは冷たくツッコミを入れる。クレアは薫風のリングを口元に持っていく。そして、薄い桃色の、桜の様に艶っぽい唇でリングに口づけし、ルーウェンに言う。
「これは君がする誓いだ、ルーウェン・ヴァイサス。この薫風のリングは預ける。私がこれを奪う時は必ず君からだ」
クレアはルーウェンにリングを投げる。ルーウェンはリングを掴み、クレアを見る。ルーウェンには、この可憐な少女が戦いに囚われた修羅だとは思えなかった。しかし、充分に生きてる充実感は伝わる。

「ありがとう。俺、少し悩んでたんだと思う。戦いに、命の奪い合いに快感を得てた自分に。死ぬかもしれないってことは、今は生きてるってことなんだな。共感できる奴がいてよかった、ひとりぼっちは寂しいもんな」

「礼はいい。それより、フラれた件は大丈夫か？　私は君と、万全な状態で戦いたい」

いい雰囲気の二人に、杏子達は釈然としない気分でいた。なんで敵と仲良くなるねん、とでも言いたいのか。

「あたしの台詞とりやがった……！　会心の名台詞、ひとりぼっちは寂しいもんな、が！」

台詞をルーウェンに取られた杏子が歯ぎしりし、かつて命懸けで戦った敵と共闘した経験を持つシャアは感慨深げに呟く。

「敵と味方は二極ではない。状況が変われば敵が味方に、味方が敵になる時代だ」

そしてクスノキ館長が納得できないと呟く。

「あの、これってわざわざここでやる必要ありました？」

5．ひとりぼっちは寂しいもんな（後書き）

解説

レッドアリーマー
魔界村に登場する敵。追尾能力が高く、多くのプレイヤーにトラウマを刻んだ。よく間違えられる（実際間違えた）が、レッドアーリマーではない。

レッドピラミッドシング
サイレントヒルに登場するクリーチャー。通称、△様。再登場の兆しあり。劇中通りの不死身である。

ラージローチ
ゴキブリのクリーチャー。レッドピラミッドシングはサイレントヒルでもゴキブリを従えてるようなので、バイオハザードから出ていただいた。

シャア・アズナブル
お馴染み赤い彗星。説明不要だが、『逆襲のシャア』バージョンで出てくれた。

6．それぞれの懐古（前書き）

世界政府とは？

数多の世界を統べる政府。最近腐敗してる。

司法、立法、行政の三つはそれぞれ別の世界にあり、ポートランドに立法機関があるようだ。

6．それぞれの懐古

トワイライトタウン　屋敷

「我々は現在、震土、薫風のリングを所有している」

屋敷の会議室で、シャアは一人呟いた。司令系統の人数が少ない漆黒の騎士団に、戦術参謀として加入したのだ。彼とて一年戦争を初めとする大戦を潜り抜けた軍人。モビルスーツと人では意外に（地上戦の場合）戦術は変わらないもので、シャアが適任とルーウェンが考えたのだ。

「八元素のリングとしては圧倒的不利な状況だが、これまでの戦績は悪くない。数ではタイガーフォースとやらが上だが、戦力では上回っているか」

シャアは資料を見て状況を把握した。数で劣りこそすれ、一人ひとりの実力はこちらが上。まるでホワイトベースかアーガマだと思えた。

「ここまで数が少ないと、一人の価値が大きい。とりあえず、データベースを見て彼らの経歴を調べよう」

シャアは端末を操作した。

ジンの部屋

「熱、下がらないね」

「う、うう……」

ジンは部屋で寝ていた。冷えピタでは瞬時に冷たさが奪われるので、ドライアイスを袋にいれて額に当てている。枕も冷蔵庫に入れて冷たくするやつだ。

羽川はジンが脇に挟んでいた体温計を見て言った。下がらないと言ったが、測定不能なのでもしかしたら上がってるかもしれない。

ジンの体は冬のストーブみたいに熱かった。ジン的には、サイクロプスの目がある人間はこんな高熱が出るのか、と生まれて初めての苦しみを味わっていた。

「う、ジン……」

「そういえば、ジンって恩人の名前だったね」

羽川は看病してる間にジンに聞いた昔を思い出した。

ジン（当時はメアリーと呼ばれていた）は、初代ジン・クレッシェンドに拾われた。それ以前の記憶は無く、荒涼とした大地にやたらぶかぶかの服を着て座り込んでいたのが最古の記憶だそうだ。

その後は町を点々とし、サイクロプスの目が原因で迫害されると気づいた頃にはボロボロでバス停のベンチに寝ていた。そこで、初代ジンに出会ったのだ。

しばらくは幸せに過ごしていたが、事故で初代ジンが死に、その際サイクロプスの目も露見してしまったのだ。そこから、住んでいた場所を追い出され、ポートランドのユニバースで働くようになった。

そんな辛い過去を持つが故、ジンはそれを思い出したり、サイクロプスの目のことを考えて辛くならないように、過去を振り切るように戦い続けるのだ。一日中休むのも久しぶりらしい。

「でも熱、下がらないのね」

羽川はジンの寝顔を見ながら心配そうに呟いた。

トワイライトタウン　森

「これまで殺した累計は３２人か。名前を覚えてるのはバンの甘ちゃん野郎だけだな」

「なんだそりゃ？　いちいち殺した人数数えるのか？」

トワイライトタウンのトラム広場にある壁、そこは一部欠けてい

る。そこから森に行け、漆黒の騎士団本部の屋敷にもそこからいく。ルーウェンは杏子と久々に鍛錬をしていた。杏子曰く、ルーウェンは圧倒的に経験不足なのが弱点だそうだ。そこで、模擬戦を行い戦闘経験を積むのだ。ルーウェンは前に杏子と会った時より強くなっていた。

今は休憩がてら高い木の枝に二人して座っていた。

「なあ、お前フラれたんだって？」

「う……、クレアめ」

杏子がフラれた話をふる。クレアがサラっと言ってしまったのだ。ルーウェンは口惜しそうに言った。

「いいんだよ。今は違う人好きなんだから。年上過ぎだけど」

「ヨヨだろ」

「……」

「図星か」

杏子は一発で言い当てた。大方、フラれて落ち込んでいたところ励まされて好きになったといったとこだろう。

「なんか行動に移したのか？　無行動で告白して失敗したんだろう？」

「ああ、すでにバイクの二人乗りはした」

ルーウェンはサラマンダーというブランド物バイクを持っている。サラマンダーはオンロード最速のバイクだそうだ。

「そういえばお前、リアルアースってのに帰るつもりなのか？」

「最初はそのつもりだったが、今じゃこっちの方がいいな。帰らん」

ルーウェンはリアルアースに帰るつもりはないと宣言した。リアルアースにさして思い入れがあるわけではないらしく、こっちの方がいいらしい。

「それに、リアルアースが復活する保証はないからな」

「ふぅん。じゃ、その『断罪のリング』ってのはなんだ？」

杏子はここぞとばかりに質問責めをする。漆黒の騎士団に入った

わけではなく、明日には貨物グミシップの護衛に戻るからだろう。
「これか？　これはな、昔貰ったんだ。そういえばこっちの世界、前に行ったことあるんだよな」
「どういうことだオイ。リアルアースってのは簡単に出れるもんじゃないだろ」
「なにか特別なものを使ったらしい。小学生の頃、学校の図書室で本を読んでたんだ。そしたら本が光って、こっちの世界、トワイライトタウンじゃないにせよ来れた。今までは保健室で目が覚めたのもあって、寝オチした夢だと思ってたが、よく考えればリアルアースの外に出れるアイテムだったのかもな、その本。夢で貰った指輪が現実にあるわけないし」
ルーウェンは右手の指輪を見て言った。断罪のリング、その力は依然知れない。だが、何らかの力はあるはず。
「そういえば最近、世界政府が腐敗とか騒いでいたな。リアルアースが崩壊してから二ヶ月、なんの動きもないのは、政府が政局ってのに必死だったからとか。政局ってなんだ？　食い物じゃないのが腐るのか？」
「政局ってのは、選挙とかどこが与党になるとかってやつだ。政治腐敗ってのは、まあ、政治家が違法に金貰って、悪代官と越後屋みたいなやつだ」
なるほど、とルーウェンの説明で杏子は理解したようだ。かつて羽川も政府について言及していた。しまっちゃうおじさんも政府との関係を明かしている。しまっちゃうおじさんはタイガーフォースの一員だったはず。なら、タイガーフォースと政府は何らかの繋がりがあるとルーウェンは考えていた。
「タイガーフォースはまだ謎があるな……」
「そうだな。ま、あたしは難しいこと考えんの苦手だから、ぶっ飛ばすだけだがな」
杏子は空を見据えて言った。

学園都市　とある病院

ここは科学技術が発展し、人口の八割が学生という特殊な町、学園都市。この町は学生に能力開発という、超能力のカリキュラムを組ませている。このカリキュラムにより、学生は個々により性質や強弱様々な超能力を有するのだ。

しかし、この町の学生でない人間が、能力開発を受けていた。

「うむ、この能力ならあの快楽殺人鬼に勝てる！」

能力の測定を終えて測定室から出てきたのはバン・グローリーだった。ルーウェンが殺したはずだが、生きていたみたいだ。この病院の医者がカエル顔に似合わず名医だったからだ。しかも、患者に必要なものは何でも用意するという信念と、学園都市理事長へのコネにより能力開発も受けてしまった。

ルーウェンにとってはピンチだが、能力開発が上手くいかなければ大丈夫だ。だが、その能力開発が大成功したから問題なのだ。

「レベル5、つまり最高ランク。この力があれば！」

バンは両手を眺めて廊下を歩いていた。彼の目的はただ一つ。リアルアースに帰ることだ。

彼はアニメがほとんど放映されないリアルアース日本国静岡県で育ったせいか、体育会系でありアニメを見るのは弱さの証明と考えていた。外で動き回ることこそ己を強くすることだと教わったのだ。

バンは受験生だが、すでに特待の誘いが来ている。競技は水泳。将来はオリンピックで金メダルもと言われた記録を持ち、彼の将来は輝いていた。それなのに、リアルアースが崩壊して将来は失われた。バンはなんとしても、リアルアースに戻らねばならない。

タイガーフォースには集団で志願した。周囲でどうしてもリアルアースに戻らねばならない仲間を募ったのだ。数に押されたのか＊も快くタイガーフォースに加入を許した。少し予定はズレたが、バンの未来は軌道修正されたかに思えた。

その矢先、ルーウェン・ヴァイサスの登場である。ルーウェンは

容赦なくバンの仲間を虐殺し、リアルアースに帰りたくないという怠惰な理由でバンと仲間達の未来を奪ったのだ。
「ふむ、能力を得て調子づくのはよいが、力を持つことは相当な覚悟を要するのだ」
廊下を歩いていたバンにクレアが声をかける。窓を開け、サッシに腰をかけている。病院に吹き込む風が彼女の髪を撫でる。
「覚悟、だと？」
「大きな力ほど、使い方を誤れば悲劇を産む。もともと、そんな力のないルーウェンや私には無縁だがな」
「ルーウェンは力の使い方を間違えてる。なぜその力をリアルアース復活という当たり前の目的に使わないんだ！」
「お前にとっては当たり前でも、ルーウェンにとっては違う。彼はこっちの世界の方が好きみたいだからな」
バンはリアルアース復活に協力することが当たり前だと考えていた。しかし、リアルアースに帰りたくない人間もいることをクレアは知っている。

リアルアースの住人には、封印がかけられていた。リアルアースの特殊な一面だ。
しかし、リアルアースの崩壊で封印は失われた。封印が解ければ姿も名前も能力も、全てが本来のものとなる。それが今のクレアやバン、ルーウェンなのだ。
リアルアースでのクレアは病弱な少女だった。ゲームの中の屈強な戦士に憧れても、入退院を繰り返す生活ではトレーニング一つできない有様だ。だが、リアルアースが崩壊して自分の封印が解けると、病気一つしないどころか戦士もかくやという身体能力を得た。リアルアースに帰ればまた病院生活だ。クレアも本心では帰りたくない、リアルアースの復活は望んでいなかった。
「それではダメだ！　俺達が生きるべき本当の世界は、リアルアースなんだ！　そこから逃げたらダメなんだ！」

「貴様には一生わからん。病室から出ることなく、なにも出来ず、一生命をだらだらと伸ばすだけの、人間の気持ちが！」
クレアは珍しく語気を強めた。バンはリアルアースへの回帰を望んでいるが、あまりにリアルを知らない。知らな過ぎる。恐らく彼は、ルーウェンやクレアの様な人間の気持ちを理解せず、リアルアースが復活したらしたで、独善的な感情を持ってリアルアース住人全員を探して帰らせるだろう。そんな馬鹿な真似を、やる奴なのだ。バン・グローリーは。
「ルーウェンがお前に言ったそうだな。『お前を殺さないと誰かが悲しむ気がする』と。それは正しいみたいだ」
クレアはそれだけ言うと、病院の窓からいなくなった。バンは大馬鹿野郎なので、クレアの気持ちには微塵も気づいていなかった。

行政機関　ホールシティ

ポートランドとは別の世界に、世界政府の行政機関は存在する。ポートランドにあるのは貿易の施設や三権分立でいうとこの立法機関だ。司法機関はまた、別の世界にある。それぞれワープホールで繋がってるとはいえ、多少面倒に感じる議員や役人がいるのも事実だ。
「かなり非効率的ですね。まるで要塞のようだ」
「すいません。7年ほど前のサイクロプスによる襲撃事件により、一時世界政府の中枢が機能しなくなったためです。そこで司法、立法、行政の三権を世界ごとに分けることとしたのです」
無駄に豪華な廊下を歩くのは白い鎧の＊。その隣にへつらってる政治家は面倒な世界政府の仕組みのわけを説明した。
「ふむ、だいたい理解した。『サイクロプスの目』とは、その『サイクロプス』という組織に属する者の印と。たしか、そう最初におっしゃいましたよね？」
「はいそうです。取り分け、ジンという娘は目を持ち、容姿が首

謀者、メアリー・ブロードに似てるため、我々ではそやつの血縁者と考えています。メアリーの妹か娘かはハッキリしませんが、サイクロプスの少ない残党や新たにメアリーに感化された人間がジンを押し立て、再び我々に刃向かったら大変です」

＊は説明を聞きながら昔を思った。彼はかつて、世界政府直属の兵士だった。メアリーもまた、＊の同僚だったが、ある事情により世界政府に反旗を翻したのだ。

「メアリー・ブロード。なぜ君はあんなことを？　そういえば、ジンが拾った子供に彼女の名前をつけていたのは、あの娘がメアリーに似てるからだったね」

＊の言うジンとは、初代ジンのことである。メアリーが世界政府に反抗し敗れた後、初代ジンと＊は一度面識がある。その際に初代ジンが話していたのだ。ルーウェンが初代ジンにそっくりで、＊も一瞬驚いたことはクレアにも黙ってるが。

「何でも、そのサイクロプスの乱を平定したのはタイガーフォースを率いた貴方とか。世界中の荒くれ者を束ねる貴方の腕は聞いております」

「よしてくれ。荒くれ者ほど乗せやすい奴はいない。寧ろ、臆病者や怠け者を束ねる方が私には難儀だ」

「またまたご謙遜を……」

＊はその議員の態度を見て、かつてメアリーと話したことを思い出した。

『世界政府は腐っている』

長い茶髪をなびかせたメアリー・ブロードは金色の瞳で＊を見つめて言った。

『そんなことくらいわかっているさ。だから私は、内部から世界政府を変革する』

『甘い！　腐った連中がそんなので変わるのか！　私には共に戦う仲間がいる。自分の手を血で汚さなきゃ、何も守れない！』

メアリーが吐き捨てた。メアリーはこの話をする前日、世界政府

の無茶な開拓作戦で自分の部下を全て失ったのだ。
『君が道を踏み外せば、死んだ部下も悲しむ』
『黙れ！　私の気持ちなんかわからないくせに！　私は奴のとこへ行く、ジンのところに』
メアリーはそう言って＊のもとを去った。＊が自らメアリーを倒した時、自分のやり方で世界政府を正すと彼女に誓った。
今も廊下で堂々と賄賂が行われている。そんな世界政府は変わらねばならない。
（待っていてくれメアリー。私は世界政府を正す。自分のやり方で！）
＊は強い意思で、豪華な絨毯の敷かれた廊下を踏み出した。

番外　テストですと？（前書き）

「テストとは、青春を阻害するものでしかない」
「いや、運動できない人間にはテストの成績が全てだ。そのテストすら出来てなさそうだがな、ルーウェンは」
『バン・グローリーとその友人、テストについて語る』

番外　テストですと？

トワイライトタウン　屋敷の会議室

「なあジン、お前テストってどう思う」
「テストってあれか？　新装備の実用テスト」
ルーウェンは学校の話題をジンに振ったことを後悔した。ジンは生まれてこのかた、テストを受けたことがない。最低限の読み書き計算ができる程度で、学校には行ってないのだ。
「じゃあ、マイナス１足すマイナス１は？」
「……『マイナス』ってなんだ？　新手の茄子か？　あ、それなら知ってる。自分の家でマイ茄子育てるのが流行りなんだ。えっと、答えはマイナスが二つだから２個だ」
「……」
聞いた俺が馬鹿だったよ、とばかりにルーウェンは沈黙した。正解はマイナス２。数学において、中学版１＋１みたいな問題だったが、それすらジンには出来なかった。
「んじゃ、植物が二酸化炭素を取り入れて酸素を作ることをなんと言う？」
ルーウェンは問題を変えた。ここまで来ると一般教養レベルだが、それすら怪しい感じがする。
「光合成」
「意外に出来たな」
「舐めてるのか？」
さすがにこれは出来た。ユニバースに入るには一般教養も必要らしい。
「お前、今何歳だ？」
「およそ１６」
「年上だったの？」

ルーウェンは衝撃の事実を耳にした。ジンはルーウェンより年上だったのだ。ルーウェンは１５歳である。
衝撃から立ち直れないまま、ルーウェンは問題を出した。ここまで行くと数学より算数のレベルだが。
「えっと、九九言える？」
「本格的に舐めてるのか？　私は三回までパスを許されれば言える」
「それ言えたことにならん」
ルーウェンはジンの限界を把握した。これで買い物とか困らないのだろうか。いや、こいつがまともに買い物するはずない、とルーウェンはジンの食生活を見て思った。
基本的に食事は近くの食堂で食べるのが漆黒の騎士団だが、ジンはカロリーメイトみたいなものをかじってるのみでまともな食事風景を全員が見たことがない。ルーアという友人なら見たことがありそうなのだが。
「とりあえず、それで生活できるようだな。算数って」
ルーウェンは徐々に自分が勉強してることが無意味なのではと思いだした。ルーウェンは羽川の奨めで義務教育分は勉強している。進路についてはあまり考えてないにせよ、勉強だけはしていたのだ。
「進路か。どうすっかねー」
ルーウェンはタイガーフォースを倒してから進路を考えることにした。

番外　テストですと？（後書き）

テストのせいで二週間連続更新出来ず……！
最終回まであと４話なのに！

7．主役のいない学園都市（前書き）

世界ガイド
学園都市
『とある魔術の禁書目録』に登場。いわゆる科学サイド。超能力の開発が行われており、人口の８割が学生というのも特徴。

7．主役のいない学園都市

トワイライトタウン　屋敷会議室

「緊急事態か」

「そうなんです。ジンの熱が下がらなくて……」

会議室でディズと羽川が話している。用件はジンの体調の事だろう。ジンはここ数日、高熱を出して寝込んでいるのだが、その熱がウルトラセブンもビックリな超高熱なのだ。

「なら、学園都市はどうだ？　ルーウェンが言うに、腕のいい医者がいるそうじゃないか。ヨヨからも受診を奨められた。あそこなら装備の拡充も可能かもしれないな」

「なら、次の目的地は学園都市ですね」

羽川は手元の端末でグミシップにアクセスする。これでグミシップに自動操縦の行き先として学園都市が追加される。

「では、早速ミッションプランを立てよう」

ディズはミッションプランを決めるため、一旦会議室を出た。

グミシップ内部

「今回はジンが戦闘できない。よって、いつもより多めにメンバーを選出する」

「で、決まったのはこのメンバーなわけ？」

「……」

ルーウェンは例によって例の如く、くじ引きでメンバーを選出した。選出されたメンバーがほむら、ＢＲＳという問題はあったが。

よりによって無口な二人が選ばれたためルーウェンは己を呪った。ルーウェンとしては戦力戦法が共に同等な三人から誰が選ばれようが問題ない。しかし、コミュニケーションの都合上一番話しにくい

ほむらとＢＲＳが二人揃ってというのはルーウェン的に厳しかったりする。
「なら、行くか？」
ルーウェンは重い空気を留めないためにグミシップを動かす。彼女達は好きで気分を重くしてるわけではないが、無口寡黙では自然とそうならざるをえない。
ジンをすでに乗せてある。病人には騒がしくない方が嬉しいかもしれないとルーウェンは自分を納得させた。
「そういえばルーウェンは、佐倉さんの弟子なの？　どことなく身のこなしが似てるわ」
「あ、ああ。まあな。杏子が言うには、俺は剣術の才能があるらしい。リアルアースじゃ運動が嫌いだったから、その片鱗も見れなかったがね」
ほむらはそんなルーウェンの気持ちを察してか、話題をふった。杏子が人を褒めること自体珍しいことだが、ベテランの魔法少女、特に近接戦闘をメインにした杏子がいうのだから間違いないだろうとほむらは自己完結した。ＢＲＳは黙ってぼんやりグミシップの外を見るだけだった。
グミシップは一瞬で宇宙空間に出、一気に加速する。向かう先は学園都市。
「たしか杏子は、さやかって青髪の奴探してたな」
学園都市に関してはリアルアースにいた頃より情報を得ているルーウェン。二次元の世界と諦めていた世界に行ける興奮はリアルアースの住民ならではだ。ルーウェンはあわよくば、能力開発を受けようと考えていた。
そんなルーウェンの浮ついた気持ちを尻目に、ＢＲＳは険しい顔立ちで進行方向を見つめていた。

学園都市　常盤台中学

常盤台中学は学園都市でも5本の指に入る有名校である。また世界屈指のお嬢様学校であり、ペルシャ絨毯の直し方を習ったり選択授業で宇宙に関するものもあったり、本当に世界で通用する人材を作る気満々である。名ばかりのお嬢様校とは違うのだ。さらに、能力開発の方も凄い。学園都市に七人しかいないレベル5が二人在籍し、全生徒の力を合わせれば生身でホワイトハウスを攻略可能だそうだ。

「マイケル・ウィルソン大統領がいるなら話は別、か」

常盤台中学の寮前、そこでクレア・ハーディは人を待っていた。カモフラージュのためか常盤台中学の冬服を着ていた。これがよく似合っているのだ。クレアは事前に得た情報を、前に別の世界で会った大統領と重ねて回想した。なんでも大統領魂で解決するハイテンション大統領相手では、さすがの能力者達も厳しいかもしれない。

そんなことを考えてると、寮の入口から＊が出てきた。

「やー、待ったかい？　協力を仰ぎにきたレベル5の超電磁砲、御坂美琴君は不在だそうだ。なんでも、単身ロシアだって。第三次世界大戦で一方通行もいないそうだ」

「そうか。ならアスタリスク魂でなんとかしてみるか？」

クレアは屋台で買った、ひよこを模ったお菓子にプラスチックのフォークを刺した。その様子に＊はおののいた。

「ひ、ひよこが！　あ、なんだお菓子か。ついにクレア君が強さを求めて無垢なひよこ達を踊り食い……」

「誰がするか」

クレアは＊の言葉にちょっとむくれた。言葉遣いが古臭いとはいえ、クレアは13歳の少女。驚くことにルーウェンより年下なのだ。無論、ひよこの焼き菓子も食べるのをもったいないと思いつつほうばっているのだ。

「ところでバンの奴は作戦中か？」

「そのようだ。今回はリングの無い世界。狙うはジン一人。内通者の情報によれば、ルーウェンはジンの治療を目的に来るそうだ」

クレアはバンのことを聞いた。ちなみにバンはルーウェンと同い年だ。
「内通者などいつの間に……」
クレアは＊の周到さに舌を巻きつつ、もう一つひよこをほうばった。

学園都市　とある病院の病室

「よかった。ただの過労だって。少し安静にすれば治るよ」
ジンの病床に付き合ったのはヨヨ一人だった。戦闘要員とは別にグミシップに乗り込み、ジンの世話をしていた。おかげでジンは「なぜなら私はアメリカ合衆国大統領だからだ！」と叫ぶのみで済んだ。
他のメンバーがいないのは戦闘を行う戦士としての気遣いだろう。共に戦場を行く仲間に弱い部分を見せたくないというジンの気持ちをルーウェンが汲み取ったのだ。診察室あたりから姿が見えない。もしルーウェン達がジンをお見舞いしようとしたなら病室探しに苦労するだろう。
個室のベッドに横たわるジンはヨヨに言った。
「ヨヨ、しばらく一人にして」
「了解っ！」
ヨヨはジンの言葉に満面の笑みで敬礼した。ルーウェンがヨヨにジンの事を相談したら、ヨヨは医者に見せようと言ったそうだ。そこでルーウェンがカエル顔の医者がいる病院まで行くことを決めた。
ヨヨは鼻歌混じりに病室を後にする。扉が閉まる音を聞くと、ジンは目を閉じた。
少しだけ昔を思った。かつて、彼女が初代ジンに拾われた時のことだ。冷たい雨に打たれていたら、いきなり柔らかで温かい布団の上に寝かされていたから、死んだのかと思った。初代ジンは彼女に似ている女性の名前から取って、メアリー・ブロードと名付けてく

れた。
不意に、ジンの目から涙が溢れる。一人になった心細さからか、それとも昔の暖かな思い出からか、彼女にはわからない。しかし、彼女は気付いていなかった。
ヨヨが去った扉から、バン・グローリーが姿を現したことに。

学園都市　地下街

「よし、俺らは学園都市を楽しむぞ！」
「その必要はないわ」
ルーウェンの宣言はほむらに抹消された。ＢＲＳもコクリと頷いてほむらに同意。そして二人は各々好きな方向へ行ってしまった。学園都市にない学校の制服を着たほむらとフライトユニットを付けたＢＲＳの格好は大変目立つと心配になりながら、ルーウェンは二人を見送った。
そこからはルーウェン一人旅である。ルーウェンは地下街をしばらくぶらついた。地下街のゲームセンターにはリアルアースにない魅力的なゲームもあるが、今ルーウェンが求めているのはジンへのお土産だ。
ルーウェンは漆黒の騎士団外部派遣チームとして働き、決して安くない報酬も得ている。それがルーウェンの食費だったりお小遣だったりするのだ。
お金の使い方が下手なルーウェンはついつい、お金を使わないで貯めてしまう。彼は３００円以上を一度に消費することに躊躇いを感じる性格だ。だが、使うと決めた分は使う。
「そうだな。アクセサリーとか？」
ルーウェンは手近なアクセサリーショップに入った。アクセサリー類が沢山陳列され、光り物好きなルーウェンはそれだけでテンションが少し上がる。
ルーウェンはひとまず、ジンに似合いそうなものを探す。とはい

え、ルーウェンにアクセサリーなどわかるわけがない。とりあえず適当にその辺のペンダントでも手に取ろうとする。三日月を模ったペンダントだ。ジンの持つ黒いカードには三日月が印刷されていたからだ。

黒いカードは後に漆黒の騎士団に加入したほむら、木乃、ＢＲＳも作っており、それぞれ時計、リボルバー、星のマークが印刷されている。

そんなマークからヒントを得たルーウェンだったが、ペンダントを取ろうとした手が他の手と触れ合う。

ルーウェンは手の主を足元から確認する。茶色いローファー、チェックのプリーツスカートから露出する白く細い脚、着ているのは常盤台中学の冬服、腰の下まで伸びた金髪は空調の風でさえ揺れるほど軽やかで、うさぎの様に赤い瞳はこちらをキョトンと見つめていた。ただ、背負った筒の様なケースが異質さを感じさせる。

「クレア？」

「なんだルーウェンか」

手の主はクレアだった。クレアはルーウェンの方を向いてぞんざいに言った。

「ここはフラれた男の来る場所ではないが？」

「ギギギ……」

今だ引きずってるのか、ルーウェンは妙な声で呻く。男の方が引きずるのだ。ルーウェンもなにげに言い返す。

「お前も、こういうのに興味があったとはな」

「私も女だ。リアルアースではまともにオシャレも出来ないくらい入院生活が続いてな。ここに来て元気になったから、やりたいことをやるだけだ」

クレアはさらりと流す。人生いろいろだなとかルーウェンは思ったりしたが、特に何も言わなかった。

それからしばらくして、爆発が起きる。地下街の遠くでなにかが爆発したのだ。

「なんだ、作戦でもしてるのか？」
ルーウェンは落ち着いて答えた。クレアは背負った筒を下ろし、中身を取り出す。中身は白い槍だった。筒に書かれた白いワイバーンの紋章は鍛冶屋としては有名な『リズベット武具店』のものだ。
「まあ、な。だが、私の目的は君との戦いだ」
「じゃ、始めますか」
クレアの言葉を聞くなり、ルーウェンは武器を抜いた。

学園都市　上空

「しつこい……」
ＢＲＳはフライトユニットで上空を飛びながら戦闘していた。学生の頭を掠めパニックを巻き起こしていたモンスター、サライムシの群れに長大なキャノンを向け、彼女は呟く。
１秒間に２０発の岩石を乱射出来るというキャノン、『Ｒｏｃｋ★ｃａｎｎｏｎ』はサライムシのボール状に細い手をぶら下げた身体に標準を合わせる。凄まじい轟音と共にキャノンから岩石が発射される。
それだけで１００匹近いサライムシの群れは一掃される。上空での戦闘が5分に渡っており、強風を起こす風船みたいな生物やくらげみたいな生物もいくらか倒した。
ＢＲＳは不意に空を見上げた。空から石で出来た円筒が二つ落ちてきたからだ。彼女はそれを難無くかわすと、円筒が落ちた地面を見た。円筒はちょうど横にある程度の間合いを取って落ちている。ＢＲＳは珍しく困惑の表情を浮かべた。なにより、落とすならただの円筒より爆弾の類が効果的ではないのかと感じたのだ。
さらにＢＲＳは自分の目を疑うこととなる。透明で巨大な人影が円筒の後を追うように落ちてきたのだ。巨大な人影は二つの円筒を手と足でそれぞれ挟み込む。その姿はまるで車だ。
「気味悪い」

これまた珍しく、ＢＲＳは本音を吐き出した。彼女は試しに剣で斬ることにした。一気に地上に降下し、人影の頭を叩き斬る。しかし、人影はびくともしない。ＢＲＳは次に、キャノンを向ける。キャノンのフルオート射撃が人影を襲う。すると人影が紫へ変色した。

「目標補足、衝撃に弱い！」

ＢＲＳはそれを見定め、剣で的確に切り付ける。人影はどういう原理か、タイヤにしていた円筒を破壊されて逃げに徹した。

「逃がさない」

ＢＲＳはキャノンのバヨネットに目を向けた。衝撃に弱い弱点を突き、重量のあるキャノンで人影を討つのだ。バヨネットもキャノンの質量が加われば十分な衝撃だ。彼女は飛び上がり、位置エネルギーも稼ぐ。人影が息を切らしぜーぜーやってる瞬間に目を付けた。

まるで必殺技みたいだとＢＲＳは思った。そこで、ルーウェンみたく技名でも叫ぶことにした。ルーウェン曰く、技名を叫ぶと技をイメージしやすく、上手くいくのだとか。

「ギロチンキャノン」

彼女にしては頭を捻って考えた必殺技名だ。頭の捻り具合と反比例して捻りのない技名の後、ＢＲＳはフライトユニットを駆使して急降下。錐揉み状に回転してるため、回転によるエネルギーも追加された。そして、ハイパワーのバヨネットが人影を切り裂いた。

人影はそのまま真っ二つとなり、霧散した。あまりに呆気ない最後だった。

「他愛ない」

ＢＲＳはツインテールをなびかせ感想を口にする。元の世界では人類の最終兵器だった少女には、リアルアースの住民にトラウマを刻んだ『アメボウズ』の討伐すら準備運動でしかなかった。

学園都市　操車場

ここは第一七学区にある操車場。そこではかつて、最強の能力者

と最弱の能力者の対決が行われた。今、そこに置かれたコンテナの上には外の世界から来たものがいた。
「ま、サイクロプス捕獲なんて口実なんだけどね」
＊はコンテナの上に立って呟いた。タイガーフォースは『サイクロプスの反乱』の際、政府直属軍で力のあった＊が世界中から選りすぐった戦力を束ねた非正規部隊だ。今はサイクロプスの捕獲の任務に当たっているが、それは単なる口実に過ぎないのだ。任務をズルズルと伸ばして世界を巡る理由を作る。そして八元素のリングを手にするために。
「フロントワールドとは、直訳で『前線世界』という意味だ。世界政府がかつて、恐怖政府を敷くために作った兵器だ。リアルアースはその保護結界。フロントワールドは出来上がった瞬間、とある魔術師にリアルアースで封じられた。ここまで、わからないことは？　あれば解説いたそう」
「その必要はないわ」
今まで＊は独白してる様に思えた。しかし、後ろにいる者に語りかけていたのだ。＊はさらに続ける。
「世界政府はリアルアースのある政治家、日本という国の首都を治める者に新型の発電所を渡した。それは世界からエネルギーを吸い取りいずれ崩壊に導くものだ。他の世界にも同様の発電所を渡したのは、狙いがリアルアース崩壊であることが判明するのを避けるため。つまり君の世界は下らないカモフラージュに使い捨てられたのだよ、暁美ほむら君」
「世界が壊れても、まどかが救われれば充分」
＊の後ろにいたのはほむらだった。既に変身しており、いつでも戦える状態だ。だが、ほむらは戦うより先に話を始める。そのせいか殺気も薄い。だから＊も安心して背を向け、語れたのだ。
「ところで、まどかを見なかったかしら。それさえ解れば用はないわ」
「見なかったが、どうも魔法少女同士の同盟があるらしいな」

＊はほむらの問いに答え、コンテナから降りた。そして、指を鳴らす。
「来い、ダイオウデメマダラ」
操車場の地面から生き物が現れる。丸みを帯びた体をし、その半分近くに渡る大きな口をしている。蝸牛のように体から突き出た目がほむらを見た。背中には苔が生えて、攻撃は通じなさそうだ。紫の舌を垂らし、ほむらに向かってくる。
「ダイオウデメマダラ。チャッピー系の生物では最大、ね」
ほむらはコンテナから降りて対峙する。銃で何回か撃ったがあまり効いてないようだ。ダイオウデメマダラが近づき、舌を伸ばすのでほむらは時間すら止めず避ける。巨体ではあるが、動きは緩慢なので避ける事自体は容易だ。
「ある星で見つけた珍しい生き物だ。あの世界だと私達が小さくされていたから持ってきたら今度はこいつが小さくなっていたよ。ビッグライトでもとに戻したがね」
＊は呟きながら操車場を後にした。ほむらはパイプ爆弾を手にして言う。
「身体が固いなら、中を攻撃すればいいじゃない」
そしていくつかの爆弾をダイオウデメマダラの口にほうり込む。ダイオウデメマダラはそれを飲み込んだ。すると体内で爆発が起きたのか、ダイオウデメマダラは煙を吐き出して倒れた。
「さあ、次は貴方の……」
ほむらが振り返る頃には、＊はいなくなっていた。

学園都市　地下街

「やるじゃねぇか！」
「そっちも！」
学園都市の地下街ではルーウェンとクレアが激しい戦いを繰り広げていた。途中、放たれた小さなチャッピー達を巻き込みの激戦で

ある。
ルーウェンの武器は剣、クレアは槍である。槍に勝つには相手の三倍強くなければならないというが、この二人は互角だ。
これは実質的な負けである、とクレアは感じていた。
クレアが槍を突き出すのに従い、ルーウェンは右へ身体を反らす。槍は突き出したら戻すのに時間がかかる。その隙にルーウェンは懐まで潜り込む。クレアも早めに槍を戻し、ルーウェンの一撃を槍の柄で防ぐ。
「一文字スラッシュ！」
攻撃を弾かれたルーウェンはバックステップを踏み、一気に踏み込む。バロウズ邸で見せた技だ。
「閃光撃！」
クレアも攻撃を受けた勢いで後ろへ下がると、槍を構え踏み出す。二人の攻撃は相殺された。
「何と無くわかる気がする。君は戦いが好きだ」
「俺も正直、自分がこんなに好戦的だとは知らんかった！」
クレアとルーウェンは再び技をぶつけ合う準備をする。
「ジン、アイデア借りるぜ。スターダスト・ティア！」
ルーウェンが放ったのは飛ぶ斬撃。それはジンの流星爪に似ていた。これは威力重視のジンのものと違い、切れ味重視なのがルーウェン流のようだ。風車斬りの完成版というべきか。
「真槍真理！」
クレアは槍にエネルギーを溜めるとそれを投げた。ぶつかった二つの技は爆発を起こして打ち消された。

学園都市　病院

「お前は、バン・グローリー……！」
「覚えていたか！　早速ついて来てもらう！」
いきなり部屋にバンが入ってきたため、ジンは慌てて立ち上がっ

た。パジャマ姿では戦闘に向かない。熱が出てたから開けていた胸元も閉めた。
「いきなり入るな礼儀知らず！　あとなんで病室知ってる！」
「実は内通者に教えてもらった。誰かは言えんがな！」
ジンの質問にバンは堂々と答えた。本来なら内通者は存在自体知られてはいけないのだが、バンは言ってしまった。
バンはジンの顔を見て言う。
「お前、泣いてたのか？」
「泣いてない！　断じて泣いてない！」
バンの言葉にジンは顔を真っ赤にして首を横に全力で振った。実はさっきまで泣いてましたと敵に言うわけにはいかない。
「さて、大人しくついて来ないなら力ずくで連れていく！　俺のレベル５能力、『暴風拳撃（ストームナックル）』を受けて見ろ！」
突き上げたバンの拳に風が纏わり付く。ジンは場所が場所だけに避けるのを諦めて受け身を取る準備をした。体調は万全ではない。熱でフラフラする。正直、今こうして立っているのも辛いくらいだ。
「暴風ナックル！」
「っ……！」
バンが突き出した拳から、凄まじい風が吹く。ジンの小柄な身体はまたたくまに吹き飛ばされてしまう。窓を割り、病院の外に叩き出された。ここは１０階だ。落ちればかなりのダメージを受けるだろう。着地できればいいが、今のジンには不可能だ。
（ダメだ、身体が言うこと聞かない……）
なぜならバンの風で身体を切り裂かれ、既にかなりの深手を負っているからだ。
（落ちる……！）
とジンが思った瞬間、いきなり地面が近づいた。同時に落ちる速度も遅くなる。地面に落ちたが痛みもさほどない。
「まったく、なに柄じゃないことしてんだか」
倒れたジンに近づいたのは一人の学生だった。学生といっても服

装は異質だった。ブレザーの上着は腕を通さず羽織り、胸元はピンク色の布をサラシの様に巻いているだけ。軍用のライト付き警棒を持った姿は学生なのか何なのか不明な状態である。ジンも同じ女性として、このファッションはないだろうと自分を棚に上げて思った。

「で、どうしたの？　自殺？」

「おっと、ゆっくり下ろしてくれたのか。それはありがたい」

学生が聞くなり、バンが横から口を挟む。窓から飛び降りてきたのだろう。学生はバンに向かって言う。学生は呟いた。

「能力者ね。威力からするとレベル４……」

「いいや、システムスキャンならレベル５と出たぞ」

「あんたがやったのね」

学生はカマをかけた様だった。窓の破壊を能力と推測し、窓から飛び降りてきたバンを疑ったのだ。バンが阿呆でなければ引っ掛からなかっただろう初歩的なものだ。

「さて、なんか怪しいのよね。あんた、逃げなさい。あ、私の名前は結標淡希」

「え、でも……」

淡希と名乗った学生はコルク抜きを手にバンと対峙する。ここに能力者同士の戦いが始まった。

学園都市　地下街

「え？　病院が？」

「どうした？」

一方その頃、地下街でルーウェンは携帯を取り出して話していた。相手はヨヨ。病院がバンに襲撃されたのだ。しかしこの携帯、地下街で繋がるとは高性能である。魔界の品で魔力を飛ばして会話する。魔力なので特定の相手にしか繋がらないが、電波と違い地下などでも通話可能だ。

「くそ！　あの馬鹿生きてやがった！」

「バンか。あの馬鹿！　本来の作戦忘れよって！　能力者のスカウトが優先だろう！」
ルーウェンとクレアの二人に馬鹿呼ばわりされたバンは今頃淡希と戦ってる。クレアは珍しく焦り、ルーウェンに停戦を呼び掛ける。
「仕方ない。ここは一時手を組んで馬鹿を倒す。行くぞルーウェン！」
「わかった！　勝敗はトドメバトルに変更だ。バンを倒した方が勝ち！」
クレアとルーウェンは剣撃を交わしながら病院へ走り始めた。
「ところで本来の作戦ってなんだ？」
「君も見ただろう。あの生物を放って強い能力者を探すことだ。サイクロプス確保はタイガーフォースが動く口実だ」
「なるほど、バンが馬鹿だから口実を鵜呑みに……」
ルーウェンとクレアは走って剣撃しながら会話もしていた。ここまで来ると相手の行動を無意識に読んでるのではないかと疑ってしまう。
「俺さ、少し自信が無かったんだ。けど、今は違う。クレアみたいな強い奴と互角に張り合って、お喋りする余裕があるんだ。俺は強い！」
「それはよい。迷いは剣を鈍らせる」
ルーウェンとクレアは病院へひたすら戦いながら向かう。リアルアースでの自分を振り切るために。
ルーウェンはリアルアースの話題をクレアに振る。
「お前、リアルアースじゃどんなんなんだ？」
するとクレアは自嘲気味に呟いた。
「病弱な子供でしかない。そういう君はどうなんだ？」
ルーウェンもまた、自虐の様に言う。
「ただのオタクさ。出来の悪い兄ってイメージが皆に定着してる」
クレアはルーウェンの言葉を聞いて少し笑った。
「似た者同士だな、私達」

学園都市　病院

「な、なぜ邪魔を……」

「知らないわよ」

病院の駐車場、そこでバンは淡希に瞬殺されて倒れていた。手足にはコルク抜きが刺さっている。レベルはバンの方が上だ。しかし、能力での戦いにおいて淡希の方が鉄板何枚も上手だった。

まず淡希は以前、レベル5と戦ったことがある。超電磁砲の名に恥じない威力で圧されたが、そこから彼女は対策を学んだ。要は相手が能力を使う前に倒せばいいのだ。しかもバンは能力の内容をべラベラ喋り、長い前口上まで語っていた。攻撃し放題だったので淡希は攻撃したまでだ。

淡希の能力は『座標移動（ムーブポイント）』。いわゆる瞬間移動だ。コルク抜きなどを相手の身体に重ねるように移動させると身体に刺さるのだ。これを利用して攻撃を行う。

「そこの、サイクロプスは……、世界を破壊ぐは！」

淡希はコルク抜きをもう一本腕に刺して黙らせた。

「大変大変っ！　病院が変な生き物に襲われているよっ！」

そこにヨヨが緊張感のない声で緊迫した状況を伝えにきた。街で暴れていた生き物が病院に押し寄せたのだ。

「やばいわね……」

「お、あわきんじゃん！」

「知り合いか？」

淡希が呟いた瞬間、自分も呼ばれたことない愛称でルーウェンが彼女を呼んだ。クレアも一緒だ。

「ジンは無事か？　生物は俺らに任せて、あわきんはジンを小萌先生のところへ！　そこなら安全だ」

「え、ええ……」

淡希はなんで自分と小萌先生が知り合いであることを知ってるの

か気になった。それはルーウェンはリアルアースの住人なので学園都市の情報は小説という形である程度持っているからだが、そんなことあわきんの知るよしもない。

「……」

「間に合ったわね」

ＢＲＳとほむらも合流して戦力アップ。ルーウェンは全員に声をかけて病院へ駆ける。

「おめぇらいくぜ！　生物の死骸で目指せ一万ポコ！」

「わけがわからないわ」

ほむらもぼそりとツッコミを入れてルーウェンの後を追う。座り込んでいるジンはその背中をただ見ていることしかできなかった。

（私がタイガーフォースに追われることで皆に迷惑をかけてる。なのに……、私は！）

ジンはタイガーフォースの真意を知らない。故に、タイガーフォースが本気で自分を追い掛けているわけではないこともわからない。

ジンは自責の念を募らせていった。

学園都市　某所

「断罪のリングを継ぐ者、ルーウェン・ヴァイサス。君を私は知っている」

学園都市のとあるビルの屋上、そこで＊は独り言を言っていた。ルーウェンに関することのようだ。

「始めは初代のジンかと思ったが、メルアの面影もある。メルアから断罪のリングを受けとったのか。あの時の子供か」

＊は一枚の写真を取り出した。そこにはメルアとジン、そして素顔の＊が写っていた。言葉からすると、＊は昔リアルアースから出たルーウェンと面識があるようだ。

「君はこの世界に来たことがある。そして世界政府最強の戦士『断罪者』の称号をリングと共にメルアから託された。ふふっ、お陰

でリングを無くした政府は『聖騎士』の称号を新たに設立することを余儀なくされたよ」

＊の独白は続いた。その言葉は学園都市の空に消えいく。

「君はどうだい？　ルーウェン・ヴァイサス。世界を変えたい？　リアルアースに帰りたい？　叶えたいことがあるなら戦え」

7．主役のいない学園都市（後書き）

解説

生物

今回登場した生物は一貫してピクミンシリーズのもの。ちなみにクレアとルーウェンが戦う前に爆発したのはサクレショイグモという生物。アメボウズはトラウマとして名高い。

8．一つ目法廷

学園都市　小萌宅

「ルーウェンちゃん達は世界を旅してるのですか」

「まあ、そんなところかな」

どう見ても小学生にしか見えないミニ教師、月詠小萌の家でルーウェン達漆黒の騎士団は鍋パーティーをしていた。淡希は小萌の家で生活しているのだ。

ルーウェンは話しながらも木乃がいなくてよかったと感じていた。木乃の食欲なら一人でこれを平らげかねない。畳の部屋、その中央に置かれたちゃぶ台の上に鍋はあった。最近話題のコラーゲン鍋でもなくキムチ鍋でもなく、普通に鳥すき焼きだ。しかし、これはこれでほむらが時間停止をするんじゃないかと戦々恐々とするルーウェンだった。

ほむら、ＢＲＳは黙々と鍋を突いている。時間停止の心配はなさそうだ。

それより気掛かりなのは内通者だった。ジンが言うにルーウェン達が知らなかったジンの病室にバンが現れたのだ。タイガーフォースの作戦からして、偶然ではない。仲間で病室を知ってたのはヨヨだけだ。

「どうしたの？」

「い、いや何でも」

向かいにいるヨヨを見たら声をかけられた。ルーウェンは慌てて視線を反らす。ヨヨのわけがない。こんなほわほわした、どこか気の抜けた人物にスパイなど勤まらない。

ルーウェンは隣にいるジンを見る。何やらさっきから一言も発してないし、箸も進んでない。体調でも悪いのだろうか。

「ほら、あんたも食いな」

「う、うん」
淡希に言われてジンは箸を伸ばす。しかし野菜ばかり取っている。
「しかし、バンが能力者になったのは厄介だな。生きてればだけど」
「外の人間が能力開発を受けるとはね。ま、あれで生きてる人間がいたら驚きだけど」
「あいつはギャグ漫画の住人に違いない。殺しても死なないんだよな」
淡希は全身をコルク抜きでブサブサ貫いてやったバンを思い出した。ルーウェンが言うには、二回ほど殺したが死ななかったらしい。ルーウェンもカードを置いてきたから今度こそ死んでるといいなと話していた。
「あのカード、あのまま貯め続けたらどうなるの？」
「5枚で金の脳と交換できます」
淡希の疑問にルーウェンはジョークで返す。ほむらも乗っかってみる。BRSも何気に乗ってきた。
「……白子入れとメロンパン入れ、どっちなの？」
「裏をかいてメロン入れ」
ルーウェンは落ち着いて答える。何気なく言ったことにマジレス（と、言った人が人だけにルーウェンはそう感じた）されて戸惑ったが、なんとか返せた。
「金の脳はホルモン入……」
「ちょっと、外の空気吸ってくる」
ジンが立ち上がり部屋を出る。ジョークのオチを崩されたルーウェンはガクッとなった。それを見たほむらがフォローのつもりなのか一言呟く。
「ホルモン入れで滑るよりマシよ」
「そうかい……」
ジンは玄関から外に出て月を眺めた。さすがに冬だけあり、防寒

着がフリースだけでは肌寒い。彼女が外に出たのは空気を吸いたいからではない。あの場の雰囲気に耐えられなかったのだ。
ジンはタイガーフォース始め世界政府に追われている身だ。今回の事件もいままでのリングを狙ったタイガーフォースとの戦いと違い、ジンが学園都市にいたがために起きた。
（私がこのまま皆といれば、皆は世界政府と戦うことになる……）
ジンは思い詰めていた。現に、ルーウェンは負傷こそしてないが病院で生物と戦った際に剣が折れた。ＢＲＳが自分の剣をルーウェンに渡していなかったら、ルーウェンは危なかった。否、ルーウェンだけでなく病院そのものも、そこにいた患者も危なかった。
（このままだと、ルーウェン達が死んじゃう！　私がいるから！）
ジンはベランダの柵を叩いた。そして、一つの決意をする。
（世界政府に出頭しよう。私がいなければ、リングの奪い合い以外でタイガーフォースと戦う必要は無くなる）
携帯を取り出し、ある場所に電話する。ユニバースだ。ジンの携帯は傭兵用に世界中どこでもユニバースの本部及び支部にかけられる。本部は壊滅したが、別の世界にある出張所は無事なはず。電話をすると、ソルジャー管理局の男性が出た。世界中に散らばる傭兵達を管理する部所だ。
『こちらユニバース、ソルジャー管理局。登録番号３６７８、ジン・クレッシェンドだな？』
「……はい」
『世界政府から話しは聞いている。逆探知による現在地は学園都市。出頭するなら第十七学区の操車場に来い』
管理局は電波を逆探知して居場所を割り出した。ジンは電話を切って操車場に歩く。
「今夜は満月、か」
月を見ると見事な満月。これが見納めだろうとしっかり目に焼き付けた。

一方、ジンが帰ってこないのを心配したルーウェン達はざわめき出した。
「あれ？　帰ってこないぞ」
「外、結構寒いよ？」
ルーウェンがシメのうどんをやろうと言い出したので、ヨヨが準備してたらジンがいないことに気付いた。ルーウェンは玄関を開けて確認する。
「いない……だと？」
「探しましょう」
ほむらが立ち上がって玄関から出る。ほむらはなんだかんだ言っても世話焼きなのだ。
ルーウェンもほむらに次いで玄関から飛び出した。ルーウェンはわかりやすく動揺してる。
ＢＲＳはフライトユニットを蒸してベランダから飛んだ。空から探すつもりだろう。
「じゃあ、私はうどん作ってるね」
「みんな、帰ってきてくださいよ」
淡希が出たあたりでヨヨと小萌が言う。外には雪が降り始めていた。

第十七学区　操車場

「来たか」
大量の勲章ロングコートを付けた金髪の若い男がグミシップを伴って操車場に立っていた。グミシップはルーウェン達が使ってるものと違い、白地に金の模様と成り金趣味全開だ。
「逃げも隠れもしない。さっさと捕まえて。ルーウェン達が来るかもしれない」
「そうか。私はレイド・シャーロット。世界政府軍最強の戦士、『聖騎士』の称号を持つ男だ。サイクロプスの反乱前なら、『断罪

者』と呼ばれた立場の人間だ」
　レイドと名乗った男は、ハッキリいえばルーウェンの２Ｐカラーにしか見えなかった。いや、単にロングコートかつ背中に剣を背負ってるという特徴からジンが勝手にルーウェンを連想したかもしれない。
「今すぐ連れていけ。あんたしか来てないなら、ルーウェン達の方が戦力が上だ。連れ戻されるかもしれない」
「心配はいらないよお嬢さん。これでも私は最強の戦士。すぐ返り討ちにするさ。だが、戦闘になると厄介そうだから、お望み通り連れていこう」
　ジンは今すぐ学園都市を離れたかった。この場にルーウェン達全戦力が集まれば世界政府最強の戦士でも勝てるとは限らない。なにせ、中には時間を操る魔法少女と瞬間移動の能力者もいる。
「さあ行こう。世界政府の司法権、ジャッジメントランドへ」
　レイドはジンをエスコートするとグミシップへ乗せた。内装まで豪華で、成り金趣味全開だった。シャンデリアの様なライトに皮張りのシート。いくらしたのか不明だ。
　グミシップは高度を上げ始めた。レイドはジンに携帯を差し出す。
「さ、仲間達に別れを言うんだ。その様子だと、挨拶も出来てないようだからね。番号なら必要ない。魔力を辿って繋げた。これも魔界の携帯だ」

学園都市　某所

「ジン？　ジンなのか？」
　ルーウェンはマンションの上で携帯をとった。屋根を飛び移って探していたのだ。未登録の携帯からかかってきたから驚いたが、相手がジンだとわかるとホッとした様子だ。
『う、うん……』
「どこにいるんだ？　早くしないとうどん伸びるぞ」

『ゴメン、帰れないんだ……』
「へ？」
ルーウェンには電話の向こうの声が震えているように聞こえた。寒いからだろう。出てった時の格好を見ればわかる。
「どゆこと？　迷子？」
『そうじゃないの。私はみんなといられない』
「わけわかめ」
ジンの言葉に困惑するルーウェン。いきなりこんな電話されれば誰でもわけがわからなくなるのも当然だ。
『みんなといると、タイガーフォースが来る。タイガーフォースの狙いは私。安心して。タイガーフォースはもう今回みたいにリングに関係ないことで追ってこない』
「おいおい、タイガーフォースなんか俺が蹴散らしてやるさ。ほむら達もいるし」
『でも……今回はルーウェンも危なかったし、私はみんなを危険に晒したくない！』
「武器折れたくらいじゃ俺は死なん！　現に俺は生きてる。いいから帰ってこい！」
『ルーウェンだけじゃない。病院も襲われた。だから、やっぱり無理だよ……。みんなの迷惑になる』
「ジン……」
『さようなら』
電話は切れた。マンションの屋上にはルーウェンが一人残された。

グミシップ内部

「別れはすんだようだな。ではこれから君の罪状を確認する」
レイドがグミシップを運転しながら言った。ジンは黙って窓から外を眺めていた。
「君の体の何処かに刻まれているであろう、『サイクロプスの目』

とは、反政府組織サイクロプスのメンバーである証明」
「それで？」
「君がその目で差別を受けたのはそういう理由だ。そして今から話すことは極秘事項だ、メアリー・ブロード」
「……！　どうしてその名前を？」
ジンはかつての名前で呼ばれたため驚いた。ジンとしてはあまり人に話したことのない過去だ。初代ジンとの思い出は、ほとんど誰にも話したことがない。
「とぼけてもらっては困る。君はサイクロプスのリーダー、メアリー・ブロードなのだから！」
「え？　名前はその人から取ったって、ジンは言ってた……。その人が、私？」
ジンは軽く混乱した。自分の名前の元になった人物が、まさか自分自身だとは思わないだろう。
「でも、昔写真で見たメアリーは今の私より年上だった。それがなんで……」
「おかげで君を探すのが遅れたよ。転生の術だ」
「そんな……」
転生の術。記憶と引き換えに年齢を遡る魔術だ。ジンも名前くらいは聞いたことがある。
「つまり、私がサイクロプスのリーダー、メアリー・ブロードが転生した姿。くっ、伏線くらい張っておいてくれてもいいじゃないか」
「そうだな。メタ発言はやめような。せっかくのシリアス展開が台なしだ」
レイドはメタ発言をしたジンをたしなめた。そのくらい、彼女にとって衝撃的な事実だったのだ。
「なるほど、それなら気が付いたらブカブカな服を着て荒野にいたのも納得がいく」
ジンは自分の記憶と照らし合わせて納得することにした。転生な

ど、世界広しといえど例が少ない。
「流血のリングは仲間を多く失った戦士に与えられる慰めの品。それはメアリーのものだ。それをジン、君を拾った者が受け継ぎ、君に渡した」
「リングにそんな意味が……？」
ジンは服越しに、今も首からかけているリングを握った。一体、昔の自分に何があったのだろう。悲しいことがあったのは事実だ。ジンはメアリーを案じた。

学園都市　小萌宅

「そういうことだ」
ルーウェンは電話で聞いたことを仲間達に話した。ジンは自分がいると漆黒の騎士団が危険に晒されると考えているらしい。
「で、貴方はどうしたいの？」
「助けにいくさ」
「武器もないのに？」
「……調達しよう」
ほむらに聞かれた通り、ルーウェンには武器がない。しかし連れていかれた場所なら見当がつく。世界政府が罪人を裁くならジャッジメントランドの可能性が高い。
「理事長からお届け物ですよー」
小萌が武器のないルーウェンに大きな箱を持ってきてくれた。ちゃぶ台を占領するくらいのサイズがある。ルーウェンが開けると刀の様なものが出てきた。デザインからして完全に刀だ。
「えー、何々。『都市での騒ぎを止めてくれて感謝する。お礼と言ってはなんだが、学園都市の技術で作られた刀を贈る。実戦使用は始めてだから下手をすれば折れるかもしれないが、君なら使いこなせるはずだ。アイレスター・クロウリー』だとさ」
「つまり、刀ね」

ほむらの言う通りに刀である。何処に科学技術があるのか不明だ。恐らく使う鉄や鍛え方に科学技術が用いられているはずだ。
「確かに剣士だが、刀は始めてだ。剣と同じなのか？」
ルーウェンは刀を腰に差した。そして、部屋を出ながら宣言する。
「ジンをちょっと連れ戻しに行ってくる。まだシメのうどん食ってないし」
「そう。なら、さっさと行きなさい」
ほむらは軽くあしらったが、それがほむらなりの返答だと感じ、ルーウェンは歩き出した。

9．断罪者対聖騎士

ジャッジメントランド　最高裁判所前

「ここが最高裁判所か……。ジン奪還作戦、開始だ！」

お堀で囲まれた、城の様に厳重な最高裁判所。ジンが捕われてから一週間、その前にルーウェンはいた。このくらいならジャンプで飛び越せそうだが、問題は壁を破れるかだ。この壁、かなり硬そうである。なら橋を渡って扉から入ろうと思うと、見張りがいて突破は難しそうだ。ルーウェンは最高裁判所の裏で突破の方法を探していた。

「さて、どうすっかね……」

ルーウェンがあたりをキョロキョロ見渡して打開策を練る。走るとすぐに入口の橋に行けた。町が狭いわけではない。ルーウェンの足が速いのだ。町のど真ん中にある最高裁判所だけに、下手な騒ぎは起こせない。町全体が迷路の様な作りなのも、罪人を逃がしたり奪還されたりを防ぐために違いない。裁判所周りを一周するだけでもかなり曲がりくねった道を進んだり地下を通ったりしなければいけなかった。

入管も厳しく、ルーウェンは学園都市からグミシップでトワイライトタウンへ戻り、駅から公共交通機関のグミシップに乗りジャッジメントランドまできた。

漆黒の騎士団メンバーは動かせなかった、いや、ディズ動かさなかったのだ。もし全戦力を投入してトワイライトタウンをすっからかんにした隙をタイガーフォースに狙われたら一大事だからだ。だが、トラヴァースタウンにいる『ある人物』が無謀にも手を貸してくれた。

「こねぇなあいつら。協力は無しか……。てか、協力者も来ない」

だが、賭けに近いが無策ではなかった。ある組織にジンが捕まっ

たことを話したのだ。ジンが捕まると都合の悪い組織だ。その組織とは敵対関係にあるため、あまり打ち合わせはしていない。ただ、一週間後の午後3時に最高裁判所前に集合という待ち合わせだけだ。

遠くから雄叫びが聞こえた。なにやら大軍勢が押し寄せてるようだ。足音が地面を揺らした。

「なんだ？　あいつら、こんな大群で来たのか？」

あまりのことにルーウェンは肝を冷やした。隠密行動のつもりがとんだ殲滅戦になってしまったのだから。

やって来たのは首のない上半身裸の男達。どうやって叫んでるのか、雄叫びは彼らのものだ。しかも手には爆弾。かなりヤバい。

「な、なんだぁ？」

ルーウェンはとっさに飛びのいた。男達は橋を渡り、閉まっている扉に激突した。そして爆発。

「な……なんじゃあれ？」

「首無しカミカゼ、とある世界にいるモンスターだ」

驚くルーウェンの横に＊が現れた。組織とはタイガーフォースのことだった。以前クレアからジンの捕獲はタイガーフォースが自由に動くための口実だと聞いていた。学園都市でジンが連れてかれた後、ルーウェンはディズに電話の魔力の逆探知を頼み、操車場にジンがいたことを知った。たどり着いた操車場には＊もいた。＊が言うには罪人の身柄はしばらくジャッジメントランドの最高裁判所に留置される。

そこでジンが捕まると都合の悪い者同士で協力することにした。タイガーフォースは表立って動けないので、侵入に手を貸すだけだが。

「やっときたか……」

遠くからバイクの音が聞こえる。無謀な協力者のお出ましだ。

白いバイクに跨がっているのは短い学ランの高校生だった。フルフェイスのヘルメットをとると髪型がリーゼントであることがわかり、昭和の不良みたいな感じだ。

「では、私はこれで」
＊は協力者の到着を見届けると去って行った。協力者らしき男子高校生は唖然とするルーウェンに言った。
「俺は如月弦太朗。世界の全員と友達になる男だ！　よろしくな！」
「あ、ああ……」
「お前ダチを助けに行くのか？　俺にも手伝わせろ」
如月と名乗った高校生はおもむろにある機械を取り出す。真ん中にモニターがあり、左右に二つずつ赤いレバーとスイッチがある。スイッチのデザインは全て違う。右には大きなレバーがある。一体なんの機械だろうかと怪しむルーウェンを尻目に、如月はそれを腰に当てる。
「変身ベルト？」
その機械から瞬時にベルトのようなバンドが飛び出し、如月の腰に巻き付く。そう、これは変身ベルトだった。
そうこうしてるうちに衛兵らしき集団が現れた。なにやらおぼつかない様子で、だんだん本当に衛兵か怪しくなってきた。
「まずはお手並み拝見、か」
「任せとけ！」
バイクから降りた如月がベルトの赤いレバーを一つずつ入れる。何か溜める様な音がして、カウントダウンが始まる。
『3、2、1』
「変身！」
如月が大きなレバーを引く。すると如月は光に包まれ、あっという間に姿を変えた。白い宇宙服をモチーフにしたスーツみたいだ。
「宇宙、キター！」
「なんじゃそりゃ！」
「仮面ライダーフォーゼ、タイマン張らせてもらうぜ！」
如月改めフォーゼはグダクダになりながら集まる衛兵に宣言する。グダクダながら数が多い。フォーゼはベルトから右側モニターに近

い方の青いスイッチを引き抜く。代わりに紫のスイッチを装填した。
『スモーク』
ベルトから滑舌のいい英語が聞こえる。そして今度は、右側モニターに遠い方のスイッチを押す。オレンジのボタン式スイッチだ。
『ロケット・オン』
奇妙な発音の英語と共にフォーゼの右腕がオレンジ色のロケットに変わる。
「こんな数相手にしてらんねぇな。時間ないんだろ？　突破する！」
「え？」
フォーゼは先ほど装填したスイッチを押した。
『スモーク・オン』
奇妙な英語が響き、フォーゼの右足に発煙装置が現れる。煙が衛兵達の視界を妨げた。
「行くぜ！」
「ちょ、おま……」
フォーゼはルーウェンを掴むとそのままロケットで空を飛んだ。無駄な戦いは避けて目的を達成するつもりらしい。
ルーウェンとフォーゼは最高裁判所へ飛び立った。

最高裁判所　客室

「なんだ？　地震か？」
裁判所の豪華な客室。その中央、あのネメシス二人は寝れるだろう広いベッドに眠っていたジンは地震で目が覚め、身体を起こした。そして着ていたドレスの様な寝間着を脱ぎ捨ててバスルームへ向かった。
バスルームも落ち着けないほど豪華だ。ひんやりした大理石のタイルに足を置くと、この待遇がどれだけ自分の身の丈に合わないか実感できた。

ジンは一応、世界政府最強の戦士メアリーと同一人物らしい。彼女はそれゆえ、罪人なのに待遇がこんなに立派なのかと思ったりした。記憶にない努力でおいしい思いができるほど世界は甘くないとかも感じていた。

様々な色の花が浮かぶ広い湯舟に浸かっていると、そんな意味もないことをついつい考えてしまう。

（そういえば変な薬を与えられていたな。飲むように言われたから一週間飲んでみたが、変な夢を見るくらいしか効果がない。毒薬かと思ったけど、そうでもないし、なんだろ？）

ジンは薬の影響で見た夢について思い出す。物凄い断片的で、起きた後殆ど記憶に無いので少し苦労しながらだ。

『やっぱりこの子、ジンに似てるな』

これは女性の声。自分の今の声を少し低くした様に聞こえる。この女性が言うジンは誰を指すのだろうか。自分か、それとも初代のジンか。

夢の視界はこの女性のものだ。そして、『この子』とは目の前にいる銀髪の幼い少年だ。

『いや、目つきは君にそっくりだよメアリー』

「ジン！」

思い出した声でハッキリとした。これはジンとメアリーの会話。つまり、転生により失われた昔の自分の記憶。

『そうか？　ルーウェンはお前の生き写しの様に思えるが……』

「ルーウェン？　なんで？」

メアリーは目の前の少年をルーウェンと呼んだ。確か、ルーウェンは断罪のリングを持っていた。そして断罪のリングは世界政府最強の戦士の証。恐らく、ルーウェンはメアリー、つまりジンから指輪を受けとっている。なんらかの方法でリアルアースを抜け出して。

そして、出会った頃からルーウェンは初代ジンに似てると思ってた。『ジンとルーウェンが似てる』という会話の内容からして、この幼いルーウェンは漆黒の騎士団のルーウェンと同一人物だろう。

『君にこれを託したい』
記憶を探ると、確かにルーウェンにリングを渡すシーンがあった。これはメアリーとジンの会話より後の記憶みたいだ。
ルーウェンがトワイライトタウンで初めて会った時に見せてくれた物と同じ断罪のリングだ。
「今から死ぬんだ。考えても無駄か……」
メアリーがサイクロプスを率いて反乱した件の裁判は既に終了していた。判決は死刑。ジンもしばらくここに留置されたら処刑場で殺されるのだ。
ジンは湯舟から上がる。脱衣所でバスタオルを手にして身体を拭く。肌触りはいいが、いかんせん吸水性が悪く水滴がいくらか身体に残っている。そのまま服を着る気にはなれず、ジンはバスタオルを身体に巻くだけで済ませた。
ベッドに倒れ込んでもう一眠りといったところで、ジンの足がいきなりもつれた。
「っ……！　のぼ、せた？」
いきなり身体に力が入らなくなる。暑いわけじゃないからのぼせたわけではない様だが、身体全体が張る様な感覚があった。それはすぐに痛みへ変わった。
「うっ……、ぐ、あ！」
ジンはしばらくベッドの上で身体を抱いて痛みに耐えるしかなかった。

最高裁判所　ロビー

『スパイク・オン』
左側モニターに近い方の黄色いスイッチを緑色のスパイクスイッチに入れ替えると、フォーゼは早速スイッチを入れた。左足にトゲトゲが付く。
「おりゃ！　ライダートゲトゲキックだ！」

トゲトゲは蹴りが当たると伸びるようで、殺さないまでも的確なダメージを衛兵に与えていた。
「なんだ？　殺さないのか？」
「殺したらダチになれないだろっと！」
ルーウェンは一方で、学園都市製の刀を使い衛兵を殺していた。そのため、殺されたくない衛兵達がフォーゼに集まっていた。ルーウェンとフォーゼはおよそ半々の数で衛兵を倒していた。最高裁判所に常駐する衛兵は１００人。その命運は、どちらに斬りかかったかで決まった。
「終わりだな。まったく、相手が殺す気で来てんだから、殺す気でいかないと死ぬぞ？」
言い終えたルーウェンが法廷へ向かう道を向いた。フォーゼはベルトの左側モニターに遠い方の黒いスイッチを抜いて別のスイッチに入れ替える。
『メディカル。メディカル・オン』
流暢な英語の次に個性的な英語の電子音。フォーゼのスイッチチェンジの謎音声にもそこそこ慣れてきたルーウェンだった。
「よし、これで足りるな。なんだ、殺すとか言いながらちゃんとギリギリ生きてんじゃん。お前やっぱいい奴だな！」
「得物が慣れてないやつだったのと、こいつらが情けないあまり殺す気が失せただけだ。こんなんじゃ俺もまだまだだな」
フォーゼはメディカルスイッチで左腕に現れた薄い黄色のコンテナから薬を取り出し、斬られた衛兵を治療した。
「ほう、君が殺す気を無くすとは。やはり衛兵はサイクロプスの反乱当時と比べると情けなくなったな。いや参った、まさかタイガーフォースが君ら討伐の任を負おうとは」
そんな様子を眺めていたらしき＊が歩いてきた。どうも帰った後、タイガーフォースがルーウェン討伐の仕事を与えられたようだ。
「クレア君が来たがってはいたが、置いてきて正解だ。今回は間に合わなかったことにしよう。ここには薫風のリングがあるから、

それでチャラにして欲しい」
「そりゃ助かる。俺もクレア相手だと本来の目的を忘れそうだ」
ルーウェンはフォーゼと法廷への道を行く。＊はその姿を見送って呟いた。
「任せたよルーウェン君。こんな無謀な真似は君しかできない。どうやら私は、私なりの方法という言い訳で世界政府との対決から逃げていたようだな」

最高裁判所　客室

「っ……。なんだ、一体？　これはなんだったんだ？」
痛みが引いたジンは身体の異変に気づいた。痛みで転げ回ったため、バスタオルははだけてしまっている。その身体を眺めて気づいた。
背中一面にサラサラとした髪が当たる感触がある。手足が前よりスラリとしている。というか色々変わっていて別人の身体になっている。
慌てたジンは急いで脱衣所に向かい適当な服を着る。ドレッサーにある「こんな大きいサイズ必要ねーよ」と思っていたドレス群からすぐに着れそうな服を選んだ。その結果がチャイナドレスだとしても誰も何も言わないだろう。
青いチャイナドレスに身を包んだジンは脱衣所の鏡をみる。いつもの顔は少し大人びて写った。髪は腰の下まで伸びて、茶色が少し濃くなった。
「私の知ってる私じゃない！　なんかこれじゃない！」
ノースリーブのチャイナドレスから伸びる腕はか細く戦いなど出来そうにないほどだが、触れて見れば柔肌の下にしっかり鍛え込まれた筋肉がある。スリットから覗く足も光を反射して色っぽいが、ジンはなんだかいつもより跳躍距離が伸びそうだと思った。
「しかし、胸は殆ど変化なしか？」

一番ガッカリしたのは胸だったりする。少しは成長してるが、本人が満足する域ではない。まだまだ平均以下だ。
そんなに大きくても邪魔だと自分で自分を納得させたジンは急いでレイドの元へ走った。いつもより速い足に戸惑ったが、異変があれば知らせるように言われていた。変にジンは律儀だ。
「レイドレイドレイドレイドレイドレイ奴隷の金髪豚野郎！　なんだこれば！」
「今、噛んぶばっ！」
ジンは隣の部屋で待機していたレイドの鳩尾に成長した長く色っぽい足で蹴りを見舞う。世界政府最強の戦士は壁の向こうまで転がった。噛んだことを指摘しなければこうならずに済んだ。まさに舌禍。
「や、やあ。薬が効いたんだね。多分記憶もある程度戻ってるはずだ」
しばらくのたうちまわっていたレイドがジンに言った。
「薬？」
「そうだ。我々が転生による罪人の逃走を防ぐために賢者を集めて作らせた薬だ。転生解除剤。開発にはあのギード、アンセムなどなどが関わっている」
「そんなご都合主義な薬が……」
倒れたままのレイドが言うにはその薬、あらゆる賢者が集まり作り上げた物らしい。ジンはあまりにご都合主義な薬に驚いた。
「それでも出来なかったから取り寄せバックで取り寄せた！」
「ドラえもんか！　どうりでご都合主義なわけだ！」
正体はドラえもん関係の道具だった。そしてジンはある答えにたどり着く。
「てか、お前らそんな怪しいもん私に飲ませてたのか！」
「げふっ！」
レイドは裸足ではあるが杭打ち機並の力でジンに腹を踏まれた。
「準備も出来たところで、始めよう。そろそろ処刑の時間……だ

……。ガクリ」
レイドは致命傷を負いながら宣言した。

最高裁判所　処刑の間前

法廷を突き抜けてたどり着いたのは処刑の間なる部屋の前。重そうな扉がルーウェンとフォーゼの行く手を阻む。
「ここにジンがいるのか……」
「よし、俺に任せろ！」
フォーゼは左側モニターに近い方のスイッチを抜いた。代わりにガトリングの銃身を模したスイッチを装填する。
『ガトリング。ガトリング・オン。ランチャー・オン』
同時に右側画面に近い方のスイッチを入れる。右足にミサイルポッド、左足にガトリング現れた。
「これでどうだ！」
それらを一斉発射。かなりの威力だが、扉はびくともしない。
「この扉化け物か？」
「ならこれだ！」
『ファイアー。ファイアー・オン』
フォーゼはロケットスイッチを赤い消火器のピンの様なスイッチに変える。スイッチを入れるとフォーゼは赤く姿を変えた。
「なんだ？　変わったぞ？」
「仮面ライダーフォーゼ、ファイアーステイツだ」
フォーゼは手にした消火器型の銃、ヒーハックガンにファイアースイッチを挿す。警告音が鳴り響き、フォーゼは変身の時に使ったレバーと銃に挿したスイッチを入れる。
「ライダー爆熱シュート！」
『リミットブレイク！』
ミサイル、弾丸、火の玉の雨霰が扉に降り注いだ。さすがに扉ももたず、穴が空いた。

「よーし！　待ってろよジン！」
扉をこじ開けたルーウェンとフォーゼは処刑の間に入った。

最高裁判所　処刑の間メイク室

世界政府にはある伝統がある。処刑される女性は華やかに着飾るべし、と。
「で、なんでウエディングドレスなんだ？」
「レイド様はウエディングドレスこそが女性を最も美しくする衣装だとおっしゃりました。身内のいない女性の衣装を決めるのは断罪者及びそれと同格の聖騎士と決められていますので」
ジンは処刑の間に併設されたメイク室で着飾られていた。着付けを担当したのはドレスを運んできた行商人兼旅芸人のファントム一座の女性達だ。座って鏡に向かっていた。
「きつくありませんか？」
「ああ。こういうの始めてだから基準がわからんが」
女性達の一人、黒髪の少女がジンに聞いた。ジンにはこういう華やかな衣装を着た経験がない。メアリーだった時も同様に。最年少である若干１７歳で世界政府最強の戦士『断罪者』となったメアリー・ブロード。その人生は数奇なものだったと、再生した記憶を辿ったジンは思った。
とある世界で奴隷の子として生まれたメアリーはコロシアムで殺し合いを金持ちに見せる剣奴として富豪に買われた。命懸けの戦いを生き抜くために、彼女は独自の剣術を編み出した。そして、コロシアムで敵無しと呼ばれた頃に世界政府の軍事、フォルテ・クレッシェンドに引き取られた。フォルテがコロシアムを滅ぼして解放したのだ。
そして、将来性を見抜かれたメアリーはフォルテの元で暮らした。その時双子の初代ジン・クレッシェンドと、＊ことアスタリスク・クレッシェンドと出会った。

（あいつら兄弟だったんだ……。記憶戻って始めて知った）
ジンは奇妙なことを思った。『記憶戻って始め知った』などと口に出来る人間が世界に何人いようか。
しばらくして世界政府で兵士をやりだしたメアリー、初代ジン、＊の三人は数々の武勲を立てた。初代ジンは問題児で出世に恵まれなかったが、民衆からは人気だった。
そのうちメアリーは最年少で『断罪者』となった。しかし、それを妬む者の手で罠にかけられ、多くの部下を失った。その時、『流血のリング』を賜った。
いつからか始まっていた世界政府の腐敗に気づいたメアリーと初代ジンは＊の制止を振り切り反政府組織『サイクロプス』を立ち上げ、世界政府に反抗した。しかし、メアリーは＊に倒されサイクロプスは解散。メアリーは転生で死を免れたが記憶を失った。
その後各地を転々としたメアリーは初代ジンに拾われ、そっくりだという理由でメアリーと自身も忘れた本名で呼ばれた。
そして初代ジンの死後、二代目ジン・クレッシェンドとなったメアリーはユニバースに就職し、今に至る。
「ホント、人って不思議ね……」
ジンの呟きは鏡の中に吸い込まれていった。レイドがメイク室に恐る恐る入る。着替え中に入ったりしたらパイルドライバーもかくやという威力の蹴りを何発貰うかわからんからだ。
「準備はいいな。では人生のフィナーレを飾ろう」
レイドは着付けの終わったジンの手を取り、立ち上がらせる。ジンはこれでよかった、と自らの命を諦めていた。
これで私は、漆黒の騎士団のみんなを危険に晒すことはなくなる。みんなが生きてれば、既に死んだ自分の身などどうでもよい、と。
ジンは自らの人生に終止符を打つため、歩き出した。

え……？
処刑の間に一歩足を踏み入れたジン改めメアリーは絶句した。処

刑の間には刃の付いた大きなシャンデリアがあり、それがギロチンとして処刑される者の身体を引きちぎるのだが、
「おい見ろよ如月！　このロープ、ロープのくせに頑丈だぜ！」
「ホントだな！　気に入らねぇ、だからダチになる」
「さすが世界の全員と友達になる男！　げんちゃんカッコイイ！」
そのシャンデリアの上にルーウェンと赤いフォーゼがいたのだから。しかもシャンデリアを止めるのはロープ。ルーウェンの体重は４５ｋｇ、フォーゼの体重は９７ｋｇ前後。ギロチンシャンデリアを２００ｋｇと過程しても、ただの丈夫なロープに３４２ｋｇ程度の負荷がかかっている計算になる。
「如月、処刑装置の破壊が優先だ。よく考えりゃ夢のシャンデリアアスレチックなんかしてる場合じゃねぇ！」
「そうだなっと！」
『シザース。シザース・オン』
左腕に鋏を出したフォーゼがロープを刃で擦り始めた時には、ポカーンとしていたレイドも慌てて我に帰った。
「おいお前ら！　神聖な場所で何をぎゃああ！」
近づいた瞬間にシャンデリアが落ちてくるものだからレイドは腰を抜かした。
「お前がルーウェンのダチか？」
「いや、俺のダチはもっとちっこい奴だ」
「ちっこくて悪かったな」
シャンデリアから降りてきたルーウェンの言いようにメアリーは毒を吐いた。メアリーの姿はサイクロプス時代、なんらかの力でリアルアースを抜け出した幼いルーウェンを拾った当時のままだ。それなのにルーウェンは知らない人を見る目でメアリーを見ている。
「そうだ。あんた、あんたと同じ髪と目の色したちっこい女の子知らないか？」
「私だ」
「へ？」

ルーウェンが不覚にもジンの所在を本人に聞く。メアリーは当然即答した。ルーウェンの言うジンはメアリーなのだから。
「マジ？」
「本当だ。奴らの薬で身体を元に戻されたらしい」
驚いたルーウェンはフォーゼを呼んだ。フォーゼはシザースイッチをメディカルスイッチに代えてスイッチを入れる。
『メディカル。メディカル・オン』
「この薬で治るか？」
メアリーは差し出された試験管の様な瓶をルーウェンから受け取ると、中身を飲み干した。
「変化ないな」
「と、当然だ。異常なのは転生していた身体の方だからな。今のメアリーは正常だ」
腰を抜かしたレイドが割って入る。メアリーという名前を聞いてルーウェンは何かを思い出したようだ。ルーウェンはウエディングドレスに包まれ、顔を薄く化粧したメアリーを眺める。ベールやティアラなどの装飾もあり、まさに花嫁姿だ。
「メアリー？　この断罪のリングをくれた？　確かに似てるな……」
「似てる、じゃなくて私がメアリーなんだ。まったく、あの時は可愛かったのに、こんなに憎たらしくなりやがって」
メアリーはルーウェンの現状にぼやいていた。彼女はジンとしての記憶もメアリーとしての記憶もある。メアリーは成長したルーウェンとの接し方を探っているのだ。
「悪いが、帰ってくれないか？　私は死ぬつもりなんだ」
「いやそのりくつはおかしい」
メアリーの言葉にルーウェンはサラッと棒読みで返す。どうしてもメアリーを助けたいみたいだ。ルーウェンはメアリー＝ジンで認識したみたいだ。
「俺さ、みんなの前でお前を助けるって大見え切った手前、手ぶ

らじゃ帰れん」
「それこそ納得できん理屈だ！　私はみんなを危険にさらさないように……」
「危険ってなんだ？」
ルーウェンはメアリーの言葉に微動だにせず答える。メアリーはなんとか言葉を続ける。
「それはっ……、世界政府の軍隊がやって来て……」
「今までお前を追ってたのはタイガーフォースだけだ。そのタイガーフォースもお前を捕らえようってのはリング獲得を目的に世界を自由に調査するための口実に過ぎないって言ってた」
「でも、病院の時は本当に危なかった……」
「あれは馬鹿が馬鹿した結果の事故だ。何度もあの馬鹿が同じ馬鹿やったらそれこそ愚かという言葉の立場がねぇや」
「ここで私を連れ帰れば、世界政府の軍隊が追ってくるぞ！」
「軍隊ならボコした。最大戦力のタイガーフォースが捕まえる気ないなら、もう安心だ」
メアリーが危険を伝えてなんとか帰らせようとするも、ルーウェンは全て論破した。ルーウェンはメアリーを見据えて言う。
「それともお前、俺らのこと嫌いか？」
「そんなこと……。嫌いじゃない」
メアリーが俯き加減に言う。それを聞いたルーウェンは笑って右手を差し出す。
「なら、来いよ。なんかあっても、俺ら全員で守る」
メアリーは白いレースの長手袋で包まれた両手でルーウェンの手を掴む。
「なら、約束して。私のことは守らなくてもいいから、私より先に死なないで」
「約束する」
ルーウェンが応えると、空気をぶち壊してレイドが割り込む。処刑の予定を完全に狂わされて怒り浸透らしい。

「貴様ら……！　よくもこのレイド・シャーロットの顔に泥を塗ってくれたな！　本来なら断罪者という栄誉ある称号はシャーロット家の様な名門にこそある。それを、ポッと出の職業軍人の養子とリアルアース民に！　渡すものか！」

レイドは背負った鞘から剣を抜く。メアリーはドレスのロングスカートを裂いて右側から足が出せる様にすると、ティアラとベールを脱ぎ捨て、ルーウェンに破いたドレスの切れ端を渡す。

「髪くくってくれ。私は髪など縛ったことがない」

「わかった」

ルーウェンは切れ端をリボン代わりに長い茶髪をポニーテールにした。髪で隠れていたが、開いた白い背中が惜しげもなく晒される。

「私がやる。守る必要なんてないって安心させなきゃな」

ルーウェンから刀を受けとったメアリーはレイドに走り寄り、ヒールで蹴り上げた。ハイヒールなので先ほど蹴られた時よりダメージは大きい。レイドは高く打ち上げられた。恐るべき脚力だ。

「ぐはっ……！」

「実力の伴わない称号、か」

メアリーは勢いを残して近くの壁を蹴り、高く浮いたレイドまで飛ぶ。何回か蹴った感触から想定するに、レイドは一般の衛兵より鍛えられてない。コネと家柄で得た地位だった。

「月狂、」

メアリーはレイドをすれ違いざまに切り付けると、反対側の壁にたどり着いた。その壁も蹴り、メアリーはボールの様に壁と壁の間を跳ねる。レイドをすれ違いざまに斬りながら。

「流星群！」

室内殲滅技の月狂流星群がレイドを切り刻んだ。ルーウェンの近くに着地したメアリーは刀をルーウェンに投げる。

「ルーウェン、成長を見せてみろ！」

「おっけ！」

ルーウェンは刀をキャッチすると落ちるレイドに走った。そして、

刀を振り回した。
「ブライドローズ！」
刀を振り回して生まれた斬撃が荊を作る。何本もの荊がレイドを飲み込んだ。
「馬鹿……な！」
「これが俺の成長だ」
奇麗に咲き誇る血の薔薇。それはルーウェンが自身の成長によって咲かせた花だった。レイドの血肉は薔薇に吸われ、破片も残っていない。
「さて、帰ろうぜ。腹減った。晩飯の時間だ」
ルーウェンは刀を鞘に収めると処刑の間を後にした。フォーゼは赤いレバーを戻して変身を解く。
「やったな！　友達、取り返せたじゃん！」
メアリーはそのあとを追い掛けた。彼女は久しぶりに仲間の暖かさを感じたくなった。

番外　クリスマスとメアリー（前書き）

「今俺がリアルアースに行けばリア充を殲滅できるのに……」―ルーウェン・ヴァイサス、クリスマスについて語る―

番外　クリスマスとメアリー

本編とは関係ない時間軸　トワイライトタウンのホール

「メリークリスマス！」

「まだ本編は１１月だぞ」

クラッカーを鳴らしたルーウェンにメアリーが冷静に突っ込む。ここは本編とは関係ない時間軸であることを事前に承知されたし。ここは市民会館の様な場所。ここで漆黒の騎士団主催のクリスマスパーティーが催されていた。机が所々並び、ビュッフェ形式の宴会となっている。

「まあまあ、細かいこと言うなって。如月も仲間になったことだし」

如月弦太朗は最高裁判所の戦いの後、漆黒の騎士団に加入した。男メンバーが希少だったが、大体男女比が同じになった。その如月はステージの上で『今日からみんなダチだ！』などとマイクで言っている。

「どうしたもんかね……」

メアリーは呟いた。ヨヨに言いくるめられ、サンタのコスプレなどをしてるが気分は浮かれてない。問題はルーウェンとの接し方だ。

ルーウェンはジンだった時と同じ対応をしてるようだ。彼の記憶が曖昧だったのが幸いした。しかしメアリーは、幼いルーウェンとの記憶、同僚としてのルーウェンの記憶両方がある。ルーウェンみたいに今まで通り接したいが、今となってはなんであんな仲間を遠ざけていたのかわからない。

「どうしたの？　食欲ないね」

「シオン！　最近出番ないから忘れられていたぞ！」

後ろから現れたのはシオンだ。見る人によって姿の変わる彼女は正直、逆に影が薄くなりがちだ。ディズの調査によるとルーウェン

初めリアルアースの住人は総じて黒髪の女の子に見えるそうだ。メアリーにも同じように見える。どうやら見た目には『ソラとの心の繋がり』が関わるらしい。
「いや、特に。ルーウェンとどう接すればいいか、わからなくて」
「いつも通りでいいんじゃないかな？」
「それが難しくて……」
ジンが言いかけた時、ホールの扉が開かれた。開けたのは、
「逃げたそうだな、ジン・クレッシェンド！」
バン・グローリーだった。まさかタイガーフォースの総意を無視してメアリーを捕らえに来ようとは、漆黒の騎士団全員が驚いた。
そしてメアリー、如月の二人はルーウェンが最高裁判所で言ったことを思い出す。
『あれは馬鹿が馬鹿した結果の事故だ。何度もあの馬鹿が同じ馬鹿やったらそれこそ愚かという言葉の立場がねぇや』
「「愚かという言葉の立場がねぇー！」」
ホールの全員が一斉に叫んだ。その後、バンは出番のない腹いせとばかりにシオンとアクセスによってボコボコにされた。

タイガーフォース本部

「クリスマスか。ジンはツリーに短冊やらなにやらぶら下げて、メアリーを混乱させてたっけ」
＊こと、アスタリスク・クレッシェンドはクレアが飾ったツリーを見ながら言った。奇麗に飾りつけられている。
アスタリスクは兄と認めたくない男のことを思い出していた。
「ジン・クレッシェンド。その名をメアリーが名乗ろうとは驚きだ。世界政府の司法権が墜ち、政府は変革を迫られるだろう」
クリスマスにこんなことを呟く彼女のいないアスタリスクだった。

番外　クリスマスとメアリー（後書き）

おまけ

バン・グローリー戦績　（括弧内は決め手）

1．とある山里　ＶＳルーウェン　●（騙し討ち）

2．桜ヶ丘高校　ＶＳルーウェン　●（竜巻破裏剣）

3．学園都市　ＶＳジン　●（倫理的に負け）戦いには勝ったが、ジンが負傷＆寝込みを襲撃したため倫理的な敗北。

4．学園都市　ＶＳ淡希　●（コルク抜き）

5．トワイライトタウン　ＶＳシオン　●（ラグナロク）

結果：５戦０勝全敗

バンのコメント『リアルアースではこんなに負けたことないのに……』

番外　こんな大晦日絶対おかしいよ（前書き）

『どこかの世界にいるみんなも幸せに過ごせていたら、それはとってもうれしいなって』

「鹿目まどか。大掃除の時に呟く」

番外　こんな大晦日絶対おかしいよ

博麗神社

「これが一番大変ね……」

幻想郷にあるという博霊神社。そこの巫女、博麗霊夢は倉に墜ちた巨大な卵見たいな機械を見た。

「ＡＧＥビルダー、動くといいけど……」

「どっちの意味で？」

「どっちの意味でも」

緑髪の少年、フリット・アスノは呟いた。まさか自分の作ったＡＧＥビルダーが物理的な意味で倉を破壊しようとは。フリットとしては、せめて生成した武器で破壊してもらいたいところだ。

ＡＧＥビルダーとは、ガンダムという兵器を強化するＡＧＥシステムの出力装置だ。武器を一瞬で生成するスグレモノ。

今、この二人は大掃除をしていた。幻想郷は時差で一ヶ月時間の経過が早いのだ。それで、今トワイライトタウン標準時で１１月末だというのに、年末の準備をしていたのだ。

「これなら変身して運べるね」

二人の背後からのんびりとした声がかかる。魔法少女に変身した鹿目まどかだ。そのファンタジーな出で立ちは魔法少女の典型といえる。

まどかはＡＧＥビルダーに近寄ると持ち上げて運びだした。よく見ると手がピンク色に光っており、魔法を流用した技であることがわかる。

「運べるんだ……」

同い年の少女によって軽々と運ばれるＡＧＥビルダーを見てフリットは悲しくなった。まさか自分が何年もかけて作ったものがこんな軽々運ばれるなんて。

「今のデータ。ＡＧＥデバイスに記録しておこう」
しかしフリットはめげない。まどかの魔法をガンダム強化に応用するつもりだ。フリットはパイロットよりも技術者向きなのだ。
「たのもう！　ここには戦う度に進化出来るものがあると聞いた！」
そんなフリットにバンが声をかけた。いきなりの登場に霊夢とまどかは驚いた。
「頼む！　来年こそ勝ちたい奴がいるんだ！」
「ＡＧＥシステムは人間には使えませんよ。それに、これは自己満足を達成するための道具じゃありませんから」
フリットは必死に頼み込むバンを冷たくあしらう。自分が作った物への愛着やこだわりは、さすが有名なモビルスーツ鍛冶であるアスノ家の男だけある。
「そこをなんとか！　奴は三度の飯より大量殺戮が大好きな快楽殺人鬼なんだ！　止めなければみんなが除夜の鐘を安心してつけない！」
「まるでＵＥみたいな奴ですね……。わかりました！　力を貸しましょう！」
フリットは倒したい奴の実態を聞いて力を貸す気になった。ＵＥとはアンノウンエネミーの略称で、どこからともなくやって来て破壊と殺戮を振り撒く異星人のことだ。フリットはＵＥを倒すためにＡＧＥシステムとガンダムを作りあげた。
そのためか、殺戮を振り撒くものを許さない。バンの言葉を聞いてＡＧＥシステムを使う決意をしたフリットは、ＡＧＥビルダーまで向かうと、デバイスからデータを取り出した。
「ＡＧＥシステムによって、さっきのまどかの魔法を応用した武器を作ります！」
ＡＧＥシステムはガンダムの戦闘データを基に武器を作り出すシステム。つまり、進化するガンダムの根幹を成すシステムだ。
卵型の装置が割れて、煙を吐き出す。卵の先端から武器が出てき

た。肩から腕のパーツと脚みたいなパーツ。とても武器には見えない。
「これって、タイタスウェア？　まどかに併せて作られてる……。あ、まどかのデータ使ったからか！　失敗か……」
「いいじゃん。せっかくだし、まどかに付けてみたら？」
データの入れ間違いという最悪のミスを犯したフリットだが、霊夢に言われてまどかに付けることにした。
「これが、進化した魔法少女だ！」
「こんなのってないよ……」
嫌がるまどかに無理矢理装着したはいいが、機能するだろうか。変身した姿に重量系モビルスーツの手足とは、いささかバランスが悪い。
「似合ってるよ」
「エヘヘ、そうかな？」
霊夢に褒められ、照れるまどか。どうも乗せられやすいタイプらしい。
「それで戦ってください。戦闘データを取ります」
「よし、行くぞ！」
フリットの指示通り、バンは戦闘体制に入る。女の子だし手加減しよう、そう思った矢先、
「ビームラリアット！」
「ぐぎゃあ！」
腕からピンク色のビームを発したまどかがラリアットをかました。その後、数回に渡り戦闘テストが行われたがバンは全て完敗。データなど取れず、フリットは結局タイタスウェアの機能をナックルにした物を渡すだけに留まった。
全て瞬殺の戦闘データを見てフリットはニンマリしていた。技術者としては満足な結果だった。
「まどかは弓主体の戦闘をしていたけど、魔法の強さをロスなく攻撃力に変化するために開発されたのがこのタイタスウェア。名付

けて、まどかタイタス！」
「やっぱりこんなのおかしいよ……」
熱弁を奮うフリットをよそに、まどかタイタスは呟いた。いくら強くてもこれはいやだ。

番外　こんな大晦日絶対おかしいよ（後書き）

さーて、お立会い！　フロントワールドもクライマックス！
バンはフリットの武器でルーウェンを倒せるのか！　正月番外に続く！

番外　新年のご挨拶（前書き）

「一年の計は元旦にありと言うけど、未来のことなんかわからないよな」

『ルーウェン・ヴァイサス、元旦について語る』

番外　新年のご挨拶

「新年、明けましておめでとうございます」
着物姿のメアリーが畳の部屋で座布団に座り、ペコリとお辞儀する。濃い青の着物がメアリーによく似合う。
「さ、みんなも新年の挨拶。それから抱負」
「明けましておめでとうございます。暁美ほむらです。今年こそまどかを運命から救います」
メアリーの隣に正座したほむらが挨拶する。黒の着物では喪中みたいだが、彼女は基本まどかが救われなければ気が晴れないだろう。なにより黒似合うので問題ない。
「明けましておめでとう！　今年は色んな世界のもの食べ歩きたい！」
「木乃は毎年そんな感じむぎゅ」
ほむらの隣、緑の着物の木乃はエルメスのストラップを押し潰した。
「私は、アニメ頑張る」
いきなりのメタ発言はブラックロックシューター。髪を下ろした姿は珍しい。
「あたしはもっと目立つ！　キングダムハーツ３Ｄでの復活を！」
空色の着物はシオン。残念ながら今年は他のメンバーに出番を持ってかれた。
「あたしはただ一つ、守りたいものを守り通すだけさ。自分の為に」
赤い着物は杏子。こんな時でもポッキーはくわえている。
「よーし！　ルーウェン・ヴァイサスを出せ！」
そして襖を全開に開け放ち、突撃した馬鹿と書いてバン・グローリーと読ます奴。手には赤いグローブ状の武器がはめられている。
「さ、次いこ。漆黒の騎士団主催の新年会」

「待て！　ルーウェンはどこだ！」
無視して次へ行こうとするメアリーをバンは止めた。せっかくフリットを説得して武器をもらったのだから、戦わないわけにはいかない。
「ルーウェン？　ああ、あいつか……」
メアリーが急にしんみりし始めた。つられて杏子もしんみり。
「馬鹿だけどいい奴だったよな。馬鹿だけど……」
「馬鹿はあなた譲りよ、佐倉さん」
ほむらが酷いことを言うも会場の空気は変わらない。
「なんだ？　何があった？」
「あたしの口からはとても……」
「何が？」
バンに聞かれたシオンは口を閉ざした。暗くなる雰囲気を木乃がまとめる。
「はいはい。ルーウェンだってお通夜みたいな雰囲気は嫌いだったでしょ？　向こうでルーウェンが安心できないよこれじゃ」
「それは木乃がご馳走食べたいだけむぎゅ！」
やはりエルメスは木乃に握り潰される運命。バンはその場に取り残された。
「一体なにがルーウェンに？」
バンはさすがに心配になる。会場を見渡すと、ルーウェンの写真があった。額縁に入れられ黒いリボンで飾られた様はまさに遺影。近くにルーウェンのコートと剣が置いてある。
「なんなんだ？」
バンが目を移すと、壁に掲げられた横断幕が見つかった。『ルーウェン・ヴァイサス追悼。漆黒の騎士団主催トワイライトタウン新年会』
「ルーウェン……死んだのか？」
写真の中のルーウェンはほうけたバンの言葉に答えない。

番外　新年のご挨拶（後書き）

ルーウェンに一体何が？　全ての答えは次回『１０．裏切り者と追走者』で！

おまけ

ルーウェン・ヴァイサス　これまでの撃破スコア

１．漆黒の騎士　しまっちゃうおじさん×１

２．８月３２日　バン・グローリー×１（バンはこの一回のみカウント）

３．ルーウェン・ヴァイサス散る　クリーパー×２５　タイガーフォース一般兵×１　タイガーフォース小隊長×１

４．砲火後ティータイム　タイガーフォース一般兵×３２

７．主役のいない学園都市　コチャッピー系生物×３６

９．断罪者対聖騎士　政府軍近衛兵×４６　レイド・シャーロット×１

合計　兵士８６人　モンスター６２体

１０．裏切り者と追走者（前書き）

世界ガイド
　とある空き家
　青鬼シリーズに登場。登場の度に間取りが変化している。お化けが出るともっぱらの噂。

１０．裏切り者と追走者

トワイライトタウン　屋敷の会議室

「まさか、ね」

「ホントにジン？」

帰ってきたジン改めメアリーを見て、ほむらと木乃は目を疑った。連れ去られた仲間が大人びて帰ってくれば、誰だって驚く。いきなり成長したせいで乱れて伸びていた髪も長さこそ変わらないが綺麗に切り揃えられ、白いワンピースがよく似合う。ノースリーブなので肩が剥き出しになり、サイクロプスの目も惜しげもなく晒される。これを隠さないあたりに、メアリーとジンの内面的な違いが垣間見える。

最高裁判所の戦いから数日。新な仲間、如月弦太朗を加えた漆黒の騎士団はある問題を抱えていた。

「やることがない……」

「アスタリスクの奴、薫風のリングを最高裁判所から持ち出したみたいだな」

ルーウェンがだらけていると、メアリーはホワイトボードにリングの獲得状況をまとめた。

「現在、私達の所有するリングは震土のリングのみ。残りはタイガーフォースが持っている」

「ディズは？」

「世界政府の再建に行ってる。世界政府は崩壊寸前だからな。政権交代が行われて、腐敗した体制が改まるそうだ」

ディズがいない中、メアリーはリーダーとして機能していた。さすがに元サイクロプスリーダーだ。

「じゃ、しばらくはやることないな」

「アスタリスクも、リング集めてるのは世界政府を倒すためだっ

たし。もうなにも仕掛けてこないだろ。ホントに私達やることないな」
ルーウェンとメアリーは揃ってだらけた。なにもすることが無いとはこのことだ。
「ルーウェン。結局リアルアースには帰れなかったな」
「もうこっちで暮らすって決めたからな。バン涙目」
ルーウェンはリアルアースに帰ろうと必死になっていたバンを嘲笑した。結局バンは、世界の崩壊という現実を受け入れ対応する能力がないのだ。
「ほむら達はどうする？　このまま漆黒の騎士団いてもすることないぞ。多分」
ルーウェンの問いにほむらが答える。
「私はまどかを探すだけ。私としては、世界が崩壊してくれた方がむしろ都合がいいわ」
木乃はそれを見て言った。
「なら私は世界の料理食べ歩き……」
「そんなの金銭面とか現実的に無理むぎゅ」
エルメスの現実的意見は木乃により黙殺された。実際はストラップを握られて力で黙らせたのだが。
漆黒の騎士団はどうも解散せずズルズル続くようだ。避難者の知り合いで、消息がわからない人がいるみたいなのでその捜索や新政府の体制確保が次の仕事になりそうだ。
「せっかく買った剣も使わずじまいだな」
「その剣、何処で手に入れたの？」
ルーウェンが背負った剣についてほむらが言及した。学園都市製の刀は無く、真新しい剣が鞘に収まっていた。
「これか？　これは感想をアイレスターに言ったら自由に使っていいって言われたからファントム一座に売った。その金でインゴット買って、リズベット武具店で折れた剣と合成してもらった。アンファングソードだとよ」

「ファントム一座？」
ほむらは聞き慣れない言葉を聞いて首を傾げる。それに関してはメアリーが答えた。
「ファントム一座ってのは行商人兼旅芸人の集団よ。世界中を旅してるんだって」
メアリーが言い終えた瞬間、窓から煙幕が投げ込まれた。
「敵襲か？」
「如月のスモークスイッチ？」
さっきまでだらけていたルーウェンとメアリーがいきなりシャキッと構えた。どうやら屋敷中に煙幕が投げ込まれたようだ。
「一回外に出よう！」
ルーウェンは窓から外に飛び出る。二階から飛び降りたことになるが、ルーウェンは何ともなく着地する。
着地した瞬間、ルーウェンの隣をバイクが通った。
「誰だ！」
「ルーウェン・ヴァイサスだな？　コイツとリングは頂いていく」
バイクに乗っていたのはヘルメットにライダースーツの怪しい男。バイクにはサイドカーがついており、そこには誰かが座っていた。
「ルーウェン！」
「ヨヨ？」
サイドカーに乗っていたのはヨヨだった。　ヨヨの右手には震土のリングがはめられている。
「待て！」
「ここにくればコイツもリングも返してやる」
ルーウェンは男からメモを投げ渡された。そこにはなにやら数字が書かれているだけだ。男はバイクで逃げた。
「させるか！　ブラッドブロッサム！」
ルーウェンはアンファングソードを抜くと、力を込めて振る。いくつかの桜の花びらを象った斬撃が飛ぶ。『風車斬り』の完成型と言いたいとこだが、風車斬りはああいう技だから仕方ない。

「消えた？」
しかし、花びらが届く前にバイクは消えた。ステルスしたわけでもなく、瞬間移動したのだ。

フロントワールド内部　コアユニット

「ここにリングをはめればフロントワールドは起動する……」
「もうフロントワールドに用はなかったんじゃないのか？　＊は」
フロントワールドのコアユニット。狭い部屋の中央に羅針盤の様なものが置いてあるだけの室内で、二人の兵士が動いていた。リアルアース出身の者だ。
「なんかな、リアルアース復活にはフロントワールド起動が必要みたいなんだよ。リアルアースはフロントワールドの封印結界だって話は聞いてるよな？」
「ああ」
「その結界修復するのにフロントワールドが必要なんだとよ。フロントワールドには世界再生能力と破壊能力がある。つまり、フロントワールドを手にすれば世界の生殺与奪も自由自在……」
「お前、詳しいな」
「タイガーフォース本部の図書室で勉強したんだ。まったく、あのルーウェンとかいうキモオタさえいなきゃ俺は有名進学校受験の勉強を順当に進められたのにな」
「あいつがリアルアース復活を遅らせたんだ。仲間も殺された。リアルアースに戻ったらあいつ殺そうぜ。正体突き止めて」
「そうだな」
二人の兵士はルーウェンの名を憎たらしいと言わんばかりの態度で呼んだ。

とある空き家

「ＡＯ０２。まさか魔界の時空ゲートの番号だったなんてな……」
「アルファベット２文字、二桁の番号は外の世界行き。記憶したか？」
「時空ゲートって書いてあったしね」
ルーウェンがメモに書かれた内容を見て呟く。『時空ゲートＡＯ０２』とだけ書かれたメモだ。メアリーの知識があったおかげで、時空ゲートの番号と知れた。魔界で発達した時空ゲートはこのようなアルファベットと数字の羅列で位置情報を特定し、そこへ一瞬で移動させるものだ。いくつかの世界から構成される大世界『魔界』ならではの技術だ。本来なら数字は三桁だが、魔界の外に繋がるゲートは二桁となっている。
アクセルとメアリーがルーウェンと一緒にいた。明らかに罠とわかる中に突入するには、最大級の戦力を保有していくのが好ましい。アクセルは漆黒の騎士団随一の強者だ。
一方のメアリーはというと、ジン時代の服はきつくて入らないのかさっきまで着ていたワンピースにジーンズをはいただけの格好だ。武器はクレセント。そこだけは二代目ジンだった頃と変わらない。
「さて、突入するか。ごめんください」
「挨拶なんかいるかよ」
ルーウェンはアクセルにぼやかれながら扉を開ける。木製の扉だ。内側から開けられない可能性を考慮して、扉は破壊した。
全員が家に入り、辺りを見渡したところでなにか物音がした。
「俺が行こう」
ルーウェンが物音の場所まで向かう。
ルーウェンは台所にたどり着いた。ダイニングと一緒になっており、ここで料理と食事をいっぺんに出来そうだ。この屋敷は広く、廊下や階段の幅もある。途中、開かない扉を見つけたが今は物音に集中することにしたルーウェンだった。
「なんだ皿か」
ルーウェンは落ちて割れた皿を見て言った。高級そうな陶器の皿

が割れている。ルーウェンは冷蔵庫から食料を拝借して戻ることにした。何となく皿の破片も戴いた。
「戻ったぞー」
冷蔵庫から作り起きのピザを戴いたルーウェンはそれを食べながらもとの入口まで戻る。それにしてもこのピザ、うますぎであるとルーウェンは思った。「料理本が置いてあったな。直江遊人ってのが誰かは知らんが、有名な料理人なのな」
料理本の著者の名前を思い出しながらピザを咀嚼したルーウェンは、今更であるが、
「あれ？　メアリーと焼け野原ひろしがいねぇ！」
二人がいないことに気付いた。焼け野原ひろしとはアクセルのことである。
「あいつらどこ行ったんだ？」
ルーウェンは何となくで真っすぐ進んだ。入口付近は玄関から入ってすぐ目の前に通路と上り階段があり、左右にも通路が分かれている。
「で、なんぞこれ？」
道中、曇り硝子の扉をルーウェンは見つけた。そして、曇り硝子の向こうに人影がいるのにルーウェンは気付いた。
「ははーん。なるほど、ここはフリーゲーム『青鬼』の世界だな！」
ルーウェンはリアルアースでこの家の情報をゲームとして持っていた。そして人影は青鬼なる者だと判断したルーウェンは思い切り扉を開く。青鬼に先制攻撃を仕掛けるべく。
「にゃあああああああ！」
「洗濯機がああああああああ！」
なにやら奇声と共に洗濯機がルーウェンに飛んできて、先制攻撃は返り討ちという結果に終わった。
「なんだルーウェンか」
「メ、メアリーだったのか……」

奇声を発し、洗濯機を投げつけたのはメアリーだった。メアリーはバスタオルを巻いただけの姿でルーウェンに近寄った。
「なにしてんだ？　てか、最近サービスシーン多いな……」
「私は朝し忘れてた朝シャンしてるだけよ。ルーウェンこそ、ほっぺにチーズ付いてるし」
メアリーはルーウェンの頬に付いたチーズを舌で嘗め取る。
「なっ……！」
「なに赤くなってんのよ。あんたが小さかった頃は当たり前にやってたつうの」
「お前も充分赤いし服着ろ」
偉そうにいう割に自分まで顔を赤くしていたメアリーはルーウェンに指摘されると慌てて曇り硝子の扉へ消えた。メアリーはどうやら、ルーウェンに対してはジンとしての付き合い方、メアリーとしての付き合い方がごっちゃになってるらしい。他のメンバーにはジンだった頃の付き合い方をそのまま続けているようだ。
「なんだかなあ……。あの時お姉ちゃんだったメアリーが同い年とは」
「ルーウェン、これ持ってけ！」
ルーウェンはメアリーが曇り硝子の扉を少し開いて投げ渡した鍵を受け取る。タグがついており、どこの鍵か容易に判断できる。しかし、部屋の名前が解ってもどの扉を開けばその部屋に入れるのかわからないのだから結局探す必要がある。
しかし敵陣ど真ん中で堂々とシャワーなど、ジンらしくないがメアリーらしいとルーウェンは思った。多分、あれは無防備な状態になった自分を囮にして敵の出方を伺っているのだとルーウェンは想像する。この分ならアクセルも独自の行動を取ってるに違いないとルーウェンは鍵を使う部屋を探し出した。

二階

「ここだよな」
リアルアースにはゲームという形でこの家の情報が流れている。ルーウェン自身、『青鬼』というそのゲームのプレイ経験はないがプレイ動画をネットで見ている。
プレイ動画の記憶と照らし合わせたおかげかすんなり鍵を使う扉は見つかった。二階の四部屋の内、階段を上って二番目に見当たる扉だ。
中に入るとたんすに勉強机といった記憶通りの光景が広がる。ルーウェンは悠々と勉強机を調べて鍵を手に入れた。
すると、ガタッとたんすが揺れた。ルーウェンは驚きもせずたんすに向かい合う。
「ヘイ、誰か知らんが出てこい。俺は怪物じゃない」
ルーウェンの言葉に返事はない。ルーウェンはたんすを開けることにした。
「アクセルか？　青鬼を怖がっていたのは黙っていてやるから出てこあああああああああああああああああああああああ！」
ルーウェンはたんすを開けた瞬間に飛び出したものを回避した。ダチョウの頭に人間の体。鳥人間だ。しかも目が赤く、暴走状態。
「逃げろぉぉぉぉぉぉぉ！」
鳥人間も同じくゲームとして情報を得ている。ゲーム内では捕まると強制的に最初の場所に戻されるだけだが、ここはゲームと違い夢の中じゃない。どうなるかわからないのでルーウェンは逃げた。
「なんだよ一体！」
文句を言いながら辿り着いたのは図書室前。さっき物音の正体を確認しに行った時、開かなかった扉だ。鍵を使い、ルーウェンは扉を開ける。
図書室の中をしばらく進むと、鉄を鳴らす音がした。ルーウェンが恐る恐る本棚の影から様子を見ると、
シザーマンが嬉しそうに鋏を鳴らして走ってきた。

「なんだここはあああああああ

ネメシスはメアリーの腹を打つ。鈍い音がしてメアリーの身体はだらりと力なくぶら下がっている。打たれた腹は衣服が裂け、白い腹部が見えている。ネメシスはそこに太い触手を何本も刺した。

「ぐ、げっ……！」

メアリーは痙攣してしばらくすると動かなくなった。同時に、メアリーの姿が掻き消える。

「びっくりした？　別に魔法が使えなくても幻覚を見せるのは可能なんだよ？」

ネメシスが後ろを振り向くと、桶を一定のリズムで叩くメアリーがいた。こんな簡単なことで幻覚を見せていたのだ。こっちのメアリーはちゃんと着て来た服を着ている。

「冥土の見上げに、教えてあげる」

メアリーは艶っぽい唇に細い左手の人差し指を当てて囁く。背中に背負ったクレセントは抜かれ、右手に握られている。それを広い廊下で振り回し、背中の鞘に収める。

ぱちん、という音がした瞬間、ネメシスはサイコロステーキの様な細切れになった。

「メアリー・ブロードの、本当の実力を」

メアリーは散らばるネメシスにいたずらっぽく笑い、ウインクをする。

図書室

「畜生シザーマンめ！　嫌なこと思い出すじゃねぇか！」

ルーウェンはシザーマンの攻撃を回避。跳び上がってシザーマンの背後にまわる。

シザーマン、シザーマンといえばバロウズ邸、バロウズ邸といえばフラれた場所。そんなマジカルバナナ形式で嫌ことを思い出したルーウェンは腹いせとばかりに剣を抜く。

「不死身の怪物でもな！」

ルーウェンは一閃、シザーマンの右腕を落とす。
「例え再生出来てもな！」
もう一閃。今度は左腕。鋏が宙に浮く。
「武器さえなければな！」
ルーウェンはジャンプして鋏を掴む。さらに空を蹴り、二段ジャンプ。
「ただの的なんだよ！」
天井に達したルーウェンは、鋏を深く天井に突き刺す。鋏はもち手付近まで刺さり、ちょっとやそっとじゃ抜けないだろう。
「やーい！　鋏欲しかったら二段ジャンプしてみやがれ！　もっとも……」
ルーウェンはコートから皿の破片を取り出す。そして、シザーマンに踏み込む。
「一段ジャンプが出来たらな！」
シザーマンは十字に切り裂かれた。ルーウェンは破片を捨て、剣を鞘に収めると髪をかきあげ決め台詞を言う。
「卑劣だなんだ、文句でも言ってろ。勝てば官軍なんだ」
「なーに格好つけちゃってるの」
後ろからメアリーが現れた。自分のことは棚上げである。
「ま、正義なんて勝った奴が決める。そして俺が勝った奴だ」
「戦場の真理をいつの間に会得したのよ」
メアリーは呆れながらルーウェンを引っ張り図書室を出る。図書室を出るとアクセルが手羽先をほうばっていた。鳥人間を倒した模様。
「旨いなこれ。てか俺の戦闘はカットなの？」
「強いアクセルさんは瞬殺するの確定だから」
メアリーがスルーして歩く。もう一度玄関に全員が集合した。すると、ヘルメットにライダースーツのあの男がヨヨと立っていた。
「君達……。私はずっと屋根裏部屋にいたのだ。真っすぐいけば会えたのに……！」

男はヘルメットをとった。素顔は少し老けているがルーウェンそっくりだった。
「未来の俺？」
「兄のジンに似てるなら、双子の弟である私に似てない道理はないだろう」
「アスタリスク！」
メアリーが叫んだ。彼は＊だった。本名、アスタリスク・クレッシェンド。初代ジン・クレッシェンドの弟だ。
「そうだよ。久しぶりだねメアリー。君にはこのセレモニーに参加してもらいたい。僕が僕なりの方法で目的へ辿り着く、最後を飾るセレモニー」
「セレモニー？」
メアリーは聞きかえした。答えはアスタリスクが手袋を外すとともに返ってきた。
「八元素のリングが！　最高裁判所からちゃっかり薫風のリングを！」
「そうだよルーウェン君。君が私に火を付けたのだ。兄の姿をした君が。私は世界を支配することにした。自分なりの方法という言い訳で逃げてきた自分を変えるために。世界政府を変える力として用意したフロントワールドだが、自分のために使わせてもらう！」
「自分探しの旅ってか？　お前は２０代後半のＯＬか！」
シリアスなシーンを台なしにしながらルーウェンは叫んだ。しかし、自分を変えるために世界を制服するラスボスなど古今東西において前代未聞だ。
「内通者のヨヨ君にも協力してもらったよ」
「私役に立った、アーたん？」
気軽にヨヨがアスタリスクの腕に抱き着く。ルーウェンの体ががくりと揺れる。
「アー……たん？　アスタリスク、お前何歳ヨヨと歳離れてると思ってんだ？　てか、お前が内通者なのか？」

「ごめんルーウェン。私、貴方よりアーたんの方が好きなの」
「ルーウェン、内通者がヨヨだって気づかなかったの、あんただけよ」
メアリーは、なにやらヨヨの正体に気付いていた様子だった。
「え？」
ルーウェンが聞いた。
「いやだって、ヨヨしか知らない病室にバンが来れたし、学園都市にタイガーフォースがいた件も、ヨヨが学園都市行き決定したわけだし。なにより震土のリングをさらわれた時、投げるタイミングがあったのに投げなかったし」
メアリーの解説を聞いて納得したルーウェンはヨヨに向きなおる。
「どういうことだよ……、俺の何がいけなかったんだ？」
ルーウェンは必死に食い下がる。まるで彼女に別れ話を持ち掛けられた彼氏だ。
「えーと、ね。夏場でも黒いコート着てるとことか、無造作な銀髪とか、青い目とか、バイクの好みとか、武器とか、戦術とか、台詞回しとか、技名叫ぶとことか、部屋探してもエロ本一つ出てこないとことか、なんか戦闘データばかりまとめてる真面目なとことか、緊急時なのにわざわざ勉強してるクソ真面目なとことか、ていうか」
「全部じゃん！」
ルーウェンは思わず叫んだ。フラれた挙げ句、丁寧に存在を全否定されたのは世界を探しても彼くらいだろう。
「ルーウェン……。いままで、ありがとう……。でも……私……もう戻れないの。楽しかったあの頃に……。漆黒の騎士団……タイガーフォース……　思いもよらなかったあの頃……でも…きっとそれはいいことなの。ルーウェンにとっても……　私にとっても……。わかるかしら？」
「わかるか！」
ヨヨの言葉にルーウェンが叫んだあたりでアスタリスクは両手を掲げて言う。

「さあ、始めよう。まずはみんなとの約束通り、リアルアースを初め崩壊した世界を直そう。全て元通りだ。ルーウェン君、君もリアルアースに帰るのだよ」
「させるか！」
ルーウェンがアスタリスクに切り掛かる。リングから放たれた光がルーウェンを包む。
「蘇れ、リアルアース！」
光が晴れた時、ルーウェンの姿はなかった。
「ルーウェン？」
「どこ行った？」
メアリーとアクセルがルーウェンを探した。アスタリスクは手を下げた。
「ルーウェン君は帰った。私を止めたければフロントワールドに来い」
アスタリスクはその場をヨヨと共に去った。立ち尽くすメアリーを置いて。

リアルアース

リアルアースは復活した。本来フロントワールドの封印結界であるリアルアースだが、復活の際にフロントワールドが座標を移動したのでリアルアースに封印されることはなかった。
ルーウェンはリアルアースが崩壊した時にいた場所、中学の門だ。
「やった！」
「終わったんだ！」
「俺達、帰れたんだ！」
周りにいた生徒が歓声を上げる。歓喜の渦の中、ルーウェンはいつもより重たく感じる剣を手に、呟いた。
「まだ、終わりじゃねぇだろ……！」
ルーウェンだった少年の呟きは、歓喜の中消えていった。

11．リアルアースのルーウェン

リアルアース　とある中学校

「やる気出ないな」

リアルアースに帰って一週間、ルーウェンは中学校の教室でだらけていた。だらけている状態こそ空き家に赴く前と同じだが、理由は違う。

ルーウェンは漆黒の騎士団にいた頃と同じコートを着て、フードを目深に被っていた。素顔は見えない。

「やる気の割に点数いいやん。どうした？」

「向こうにいい先生がいたんですよ」

ジャージの男性教師が茶化すように言う。ルーウェンは軽くあしらった。今、学校はリアルアース崩壊、復活の混乱から立ち直るために休みになっている。一旦生徒が集められ、確認テストが行われ、ルーウェンは最高得点を記録した。今日は暇だったので、教室で担任兼部活の顧問である男性教師と話をしていたのだ。

「で、結局高校どうするの？　このままなら、もっと上狙えるぜ？」

「元々勉強は好きじゃないっすからね……。この成績は羽川さんのおかげで、自分一人じゃ到底無理です」

ルーウェンはフードを被ったまま答えた。ルーウェンにはリアルアースは封印結界で、自分達の姿も仮のものだと知ったあと、リアルアースでのこの姿が自分のものでない気しかしないのだ。

「で、リアルアース崩壊したらどこにいたんだ？」

「トワイライトタウンっていう、夕日が綺麗な町にいました。そこで漆黒の騎士団って自警団に参加してました？」

「自警団？　雑用係か？」

「最初はそのつもりだったんですけど……、なんかそのうち最前

線に。オタクで色んな世界の知識があったからですね」
ルーウェンは机に乗せていた剣を手に取る。両手で持つのが手一杯で、今や片手で振り回すことも叶わない。
「この剣……つっても打ち直したやつですが、これで戦いました」
「てっきり銃とかだと思った。お前のことだし」
ルーウェンはこの男性教師の下、卓球部に所属していた。運動は苦手でレギュラーになれなかったが、仲間のサポートを行っていた。そのため、教師にはルーウェンといえば補助役という印象があった。そのルーウェンが最前線のエース。話を聞いた時には驚いた。
話の途中、隣のクラスの男子生徒が飛び込んできた。なにやら慌てている。ルーウェンはこんな慌てた姿を見たことなかった。
「どうしました？」
「大変です。今すぐ職員室へ！」
教師が聞くと男子生徒はとにかく職員室へ来いと急かす。いや、それすらじれったくなったのか、男子生徒は教室のテレビを付けた。教室のテレビは昔ながらのブラウン管。
『繰り返す、これは放送事故でもドラマでもない。全世界同時生中継だ！』
そのブラウン管から声が響く。なにやら緊迫した状況だ。喋っているのはルーウェンと同い年くらいの学生だ。
『リアルアースは復活し、我々は元の生活に戻れた。しかし、それは完全ではない。帰らぬ者達がいるからだ！　何故その者達は帰れなかったのか、答えは簡単だ。ルーウェン・ヴァイサスに殺されたからだ！』
「え？　俺のせい？」
ルーウェンは思わず声を上げる。帰らぬ者達の中には確かに、ルーウェンが殺した者もいる。しかし、全員が全員そうでもない。なにせリアルアースが崩壊していた期間は長い。不慮の事故までルーウェンは責任など持てない。
リアルアースは確かにフロントワールドの力で復活した。しかし、

いかにフロントワールドといえ、死者を蘇らせることは不可能だ。リアルアース崩壊中に死んだため、今も行方が知れない者がいるのだ。幸い、ルーウェンの学校は全校生徒無事だったが。

教師と男子生徒はルーウェンを見た。彼が、まるで自分自身がルーウェンであるかの様な発言をしたからだ。ルーウェンのリアルアースでの名前を知っていても、ルーウェンがルーウェン・ヴァイサスと名乗っていたことを二人は知らない。

『彼らは何故殺されたのか？　それは、ルーウェン・ヴァイサスがリアルアースに帰りたくないと怠惰な気持ちで我々のリアルアース復活を妨害したためである。我々はタイガーフォースに所属し、リアルアース復活に向けて動いていた。しかし、ルーウェン・ヴァイサスは我々の仲間を虐殺した！　ルーウェン・ヴァイサスの怠惰な感情に殺されたのだ！』

もはや感情しかない支離滅裂な文書を学生は読み上げる。背景はどこぞの学校が映っている。

「お前がルーウェンなのか？」

「そうですよ」

男子生徒が眉をひそめる中、男性教師がルーウェンに聞いた。ルーウェンが答えると男性教師はさらに追求した。

「あれは本当なのか？」

「半分は本当です。だけど、俺だって殺したくて殺したわけじゃない。仕方なく殺すしかなかったんです」

男性教師は落ち着いて言う。

「お前は人殺しをしそうにない奴だ。なんか理由があったのか……、話せ」

「はい。まずは、すべての始まりから……」

ルーウェンは語り出した。断罪のリングを手にした幼い日の出来事から、丁寧に。

小学生の頃、ルーウェンには友達がいなかった。消極的な性格だ

ったのが原因だった。
　そんなある日、ルーウェンは図書室で古びた本を見つけた。それは真っ白で何も書かれていない本だった。ルーウェンがそれを開くと、本が光り、どこかもわからない場所に飛ばされた。
　今思えば、あれはリアルアースの外だったに違いない。本はリアルアースから出るための装置だったのかもしれない。そこで、サイクロプスを結成した後のメアリー・ブロードと出会う。そしてしばらく一緒に暮らすうち、メアリーから断罪のリングを預けられる。本の効力が切れ、リアルアースに戻される直前のことだ。
　リアルアースに戻ると、保健室に寝かされていた。真っ白だった本には自分が向こうの世界でしたことと同じ物語が書かれていた。服のポケットにいつの間にか断罪のリングが入っていた。この不思議な体験は幼いルーウェンの中で、奇妙な夢を見ただけとして処理された。
　それから数年後、中学三年生になったルーウェンにリアルアース崩壊という非常事態が襲い掛かる。
　ルーウェンはトワイライトタウンに落ちた。そこで、ロクサスに誘われ漆黒の騎士団なる自警団に入団した。オタクとしての知識を買われた結果だ。しばらくは雑用を羽川とこなす生活だった。
　しかし、そんなルーウェンに転機が訪れる。トワイライトタウンにタイガーフォースを名乗る武装集団が現れ、人質をとり八元素のリングをトワイライトタウンから奪おうとした。当時のトワイライトタウンには、煌炎のリングがあった。
　ルーウェンは人質と一緒に捕われたが、護身用に銃を持ち歩いていた。ルーウェン達を監視していたのは暇さえあれば壁にマシンガンを撃つ危ない奴だった。交渉が成立した瞬間、そいつはルーウェン達にマシンガンを向けた。ルーウェンはとっさに引き金を引いた。そして、そいつを殺した。その時、ルーウェンは悟った。
　自分が手を汚せば守れるものがある、と。
　最初は迷いがあった。しかし、魔法少女でありルーウェンの師匠

である佐倉杏子と貨物船ガランシェールに乗り、武者修業の旅をする中で迷いは消えた。タイガーフォースに入隊したリアルアース出身者の横暴を目の当たりにしたからだ。
これは対話とか綺麗事を並べてる場合じゃない、自分が手を汚せばこいつらを無駄な犠牲を出す前に止められる。
そう、ルーウェンは思い始めた。そしてタイガーフォースの兵士を屠る度、人殺しへの抵抗も消えた。
ガランシェールでの旅を終えて、トワイライトタウンに戻ったルーウェンは倒れていた二代目ジン、つまりメアリー、を助けた。

すべてを話したルーウェンは男性教師の方を向いた。男性教師は驚きを隠せなかった。その時、テレビからまた声がした。
『ルーウェン・ヴァイサス！　聞こえているならこの学校に来い！　いまから一時間経つごとにここのガキを一人殺す！　まず、一人目だ！』
画面内に一人の子供が連れて来られる。映ってる学校は小学校なのだろうか、年端もいかぬ少女だ。学生がその少女の頭をバールで殴る。何発か殴ると、少女は頭から血を流して動かなくなった。恐らく死んだのだろう。銃がないから尚更、苦しい死に方しか人質には用意されていない。
「の……野郎！　今行くから、誰も殺すなよ！」
「待て！」
走り出したルーウェンのフードを男性教師が掴む。ルーウェンは簡単に停止させられた。ルーウェンは慌てて男性教師に言う。
「何ですか！　急がないとあいつら、みんな殺す……！」
「落ち着け！　まったく、お前は自分のことを考えない奴だよ。お前は怪我してもみんなのために玉拾いだなんだと……。もっと養生せんか！」
「それ今言うことですか？　てか、『みんなの為にできることを探せ』って言ったのは先生……」

「バカ、最後に行動に移したのはお前だ。今度は見知らぬ誰かのために殺人鬼として殺されるなんて、バカの極みだ！」
男性教師は何かでルーウェンの頭を叩いた。そして、それをルーウェンに差し出す。それはルーウェンが幼かった頃、メアリーと出会うきっかけとなった一つの本。あの真っ白だった本だ。
「せめてなんか武器は持っていけ！」
「先生、これ……」
「リアルアースが復活してすぐに、お前がいた小学校から送られてきた。なにかお前の役に立つかもしれないってな」
その本にはリアルアースの外のことが結構書かれている。恐らく、小学校の教師の誰かがこの本に記述のある世界へ行き、リアルアース崩壊の謎を解く鍵になるのではとルーウェンに見せようとしたのだろう。
「いくらか白紙のページがあるな……。効力は短いがリアルアースから出られるかな？」
ルーウェンは本を受け取ると、走って教室を出る。
「先生、さようなら！　今まで、ありがとうございました！」
「馬鹿野郎！　早く子供達助けてこいや！」
担任の声を聞いたルーウェンは颯爽と駆け出した。自らの意思を貫く為に。たった一つ、守りたいものを守り通すために。
ルーウェン・ヴァイサスという戦士であるために！

東京都　病院

「よかった。行方不明が多い中で無事帰れて」
「私としては、向こうの方がよかったがな」
病院の清潔な個室。そのベッドにクレア・ハーディだった少女はいた。興味もない恋愛小説を開いて父親の言葉に返す。彼女は恋愛小説より冒険小説の方が好きだ。
クレアの父親は財閥の会長だ。一人娘であるクレアは大事に育て

られた。病弱であるから尚更。
「しかし、ルーウェンとやらは来るのか？　お前の言うルーウェンという男、少し興味がある」
「ルーウェンは来るさ。あいつはそういう馬鹿だ。剣を交えた瞬間、わかる。ルーウェンというのはそういう男だと」
クレアの父親は立ち上がって窓の外を見る。東京の小学校がタイガーフォースのメンバーに占拠された。彼は警察に呼び掛けたが、どうも動きが鈍い。相手は銃も持ってない子供、警察の上部にタイガーフォース関係者がいたようだ。恐らく、署長の息子あたりがタイガーフォースに参加し、ルーウェンに殺されたのだろう。
「子供達にはルーウェンだけが希望、か」
父親の呟きを聞いて、クレアはテレビをつけた。どの局も小学校占拠の報道をしている。ルーウェン・ヴァイサスが誰なのか、世界中が注目してることだろう。もしかしたら自分の大切な人が帰らないのは、彼が殺したからかもしれないのだ。
「ルーウェン、来るか……？」
『来ました！　ルーウェン・ヴァイサスとみられる人物です！』
「ルーウェン！」
テレビのアナウンサーが緊迫した声で伝える。小学校の校庭に、ルーウェン・ヴァイサスと見られる少年が現れた。コートのフードを被り、剣を背負った少年。
クレアはベッドから立ち上がり、フリースを羽織って病室を出る。足どりは覚束ない。先端が外され、柄だけになった槍を杖代わりに歩く。
「行くのか？」
「行く、ルーウェンと戦う」
父親の言葉に振り返らず答え、病室を出た。父親は病院であるにもかかわらず、携帯を取り出し電話した。
「私だ。娘に危険が及ばぬように頼む。いつもの警備より気合い入れろ。ボーナスなら出すさ、それで娘さんにお土産でも買ってい

け」
父親は電話を切る。専属ガードマンへの電話だった。本来なら父である自分が行ってやりたいところだが、財閥の会長という立場もあり、それは無理だ。なら、してやれる限りのことをしようとしたのだ。

東京都　小学校

「待たせたな」
ルーウェンは静かに言った。校庭には実行犯数人がいるだけだ。周りは機動隊にすら包囲されていない。
「警察がいないな」
「バロウズ邸で殺した小隊長を覚えているか？　そいつは署長の息子でな。警察にすら助けてもらえないとは、因果応報だ」
バールを持った学生の言葉に、ルーウェンが校庭に並んだ死体を見る。小学生の死体が8人。ここまで来るのに新幹線で2時間だが、ルーウェンに新幹線のチケットを買う金など無く、お小遣をかき集め高速バスで来た結果4時間かかった。しかし、だとしても多過ぎる。
「おい、約束が違うぞ」
ルーウェンが静かな声で言う。
「仕方ない。お前が悪いんだ！　待ってるだけでもムカつくようなことを散々したのだからな！」
この学生は小学生を撲殺した奴だろう。憎しみに駆られておかしくなっている。
「みんな来たことだし、さっそく始めようか！　弔い合戦だ！」
校舎から大量の学生が出てくる。皆手にバールやらバットやら、鈍器を持っている。
（こりゃさすがにピンチだぞ……？　ここまでか）
ルーウェンは半ば諦めかけた。こちらは剣を背負っているとはい

え、重くて剣は振り回せない。向こうは鈍器を持った百人近い学生。勝ち目はない。向こうも負けるとは微塵も思ってないであろう。
（これまでなのか……？　てか、さすがにこんな野郎に殺されるのは嫌だぜ？）
ルーウェンは『殺す時は殺される覚悟を持つ』主義。故にこんな殺される覚悟も無い人間に殺されるのは無念だった。
（死ぬならクレアやメアリーみたいな綺麗な女戦士に殺されて死にたかった！　「恋人の仇、刺し違えてでも！」とかさ！）
緊張した顔の裏でそんなことを考えているとは、この場のタイガーフォース達は知るよしもない。
（それか兄貴キャラみたいに皆に希望を託して！　それがダメならラスボスとして……）
「ぐあっ！」
ルーウェンがグダグダと理想の死に様を考えていると、さっきまでルーウェンと話していた学生が倒れた。死んではいない。腕を撃たれてバールを落としたのだ。集まりかけた学生達の動きが止まる！
「なんだぁ？」
ルーウェンが不思議そうに撃った人間がいると思われる方向を見た。学生の傷から瞬時に方向を特定する。この程度はルーウェン・ヴァイサスの肉体をリアルアースに封じられても出来る。
「犯人に告ぐ！　大人しく人質とルーウェン・ヴァイサスを解放しろ！　貴様らは完全に包囲されている！」
所々イントネーションが異なる日本語が響く。小学校の周囲には武装した人間がいる。
「我々はドイツ軍！　ルーウェン・ヴァイサスにはちょっとした借りがあってだな、日本で言う『ワビサビ』に従い助けに来た！」
「ドイツ軍人さん、それワビサビ違う。義理人情や」
ドロップとおはじきを間違えた妹を諌める兄の様にルーウェンは言った。
「そうとも言う！　ていうか、幼い子供を人質にとるとは、ゆと

り世代はブシロードを完全に忘れたというのか？　ドイツと枢軸同盟を組み、自分の何倍もデカイ相手に立ち向かった日本人はもういないのか？」
いろいろとテンションのおかしい軍人が歩いてくる。ワビサビを間違えたわりに日本に詳しいらしい。屈強な肉体は軍人に相応しい。
「借りって、なんだ？　俺、べつに何も……」
「おっと、やはり日本人は慎ましいな。ドイツの国民的アイドルを助けてくれたってのに！」
ドイツ軍人はなにやら軍服の上着を脱いでシャツを見せる。そのシャツは、桜ヶ丘高校軽音部の秋山澪の姿がプリントされていた。
「澪？」
「そうだ！　彼女達放課後ティータイムはドイツで絶大な人気を誇るのだ！　私たちの部隊は皆大好きだ！」
「ＭＡＤ内だけの話だと思っていた……！」
「アニメなどキモオタの産物！　日本のはぶ！」
何か言おうとした学生が軍人に殴り倒された。仲間を殺された挙げ句、撃たれたり殴られたり散々である。
「私はハーデン・シュトロハイム大佐！　ドイツ一のけいおん厨だ！」
「かっけえ！　なら、俺も！」
ルーウェンはコートから白い本を取り出す。背表紙が武器になるかもしれないと思ったのだ。ルーウェンは本を開いて手を乗せると宣言する。フードを外し、しっかりと自分の存在を確認するように。
「俺はルーウェン・ヴァイサス！　日本で一番、二次元世界を愛する者だ！」
すると、本が光を発する。光にルーウェンは包まれて見えなくなった。しばらくして光が晴れると、ルーウェンは『本来の姿』を取り戻していた。
なびく無造作な銀髪、人懐っこそうでもしっかり前を見つめる蒼眼、黒いコートに断罪のリングがよく似合うその姿。ルーウェン・

ヴァイサスがリアルアースに現れた。
「日本人は変身できるのか！」
「多分俺だけですよーっと」
ルーウェンは剣を抜いて学生に向き直る。本はコートにしまい、戦いの目つきとなる。
「皆！　仇が来てくれたぞ！」
「やるぜー！」
二人の学生がルーウェンに走りよる。両方とも鈍器を持っている。二人は人質がいるからルーウェンは攻撃ができないと勝手に思っていた。
「馬鹿め」
ルーウェンが右にいた学生を斬る。学生は縦に真っ二つだ。
「人質がいるのにぶぺらぱっー！」
もう一人が何か言う前に、ルーウェンは上半身と下半身を切り放す。
「人質って、あれのこと？」
ルーウェンは門に向かって走り出す子供達を指差した。小学校を占拠していた全員がルーウェンの方に来たため、人質は事実上解放されていたのだ。
「早く捕まえろ！」
「その必要ねーわ」
手を撃たれた学生が数人を子供達のところへ向かわせた。しかし、ルーウェンはそれより早く子供達のところへ向かった仲間を斬った。
「さらに罪を重ねるかルーウェン・ヴァイサス！」
「お前が言うな」
ルーウェンはけだるそうに返す。そして、軍人に言った。
「日本語ができると見込んだ、子供達を頼みます！」
仲間にヒロインを托すガンダムパイロットみたいなことを言ったルーウェンは、学生達に斬りかかる。
ルーウェンは逃げ出す敵も迷わず斬る。

「逃げるには……」
本来ならこんな虐殺に近い戦いはしない。ましてや逃げる敵を討つということも。しかし、ルーウェンは学生を斬る。学生は十字に割れて崩れ落ちた。
「お前らは罪を犯しすぎた！」
今、逃げようとしてる学生は小学生を人質にしただけでなく、殺した。殺したのは一人の学生がしたことだったが、それに加担し行為を肯定した時点でルーウェンの中では同罪だった。
「死ね！　殺されろ！」
ルーウェンは次々と逃げ惑う学生を斬る。あっという間に学生の数が減り、最初に手を撃たれた学生だけになった。
「お前だって、人を殺したじゃないか！」
「ああ」
その学生は地面をはいずって逃げようとしていた。ルーウェンに捨て台詞を吐く。
「お前だって、同じじゃないかぁー！」
「知るか」
ルーウェンは学生の首を撥ねた。これで小学校を占拠していたタイガーフォースの学生グループは全滅した。
ルーウェンは子供達の無事を確認するために校門へ向かった。とりあえず無事みたいだった。
「どこへ行く？」
「わからない。とりあえずやることをやるだけさ。どうも俺は向こうの世界で臆病者のハートに火を付けちまったらしい。自分で付けた火は火事になる前に消さないと」
ルーウェンは軍人の質問に答えると、そそくさとその場をさった。マスコミに囲まれても大変だ。
しばらく歩いただろう。何もない路地にルーウェンはいた。一応姿は戻ったが、向こうの世界へは行けなかった。もしかしたらさっ

きみたいになんかの念を送ればできるかもしれない。ルーウェンは善は急げと本を出そうとした。その時、声がかかる。
「ルーウェン！」
なにか長い棒を杖にして歩いてきた少女がルーウェンを呼んだ。顔立ちの整った、美少女の類いに入る少女だった。杖にしている棒に、ルーウェンは見覚えがあった。クレア・ハーディの槍の柄だ。銃刀法とか対策で先端が外されているのだろう
「クレア？」
「ルーウェン、やったのか？　私だ、クレアだ」
ルーウェンは単刀直入に聞いた。少女はやはり、クレアだったようだ。クレアは槍の柄を捨てて駆け寄る。転びそうになって、ルーウェンに抱き留められた。
「大丈夫か？」
「よもや、君に心配されようとはな……」
ルーウェンが抱きしめた身体は細く、このまま抱いたら折れてしまいそうなほどだった。向こうの世界でクレアを抱いたことなどないからわからないが、向こうの世界でのクレアよりか弱い。
「お前、たしか病弱って……」
「ああ、気に、する……な」
息も絶え絶えでクレアは言う。ルーウェンの胸で熱い吐息を漏らしたクレアは何を思うのだろうか。
「君は私が殺す。だから、あんなところで……、死んでもらいたくなかった」
「クレア……」
ルーウェンの鼻孔をクレアが漂わせる甘い匂いをくすぐる。ルーウェンはクレアの細い身体を抱きしめて言う。腕の中のクレアと目が合う。
「ありがとう。けど、俺は君が」
「見つけたぞ、ルーウェン・ヴァイサス！　俺はバン・グローリーだ！」

ルーウェンはいきなり声をかけられ、非常に残念そうな顔でそちらを見る。
「なんだバンか。あっちいけ、今最高にいいムードなんだ。最高アクセス数がうなぎ登りだ」
「ルーウェン、シリアスシーンでメタ発言はいかがなものかと思うぞ？」
「クレア、俺はバンが出てくるシーンは全てギャグシーンだと思っている」
「ふっ、違いない」
クレアは思わず笑った。ルーウェンはその笑顔を見て思ったことを言う。
「お前、笑うとかわいいな。いっつも硬い表情してるし」
クレアが顔を赤くして顔をそらした辺りで、バンが割って入る。
「待て！　俺を無視するな！」
「無視するな？　これだから自分を特別視する人間は。無視されないのが当たり前、話聞いてもらって当たり前って生活してるからそんな態度なんだな。俺とは正反対」
「ということは、ルーウェンは無視されるのが当たり前、話聞いてもらえないのが当たり前の生活をしてたのか？」
「イエス！　もちろんサ！」
「無視するなー！」
バンの態度に不満を漏らしたルーウェンがクレアの質問に爽やかに答えた。バンは再び叫ぶ。
「あ、またバン。まったくうらやましいよ！　無視されないなんて！」
「ルーウェン、私は君を無視しない。ずっと君を見ている。君は私の、最後の討伐目標なんだ」
「クレア、ありがとう」
泣きそうになったルーウェンに、クレアが耳元で囁く。ルーウェンがクレアの肩に手を置いて言う。

「クレ……」
「無視するな！」
完全に抱きしめようとしたルーウェンはまたバンに邪魔された。
「お前、皆はどうした！」
バンの問い掛けにルーウェンはようやく答えた。にやりと意地悪そうな表情を浮かべて。
「死んだよ。いや、殺したよ」
「なに……！」
「最後の言葉はなんだっけな、忘れた！　あんな奴の辞世の句、覚える価値ねぇや！」
「貴様っー！」
バンはルーウェンに殴りかかる。しかし、そこでクレアに止められてしまう。
「バン！　ルーウェンは子供達を助けただけだ！」
「クレア……。でも、殺すことないだろ！」
「人質の子供達を殺されたのにか？」
「っ……！」
バンは拳を止めるしかなかった。理想ばかりを語って、結局は何もできない。今までは何でも出来たのに、どんな壁でも乗り越えられたのに、ルーウェンというまったく未体験の障害が現れ、対処出来ないのだ。
「くっ……！」
「じゃあ、俺いくわ。アスタリスクの奴と決着つけないとな」
ルーウェンは本を取り出し、パラパラ開いて調べ始めた。ルーウェンの手は白紙のページで止まる。
「行くぜ、覚悟してろよアスタリスク！」
本から光が放たれ、ルーウェンの身体が包まれる。光が晴れた時、ルーウェンの姿はなかった。
「行ってしまったな」
クレアはどこか寂しそうに呟いた。

12．ラストアスタリスク

ガランシェール内部

「あれが、フロントワールド……」

メアリーが宇宙貨物船ガランシェール、ブリッジの窓からフロントワールドを眺めた。地球のような球体ではなく、戦艦の形をした世界。戦艦といっても、宇宙艦隊よりも海の戦艦というイメージに近い。さらに、とにかく巨大だ。ガランシェールの１００倍といっても過小評価でしかない質量があった。遠くから見てもそんなサイズなのだ。近づいたらどうなることか。

メアリー達は世界に宣戦布告したアスタリスク討伐のため、フロントワールドに向かっていた。

「あれに忍び込むのか……。容易ではないぞ？　いくら赤い彗星でも、戦艦は三倍速にならん」

「容易でないが、やらねばならない」

ガランシェールのキャプテンである髭面の軍人、スベロア・ジンネマンがシャアに言う。二人はかつて同じジオン軍に属していたとメアリーは聞いた。さらに、この船にはルーウェンが乗ったことがある。

「しっかし、ルーウェンが消えたってマジなのかよ？」

「本当よ。メアリーとアクセルの前で姿を消したの」

既に変身した魔法少女二人がいた。杏子がほむらにルーウェン消失について、詳しく聞いていたのだ。杏子はなにやら納得してない様子だった。

「ルーウェン、あの小僧の安否はともかく、フロントワールドってのに侵入する作戦はあるんだろうな」

「それなら私が考えている。フロントワールドの弱点を利用するのだ」

ジンネマンの言葉に、ディズが答えた。ディズはフロントワールドの弱点を知っている。なにやら自身ありげだ。
「フロントワールドの迎撃システムはフルオートで敵をロックオンする。だが、ロックオンできる敵はある程度の大きさがなければならない。そこで、モビルスーツを使用する」
「なるほど、それなら迎撃システムを回避可能だ」
ジンネマンは納得して近くに控える漆黒の騎士団メンバーを見る。宇宙に行くのに、パイロットスーツを着ていない。
「だが、ただ侵入するだけならうちのギラ・ズールでも充分だったはずだ」
「理由ならある。まず、フロントワールドに侵入口を開けなければならない。それに破壊力のある機体が必要だ。さらに、万が一を想定してなるべく速い機体の方がいい。なおかつ、GNドライブを動力にする機体は熱源センサーに見つかりにくく、機体スラスターから散布されるGN粒子はセンサーに見つかるのを防げる。同じ性質だが、ミノスフキー粒子は散布してる暇はないのでな」
ここに来る前、ガランシェールに積まれた機体、ギラ・ズールはクシャトリアと共に下ろされている。そのため、今回はガランシェールのエースであるマリーダ・クルスは搭乗機体のクシャトリアが無いため、ガランシェール内で補助に回ることとなる。
代わりに、別の世界で集めた機体を積んだ。モビルスーツの名はジンクス?。ガンダムとほぼ同性能といわれる機体だ。これなら破壊力もギラ・ズールを上回れる。
「で、俺はロケットで直接行かせてもらうぜ!」
弦太朗は変身して飛んでいくことにした。フォーゼは元々宇宙での使用を前提とされており、ロケットスイッチを使えば宇宙空間でも不自由なく移動できる。
「いや、それは無茶だ。私のサザビーに乗っていけ」
そんな弦太朗をシャアが止めた。さすがに無理があった。ロケットがモビルスーツの機動力に敵うか不明な上、ちゃんと辿り着ける

保証がない。
「では、作戦を開始する」
「みんな、必ず帰ってきてね！」
「待ってます」
ディズの声でモビルスーツデッキへ走り出した全員の背中に羽川とナミネが声をかける。それが最後の会話とならないように。

フロントワールド　王座

フロントワールドには王座があった。そこにアスタリスクは座っていた。王座といってもロイヤルなパブリックイメージからは掛け離れた、機械的でＳＦなものだった。さらに王座の間は広い。学校の体育館くらいはあった。
「敵襲か」
アスタリスクはすでに素顔を晒していた。普段の白い鎧を着たアスタリスクの手には八元素のリングがはめられている。八元素のリングはフロントワールドの動力であると同時に制御装置。敵襲も直接装着者の脳に知らせてくれる。
「それにしても、危うく騙されるとこだったよ」
アスタリスクは目の前の柱を見た。なにか人のようなものが括りつけられていた。金髪が垂れ、顔は見えない。
「やれやれなにが『サラマンダーより、ずっと速い』だ。そうやって男を騙そうたって、そ、そうはいかないからな……！　単純な速度だけならレッドバロンで買った中古バイクよりルーウェン君のサラマンダーの方が速いはずだ。もうバイク王に電話して今日中には取りに来てもらうことにしたし」
明らかに騙されかけてた人間の台詞を吐きながらアスタリスクは柱に括りつけられた人を見た。柱に括りつけられたのはヨヨだった。彼女はアスタリスクを殺そうとしたのだ。
「それがルーウェン君のためなら涙の一つでも流して捕まえるだ

けにしたが、まさか恋人を生き返らせるためとは。失望したよ！
そんな出来もしないことの為に私はおろかルーウェン君まで騙すなんて、酷いよ！　これじゃルーウェン君がさらにかわいそうだよ！
……、それにしてもバイク王来ないな」
アスタリスクは世界征服という大きな目標を前にして緊張してるのか、おかしなことを口走っていた。しかし、こんな宇宙にバイク王は来ないだろう。
「バイク王の人が来る前に片付けよう」
アスタリスクが手をかざすと、柱は床の下に落ちていった。ヨヨが縛りつけられたまま。
「宇宙の外に捨てたし、これで安心だな。では、敵襲に対応しよう」
アスタリスクは余裕を持ってことにあたった。

宇宙空間

世界と世界の間に広がる空間はほとんど宇宙空間と同じだ。そのため世界はよく、惑星に例えられる。
「行くよ！」
メアリーが一番に飛び出した。ジンクス？の機体が赤い粒子を撒き散らしながら先頭に立つ。コクピットの中、メアリーは無線を開く。
『ちゃんと運転できるかほむら？　手伝ってやろうか？』
『その必要はないわ？　貴女の方が心配よ』
杏子とほむら。
『運転のしかたは記憶したか？』
『わかってるよ』
『あたしも大丈夫』
アクセル、ロクサス、シオン。
『これくらい、単車に比べたらどうってこと！』

『さっきまでスラスターの制御に戸惑ってたのはどこのだむぎゅ』
木乃にエルメス。
『……』
ＢＲＳ。
『なんか知らねぇけど、宇宙キター！』
『加速する、舌を噛むぞ』
弦太朗にシャア。
仲間達の声を聞いて、メアリーはさらにジンクス?を加速させた。
メアリーは一度、反政府組織サイクロプスのリーダーとしてアスタリスクと戦い、敗北した。いわば、これはリベンジなのだ。
メアリーは空き家に向かった時の格好でジンクス?に乗り込んでいた。サイクロプスの目はハッキリと晒されている。
「そういえば、あの空き家に肝心の青鬼がいなかったな」
今更そんなことをメアリーは思い出していた。

空き家

メアリーが思い出している真っ只中の空き家、そこにルーウェンはいた。そして、
「ぎゃあああああああああああっ！　青鬼いいいいいいいい！」
青鬼と遭遇した。ブルーベリー色の全裸の巨人が目の前にいた。
ルーウェンが姿を消したあの玄関ホールだ。
ルーウェンは青鬼が口をごにゃごにゃ動かしてるのに気付いた。
「え？　なぜ出てこうとするって？　そりゃ、他に用事があるからさ」
さらに青鬼が口を動かす。何となくルーウェンには青鬼が言おうとしてることが理解出来た。
「どこにって？　フロントワールドだよ。何？　いい方法がある？」

ルーウェンは青鬼の提案に乗ることにした。それがフロントワールドへの近道だと信じて。

フロントワールド内部　連絡路

連絡路へ入るシャッターを無理矢理こじ開けてメアリー達はフロントワールドへ侵入した。ビームを用いるまでもなく、フロントワールド側面のシャッターをジンクス？のマニュピレーターで開けたのだ。驚くことに、シャッターは鍵が開いていた。もう一度シャッターを閉めたら、シャッターは自動で修理されて内部の機密性を保った。これならジンクスを降りても大丈夫だ。

「来い、ってことなのか？」

「多分な」

ジンクスを降りたメアリーの言葉に杏子が返す。シャッターの鍵が都合よく開いているということは、そういうことだ。

「行こう」

メアリー達は連絡路を走り出した。シャアはサザビーで待機することになった。

「ロケットで飛んだら早いかもな」

変身した弦太朗、フォーゼが言う。しかし、フロントワールド内部はどんな罠があるかわからない。迂闊な飛行はやめた方がいい。

「まったく、自分探しの旅みてーに世界政府を狙う奴なんて初耳だ」

「そういえば、アスタリスクはどんな人なの？」

杏子の愚痴を聞いて、変身したけど見た目が変わらないキノがメアリーに質問した。キノはアスタリスクをよく知らない。

「アスタリスクは私が養子になった家の次男よ。双子の兄弟で、兄はジン・クレッシェンド。私が名前を借りていた人」

「要するにダチなんだな」

フォーゼが要約した。しかし、そのまとめ方は変だろう。

「私とジン、アスタリスクは世界政府軍の兵士になったけど、私とジンは世界政府に疑問を持って、反政府組織サイクロプスを立ち上げた。アスタリスクは内部から世界政府を変えるって、残ったんだ。昔から慎重な性格でね」
「そいつがなにかわからないけど、いきなり世界征服を企んだのか」
ロクサスが結論着ける。ロクサスとしてはなんでそんな慎重な男が世界征服を目論んだのか疑問らしい。
「原因は恐らく、私が最高裁判所に捕われて、ルーウェンがそれを助けてくれたこと。無謀なルーウェンを見て、思うことがあったんでしょう。それに、ルーウェンはジンに似てるから、兄に負けた気がしたんじゃない？　あいつは変なところで負けず嫌いだし」
メアリーの言葉を聞いて一同は納得する。この世界征服は地位のためでも、欲望のためでもない。単純に、アスタリスクが兄に似ているルーウェンに負けたくなかったから行動に移した世界征服。本来なら世界政府を転覆させる予定だったフロントワールドは、世界征服のために使われることになった。
「変な話だな……ってあれはなんだ？」
アクセルが指差す先に、三角の大きな兜を被り、大きな鉈を持った人影がいた。
「あいつ、カイナシティの！」
正体に気付いたのはキノ。彼女はその人影と一度戦ったことがある。レッドピラミッドシングと。
「あいつなにやっても倒せないんだよ？　どうする？」
「別のルート探すか」
キノの言葉にアクセルが面倒臭さそうに答える。倒せない相手に時間と体力を消耗してる暇はない。さっきまで歩いていたこの道は一本道ではないのだから、戻って別の方向に進めばいいだけだ。先程もいくつか分岐地点を目撃している。
メアリーが対策を考えていたその時、

ロケットが通路をぶち破り、レッドピラミッドシングを壁と挟んで押し潰した。

「何？」

「いやーセンチメンタル小室マイケル坂本ダダ先生に送ってもらったんだよ」

ロケットから出てきたのはルーウェンだった。ロケットからは一緒に青鬼と白黒の宇宙人、センチメンタル小室マイケル坂本ダダ先生が出て来た。ルーウェンは青鬼のいた空き家に墜落していたセンチメンタル小室マイケル坂本ダダ先生のロケットを飛ばしてフロントワールドに来たのだ。

「で、青鬼と一緒にいるのはなんで？」

「ああ。青鬼が『いい方法がある』って言ってな。それを使わせてもらった」

ルーウェンはセンチメンタル小室マイケル坂本ダダ先生と出会った経緯をメアリーに話し、彼には先程メアリー達が侵入したシャッター前にロケットと共に待機してもらうことにした。このままロケットが離れると、ロケットが開けた穴から宇宙に放り出される危険があるので、ルーウェンはメアリー達を連れてこの場を離れた。ロケットには青鬼とセンチメンタル小室マイケル坂本ダダ先生が残った。

ルーウェン達がいなくなったことを確認したセンチメンタル小室マイケル坂本ダダ先生は青鬼を乗せたロケットをバックさせる。彼の星で試作された最新のロケットだ。バックも可能だ。

バックすると、押し潰されていたレッドピラミッドシングは宇宙に放り出された。

フロントワールド　王座

フロントワールドの王座ではアスタリスクが侵入者を待ち構えていた。先程、レッドピラミッドシングが宇宙空間に放り出されたという情報が入ってきた。
「なるほど、不死身ならこの場から追い出せばいい、か」
アスタリスクは静かな声で侵入者を待っている。早いのは侵入者か、バイク王か。
「というか、フロントワールド内部には罠がないのか？」
アスタリスクの疑問はもっともだった。外部に迎撃装置を満載してるのに、内部にほとんど迎撃装置がないのだ。フロントワールドはあくまで、世界の破壊と再生がメイン機能ということか。
「なら、数少ない内部迎撃装置を使わせてもらうよ」
もうバイク王などどうにでもなれ、そんな気分でアスタリスクは内部迎撃装置発動をリングに念じた。
「そこまでだ！　アスタリスク！」
その時、王座正面の扉が開かれ、メアリーの声が響いた。漆黒の騎士団が内部迎撃装置発動の寸前で到着してしまったのだ。
「ちっ、遅かったか！」
「それって、俺らが言う台詞じゃね？」
ルーウェンがアスタリスクの舌打ちに疑問を持った。アスタリスクは内部迎撃装置の発動が遅れたことを嘆いたのだ。
「しかしルーウェン君。まさか君がいるとはね」
「なんだよ。ラストダンジョンならそれらしく、今までのボス全員集合とかやってくれよな」
ルーウェンは呆れたように剣をもてあそぶ。これなら別に自分の助っ人はいらなかった、と感じたのだ。
「なら、お望み通りやってあげよう。出ろ、偽りの手駒イミテーション！」
王座の広場、その真ん中に集まりだした漆黒の騎士団メンバーを取り囲むように、液体が何かの形を作る。それは全て、彼らが戦ってきた敵の姿になった。

しまっちゃうおじさん、ネメシス、クリーパー、メタルギア、レッドピラミッドシング、レッドアリーマー、アメボウズ、おまけにレイド・シャーロット、バン・グローリー。さらには、クレア・ハーディの姿もある。
「これで満足か？」
「へっ、楽勝！」
ルーウェンには余裕があった。仲間がいるからだ。ルーウェンは奥の部屋へ向かうアスタリスクを見て、メアリーに言う。
「行ってこい。リベンジマッチだ！」
「ここは任せた」
メアリーは感慨深そうに呟いた。まさか自分が拾った幼い少年が、弱虫だったあのルーウェンが、背中を預けられる戦士に成長するとは。
メアリーはアスタリスクを追う。アスタリスクにリベンジを果たすため。

フロントワールド　祭壇

メアリーが王座の奥にある扉に入ると、そこは王座の二倍くらい広い空間だった。何もない空間。奥には祭壇のような棚があるだけ。
「さて、リベンジのつもりか？」
「そのつもりだ」
メアリーは背中のクレセントを抜いていた。ジン・クレッシェンドと名乗り、不安を振り払うように振るっていた頃に比べると、クレセントは幾分か軽い。
「クレセントは兄さん、ジンの武器だ。そんな不慣れな得物で私に勝つ気か？」
「勝つ！」
アスタリスクに問われるなり、メアリーは正面から切りかかる。アスタリスクをクレセントが切り裂いた、

「なっ！　陽炎？」
かのように思えた。陽炎でメアリーの目をごまかしていたのだ。
アスタリスクは八元素のリングを戦闘に利用している。
「まずは、煌炎のリング！」
アスタリスクの手から炎が放たれる。炎はたちまちメアリーを飲み込む。
「うああっ！」
「熱いか？　なら次は水龍のリング！」
今度は勢いよく水が出る。水圧が高いので、水でもかなりのダメージになる。それで身体を打たれたメアリーは軽く吹き飛ばされた。
「げほっ！　う……」
壁にぶつかり、床に崩れ落ちたメアリーは立ち上がろうと身体に力を入れるが、ダメージが大きく立ち上がれない。内臓を痛めたのか、吐血した。
「なら、次は震土のリング」
アスタリスクが手をかざすと、メアリーの真下から岩の塊が突き出し、メアリーを突き上げた。突き上げられたメアリーは地面に叩きつけられた。
「が……あっ！」
「これはセットだったよな。雷鳴のリング！」
アスタリスクが放った雷の玉がメアリーを襲う。彼女は身体に鞭を打ってたちあがり、避けたが雷の玉はメアリーに吸い寄せられていく。
「うあああああっ！　くっ、あ……」
「水龍のリングで濡れていたからか。なら乾かしてやろう。薫風のリング！」
突風が吹き、かまいたちがメアリーを切り裂いた。彼女はそのまま風で倒れ、床に転がった。
「うっ……く」
「さて、次は命樹のリングだな」

倒れたメアリーを床から生えた木が起こし、縛りあげる。ぎりぎりと締め上げられ、メアリーは苦痛の声を漏らす。
「くっ、つあ、あああああああああああっ！」
身体から鈍い音が聞こえる。彼女の細い身体の内、どこかが折れたのだろう。メアリーは口に充満する血の味を感じながら、アスタリスクを睨みつける。
「残りは天光のリングと……」
アスタリスクは手から太い光の筋を走らせる。光はメアリーを縛っていた木を焼いたが、同時に彼女も焼かれていた。床に倒れたメアリーは立ち上がる力すら失っていた。
「う……」
「常闇のリングか」
メアリーの上に、闇の塊が落ちてくる。闇の塊は落ちると同時に爆発し、メアリーを吹き飛ばした。
「あくっ、ううっ……」
床に横たわるメアリーには、もう戦う力は残されていなかった。アスタリスクは落ちていたクレセントを持ち、メアリーまで近寄る。
「これで、今度こそ最後だ。辞世の句は用意したかな？」
クレセントをメアリーの胸へ突き刺す。
「その必要はないわ」
しかし、アスタリスクが突き刺したのはただの床だった。
「何？」
「こっちよ。ルーウェンが一人で残って時間を稼いでくれたの」
メアリーを抱えたほむらが言った。ほむらが時間を止めて運んだのだ。さらに、ルーウェンを除く漆黒の騎士団メンバーも集合していた。
「何人揃おうとも、私の敵ではない！」
「それはどうかしら」
ほむらは上を見る。アスタリスクも釣られて上を見上げた。すると、今まさにタンクローリーが落ちてくるというとこだった。

「こういう時、こうやって言えばいいのよね？」
ほむらの呟きを聞きながら、アスタリスクは焦った。なんとか炎を防ぐバリアを貼ろうとする。
「タンクローリーだッ、てね」
タンクローリーが落ち、大爆発が巻き起こる。アスタリスクはなんとかバリアでダメージを最小に抑えたが、決して無事ではなかった。
「ちっ、黒煙で前が！」
さらに、煙で周りが見えない。しかし、煙の隙間からちらちらと赤い物が見える。その正体は煙が晴れると同時に明らかとなった。
「ロッソ・……」
赤い物は杏子の髪だった。四方八方から槍を構えた複数の杏子が飛び出してくる。魔法で分身したのだ。
「ファンタズマ！」
「ぬう！」
アスタリスクはもろに攻撃を受けてしまった。アスタリスクは振り払おうとするも、
「ビッグカノン！」
正面にはビッグカノンを構えたキノ。そしてキャノンを構えるＢＲＳ。
「魔射滅鉄＆手持ちの銃フルバースト！」
「逃がさない……！」
キノはアスタリスクの眉間にビッグカノンをぶち込むと、ロケットランチャーや手榴弾、マシンガンを乱射。加えてＢＲＳのキャノンから１秒間に２０発の岩石が発射され、またまた大爆発。
「おのれ！」
アスタリスクは黒焦げと頭から流血で済んだが、大きなスキを作った。
『エレキ。エレキ・オン』
「仮面ライダーフォーゼ、タイマン張らせてもらうぜ！」

フォーゼがロケットスイッチをエレキスイッチに入れ替えていた。姿が雷神を象った黄色いものにかわる。エレキステイツだ。右手のロッド、ビリーザロッドの柄にエレキスイッチを入れる。

「ライダー１００億ボルトブレイク！」

『リミットブレイク！』

アスタリスクはこれも直撃してしまう。フォーゼのビリーザロッドがアスタリスクを切り裂いた。

「なん……だと？」

「これで終わりじゃない、力を貸してくれ！」

ロクサスは白と黒のキーブレードを両手に持ち、天にかざした。光がアスタリスクに降り注ぐ。

「あたし達は負けない！」

シオンがキーブレードでアスタリスクを叩く。そしてアクセルは特大の炎を纏ったチャクラムを投げつける。

「記憶したか？　俺達、強いから」

炎に巻かれて、アスタリスクはアクセルの声を聞いた。さらに驚くべきは、ルーウェンがアスタリスクの目の前にいたのだ。ルーウェンはイミテーションに勝った。

「昔のメアリーなら勝てたかもな。でも、今のメアリーには俺らがいる」

ルーウェンは燃え盛るアスタリスクに切り掛かる。背中の剣はすでにむき身だ。

「ジャッジメントクロス！」

十字にアスタリスクは斬られた。炎も切り裂かれて晴れる。

「アスタリスク、貴方の、負けよ！」

メアリーはクレセントを支えに立ち上がり、アスタリスクまで走る。彼女の、最後の力を込めた一撃を、トドメにするために。

「十字鋭爪！」

ルーウェンとメアリー、二つの十字が重なり、全ての終わりを告げた。

エピローグ　英雄ルーウェン・ヴァイサス

フロントワールドの外には、今更ながら世界中の艦隊が集まっていた。彼らがすることは、フロントワールド攻略からフロントワールドの調査に変更されるだろう。

「終わったな」

倒れたアスタリスクを見て、ルーウェンが呟く。祭壇には激闘の跡が残されていた。戦後処理とメアリーの治療のため、ディズ、ナミネ、羽川、シャアも合流していた。

仲間達は戦いの余韻に浸っていた。しばらくは誰もここを離れたがらないだろう。アスタリスクが新型の発電所を様々な世界に設置し、それが原因で世界が崩壊。その時からおよそ４ヶ月。長い戦いが終わった。

「アスタリスク……」

メアリーはアスタリスクの傍に座り込んでいた。これでも、メアリーとアスタリスクは家族だったのだ。

「メアリー……か、私の負けだな」

アスタリスクが言う。両手からは八元素のリングがこぼれ落ちた。

「これで、終わりか。私は世界征服には向かなかったのだな」

「だな」

ルーウェンが横から割り込む。アスタリスクは最後まで、兄に負けたのだ。正確には、兄に似た少年だが。

「ルーウェン君、まさか君が来るとは。兄との戦いを避けたかった私への罰か……」

「いや、たまたまリアルアースから出られる物を持っていて、たまたま出たところに宇宙船を持ってる奴がいたってだけの話だ」

「そうか……」

アスタリスクが言うなり、仲間達、ロクサス、アクセル、シオン、ディズ、ナミネを除く漆黒の騎士団メンバーの身体が光に包まれる。

「ど、どういうことだよオイ！」
「私が世界征服に失敗した時、崩壊した世界を全て再生するようにプログラムしておいた。フロントワールドには世界再生機能がある」
杏子の問いにアスタリスクは答えた。同じ世界に住むほむらは冷静に呟く。
「リアルアースが再生した時のルーウェンみたいに、私達も元の世界に帰るのね。じゃあ、私は先にまどかのもとへ帰るわ」
ほむらは消えた。杏子もルーウェンに別れを告げる。
「ルーウェン、またな。ちゃんと修業しろよ！」
杏子は消えた。それを見て、キノは名残惜しげに言う。
「世界中の名物、食べたかったな」
「それを言ったらキノはいっつも食べてばかりむぎゅ」
キノとエルメスは消えた。ＢＲＳはみんなを見渡し、そのまま、
「……」
無言で消えた。最後まで口数の少ない奴だった。
「では、私は彼を見習って思い切ったことをしよう。アクシズあたりを地球に落とすか」
物騒なことを呟いてシャアは消えた。
「じゃあ、帰るまでが戦いだからね」
先生みたいなことを言って羽川は消えた。
「まずは、天高の全員とダチになるところから始めるか」
変身を解除した弦太朗が消えた。残されたのは、ロクサス達トワイライトタウン組とメアリー、ルーウェンだけだ。
「これからどうしようかね？」
ルーウェンが振り向くと、アクセルは速答した。
「アイス食おうぜ」
「やっぱり好きだな、アイス」
ロクサスが言うと、ディズがルーウェンを見て呟く。
「世界を救った英雄、か。生涯の中で、ソラの他にもう一人を見

ようとはな」
ディズは世界を救った英雄を一人知っている。ソラという少年だ。ディズは最後に世界を救うのはソラだと考えていた。しかし、最後までソラは来なかった。代わりに来たのは、リアルアースに強制送還されたルーウェンだった。
「いや、俺が英雄って……。みんながいたからアスタリスクに勝てたわけだし」
「しかし、君はリアルアースという安全地帯からわざわざ来た。君は英雄として語られるだろう。何より、最高裁判所に攻め入った件もある。世界政府にトドメを刺したのは実質君だ」
ルーウェンは確かに最高裁判所を襲撃した。英雄と呼ばれるには充分だ。
「英雄、ルーウェン・ヴァイサス。君はリアルアースに帰ることになるだろうが、功績は世界中に語られるさ」
ディズが言うと、ルーウェンの身体は光に包まれた。ルーウェンが本を取り出す。光の原因はこれだ。どうやら、時間切れらしい。
「なんだよせっかく英雄になったのに……。時間切れ？」
ルーウェンが言う通り、本の効力が切れたのだ。白紙のページが最初より少ないせいだろう、ルーウェンが幼い頃に使った時より効力が短い。白紙のページにはさっきまでの、ルーウェン達とアスタリスクの戦いが記録されていた。
「何処かの世界にある『封穴のグリモア』を参考にして作られたものだ。この本の力でリアルアースの外に出ることが出来るが、その間の行動は白紙のページに記録される。白紙のページ分だけしか、リアルアースの外にはいられないのだ」
ディズはフロントワールドの迎撃システムの弱点を知っていたり、何かと物知りだ。ルーウェンは納得しながら慌てた。
「白紙のページ無ぇ！　もうこれ使えないの？」
「なら、最後に胴上げしようぜ。英雄さんよ」
アクセルの提案でルーウェンを胴上げすることになった。ルーウ

エンにとって、生まれて初めての胴上げだった。

▼

この日、世界を崩壊させたタイガーフォースとの戦いは幕を閉じた。

交易と立法の要ポートランドの一時的な崩壊とルーウェン・ヴァイサスによるジャッジメントランドの壊滅を含めた一連の戦いは『タイガーフォースの乱』として語られることになる。

リアルアースを巻き込んだ長きに渡る『幻界戦線』、その導入部分として。ルーウェン・ヴァイサスの伝説、その始まりとして……。

▼

ルーウェンは消えた。胴上げが１０回を越えたあたりで光になって消えた。

数日後　見滝原中学校

「まどか……」

ほむらは廊下で友人と談笑する鹿目まどかを見た。今度こそ彼女を助ける。ほむらの瞳には強い意思が篭っていた。

鹿目まどかはこのまま時が過ぎれば死んでしまう。それを回避するのがほむらの目的だ。実際、ほむらはまどか救出に失敗する度に、時間を巻き戻してまどかとの出会いからやり直している。

今までは一人だったけど、今は仲間がいる。心の中にいる仲間達。漆黒の騎士団が。

ほむらは自分のカードを取り出して見つめる。名刺代わりの黒いカード。時計のマークと英語の名前が白く印刷されている。

「私は一人じゃない」

ほむらはまず、仲間の確保に動こうとした。この町の魔法少女、巴マミと連携をとる。そのうえで、これから魔法少女になるまどかの親友、美樹さやかも仲間に加える。

そんなことを考えているほむらを、遠くで見守る人影があった。杏子だ。魔法で展望台にある備え付けの望遠鏡を強化して見ている。

「おー。やっとるやっとる」

既に彼女はほむらから、協力を依頼されている。普段のほむらから考えられない行動に、杏子は正直戸惑った。

だが、快く協力した。それがこの戦いで得た、ほむらなりの成長だと信じて。

横浜市某所

木乃は大量の餃子を目の前に、気合い充分だった。向こうの世界の名物を食べ損ねたため、近場の餃子屋でチャレンジメニューを制覇しようとしているのだ。

「おいしかった！」

制覇した。相変わらず早い。木乃は自分のカードを取り出す。木乃のカードにはリボルバーの断層を正面から見た様なマークと英語の名前が書かれている。

「みんな、元気かな？」

木乃の言葉は絶句する他の客や店主の放つ空気や空調に消えた。

某学校

「見覚えのないカードがあったのよ」

セーラー服を着た少女、黒衣マトが親友、小鳥遊ヨミにカードを見せて言う。ツインテールのあたりがＢＲＳに似ているが、関係はあるのだろうか。

ヨミが見せられているカードは、黒いカードに白で星と英語で『ブラックロックシューター』と書かれている物だ。ヨミが提案する。
「捨てたら？」
「それがね。捨てようとすると、なんか躊躇われるのよ」
「それって整理が出来ない人じゃない」
二人の笑い声が響く。マトは覚えのないカードに何やら思い入れを感じていた。

宇宙要塞　アクシズ

「落とすには申し分ないな」
シャアはアクシズを訪れていた。機能は働いてるようなので、宇宙服は必要なかった。
堕落した地球人を制裁するため、核の冬を起こそうとシャアは考えた。しかし、ちょうど落とすのに適している小惑星がなかった。
そこで選ばれたのが小惑星を利用した宇宙要塞アクシズ。一応、動力があるみたいだ。
アクシズの司令室と見られる場所にシャアはいた。シャアはその場で呟いた。
「ララァ、ついでにルーウェン、私を導いてくれ」
シャアは動き出す。コロニー落としを越える、人類史上最悪のテロ計画を実行するために。

天ノ川学園周辺　河川敷

「宇宙、キター！」
如月弦太朗は通学路である河川敷を全力で走っていた。学園全員と友達になるために。
彼は仮面ライダー部を立ち上げ、怪物退治を行いながら友好の輪を広げている。

違う世界の人間ともダチになれた。その自信が彼を走らせていた。
仮面ライダーフォーゼは今日も戦う。学園の全員とダチになるために！

直江津高校　教室

「ルーウェン、高校受かったかな？」
羽川翼は高校の教室で、ルーウェンの心配をしていた。文化祭の準備が忙しいのだが、ルーウェンは自分が直々に教えた、いわば生徒。それなりに気にしていた。ルーウェンは一応、受験生なのだから。
「誰です？　そのルーウェンって」
「秘密」
机をくっつけて向かいに座るクラスメイトの阿良々木暦が聞くが、教えなかった。
とりあえず今は文化祭の準備に集中の羽川だった。ルーウェンのことは心配だが二の次である。

トワイライトタウン　時計塔

トワイライトタウンの時計塔。そこでいつも、ロクサス、アクセル、シオンの三人はアイスを食べる。今日はその三人だけではない。ハイネ、ピンツ、オレット、ナミネ、さらにディズがいる。異様なメンバーだった。
ロクサスは終始私服だったが、アクセルとシオンはずっと機関のコート。今度みんなで服を選びに行く予定だ。
「赤が一番遠くに届く色なんだってよ」
「我々が目で確認出来る光は七色。これを可視光線というのだ」
アクセルが夕日が赤い理由を語るが、ディズが細かく補足する。
ロクサスは遠くにいるだろうソラに向かって呟いた。

「ソラ。元気でやってるか？」

ポートランド　ショッピングモール

「これ、似合ってるんじゃない？」

アパレルショップでルーアに服をあてがわれながら、メアリーは戸惑っていた。

メアリーはポートランドに戻った後、ルーアに全てを話し、サイクロプスの目も見せた。

ルーアも最初は自分がジンと名乗っていた小柄な少女と同一人物であることが信じられなかったみたいだが、ルーアから貰った物を全て覚えていたため、いつ何を貰ったかを言うことで信じてもらった。

その結果がこれである。

メアリーは傷を数日で殆ど完治させ、ルーアと買い物に出掛けた。ジンと名乗っていた頃着ていた物はサイズが合わなくなっていた。一般的な若者向けアパレルショップだが、メアリーは派手過ぎると感じていた。今まで着ていたのが軍服となると、そう感じるのも当然だが。

「テンションについてけない……」

ルーアのハイテンションな姿を見たメアリーは呟いた。これから慣れていけばいいことだと自分を納得させる。

「そういえば、メアリーは好きな人とかいるの？　やっぱり、あのルーウェンとか？」

「ルーウェンは無理だな。あいつは弟みたいなもんだ。強いて言えば、ジンかな」

「なるほど、名前借りるくらいだもんねー」

名前を借りた理由は別に好きだったからとかじゃないが、ルーアにはそれで納得させた。名前を借りた頃のメアリーには、ジンは恩人だったのだ。

「なら、その人が霊界から戻ってきたくなるくらいかわいくなっとかないと！」
「いや、あいつは軍服とか似合うのが趣味って……」
ルーアのテンションに押し切られ、メアリーはアパレルショップの奥へ引きずり込まれた。
不意に吹く風がメアリーの髪を撫でる。メアリー・ブロードは新しい一歩を踏み出したばかりだ。

リアルアース　東京都某学校

リアルアースの東京都、その教室でバンは新聞を読みながら苛立っていた。
「ルーウェンが捕まらないだと？」
ルーウェン・ヴァイサスには逮捕状が出ているが、警察官の殆どが小学校立て篭もりの際に出動を禁じた上層部に疑問を持ち、ルーウェン・ヴァイサスの確保をストライキしているという記事だった。
「これでは日本の警察はなんの為にある！」
それを言うなら、小学校立て篭もりの時に言うべきだったが、バンは怒りに燃えていた。確かに人質を取るなどやり過ぎな点はあったが、ルーウェンは犯行グループに投降の機会も与えず虐殺したのだから。
「ルーウェン・ヴァイサス！　必ず反省させてやる！」
バンはルーウェンに対する怒りを秘めて、教室を飛び出した。

東京都　某病院の中庭

「それで？　ルーウェン君の所在は？」
「ルーウェンに用か？」
病院の中庭で電話する父親に向かって、ベンチに座るクレアは言った。父親はルーウェンに何か用事があるようだ。

「ルーウェン君のことが気に入った。是非うちの財閥に欲しい」
「やめておけ父様。奴は人をまとめるのに向かない。奴は下っ端として活躍するのが一番向いてる」
娘にたしなめられて、父親はルーウェンの追跡を諦めた。是非子会社の社長に、と考えていたのだが、下っ端向きと実際に会った娘が言うのだから、仕方ない。
「ルーウェンは私が倒すんだ。だから、重要なポストに付けると後が面倒だぞ？」
「え？　倒すって、一体どうゆうことなのさ！　押し、倒すってこと？　財閥の存続的にうれしいが、父親としては微妙だな……」
娘の言葉を違う意味に捕らえて狼狽した父親を見ながら、クレアは身体を抱いた。自分でも嫌になるくらいか弱い身体。でも、ルーウェンが抱いてくれた身体だと思えば、嫌ではない。
「ルーウェン、待ってろよ」
クレアはこの世界で、ルーウェンを倒すことを決めた。

東京都　河川敷

「まあまあ、兄ちゃん。食え食え」
「はあ……」
ルーウェンは河川敷にあるホームレスのテントでご馳走になっていた。渡されたスープをルーウェンは受け取る。リアルアースの封印で能力を下げられた体に皿は重かった。本の効力は完全になくなり、『ルーウェン・ヴァイサス』の姿になることは出来なくなった。
ルーウェンはリアルアースに帰還した後、警察官に話を聞いた。ルーウェン自身に逮捕状が出ているが、警察官の殆どが確保をストライキした、と。
その後、ルーウェンは家に帰ることにした。しかし、片道分のお金しか持っていなかったルーウェンは、なんとか１０円玉で家に電話するだけ電話した。

しかし小学校でした、顔見せからの大量虐殺を家族にテレビで見られてしまった。それが原因となり、電話で『帰ってくんな！』と怒鳴られたため、帰れなかった。１０円玉も切れた。
クレアの家に泊めてもらおうかと考えたが、女の子の家に泊まるのははばかられた。バンの家でいいやと思ったが、逆に殴られそうだからやめた。
一瞬、テレビの家出少女みたいに援助交際という方法が思い付いたが、男の援助交際とか需要ねーよとルーウェンは思い、却下となった。
そんなわけで、ルーウェンは道端で不良に絡まれたホームレスを剣を振り回して助け、今に至る。ルーウェンは現実を噛み締めて呟く。
「現実は厳しい……」
「せっかく子供助けたのに帰れずじまいじゃ、可哀相だね」
ホームレスのおじさんに囲まれながら、スープだけの夕食を済ませたルーウェンはこれからのことを考えた。
まさか自分がホームレスになろうとは、想像もしていなかったのだ。
「大変だ！　不良のホームレス狩りだ！」
ルーウェンはホームレスの緊迫した声にテントを飛び出す。考えるのはやめた。テントの近くに集まる不良はみんな、武器を持っている。不良は数名のグループだ。
「さて問題。こいつらは自分が殺されると想像してるでしょうか？」
ルーウェンはあまりに不利な状況に、自分の主義を思い出していた。『武器を持って戦場に立つなら、殺すつもりなら、殺される覚悟を持つ』。そんな簡単なことだ。
今の不良達が想像してるのは、恐らく一方的な虐殺。しかし、ルーウェンはそれをよしとしない。
「さて、辞世の句は用意したかな？　遺書は書いたかな？」

ルーウェンは重い剣を抜く。振り回せるか心配だが、これしか武器はない。
「俺の名前はルーウェン・ヴァイサス。これでも、世界を救った英雄だ」
ルーウェンの名と手の剣に、不良達の顔が青ざめる。ルーウェンは戦いを経て、『凄み』を得ていた。
「嘘だと思うなら、試してみるか？」
この日、『英雄』ルーウェン・ヴァイサスは新たな一歩を踏み出した。それが破滅への道かどうか、誰も知るよしはない。

エンドクレジット（前書き）

登場人物をググりやすいようにまとめた。

エンドクレジット

キャスト

『幻界戦線フロントワールド　オリジナルキャラクター』

【ポートランド組】

メアリー・ブロード
ルーア・レナート
ジン・クレッシェンド
アスタリスク・クレッシェンド
レイド・シャーロット

【リアルアース組】

ルーウェン・ヴァイサス
クレア・ハーディ
バン・グローリー
メイ・ラングウッド

『キングダムハーツ』

ロクサス
アクセル
シオン
ナミネ
ディズ
ハイネ
ピンツ
オレット

『魔法少女まどかマギカ』

佐倉杏子
暁美ほむら
鹿目まどか

『ブラック★ロックシューター』
ブラック★ロックシューター
黒衣マト
小鳥遊ヨミ

『学園キノ』
木乃
エルメス

『化物語』
羽川翼
ブラック羽川
阿良々木暦

『けいおん！』
平沢唯
秋山澪
田中井律
琴吹紬
中野梓
山中さわ子

『ぼくのなつやすみ』
ぼく

『とある魔術の禁書目録』

結標淡希
月詠小萌

『仮面ライダーフォーゼ』
如月弦太朗

『バイオハザード』
ネメシス

『ピクミン2』
アメボウズ
サライムシ
ダイオウデメマダラ
サクレショイグモ（画面外の爆発による友情出演）
その他コチャッピー達

『サイレントヒル』
レッドピラミッドシング

『魔界村』
レッドアリーマー

『ポケットモンスタールビー・サファイア・エメラルド』
クスノキ館長

『機動戦士ガンダムシリーズ』
シャア・アズナブル
ウルフ・エニアクル
スベロア・ジンネマン
フリット・アスノ

『マインクラフト』
クリーパー

『シリアスサム』
首無しカミカゼ

『青鬼』
青鬼

『クロックタワー』
シザーマン

『ゆめにっき』
鳥人間
センチメンタル小室マイケル坂本ダダ先生

『バハムートラグーン』
ヨヨ

『甲虫王者ムシキング』
ヘラクレスリッキーブルー

『狂乱家族日記』
乱崎凶華

『東方プロジェクト』
博麗霊夢

ネクストプロローグ　『ルーウェン・ヴァイサス』を見る目（前書き）

「『タイガーフォースの乱』から数ヶ月、ある事件を皮切りに戦いが起きる。リアルアースと二次元世界を巻き込む、『現幻大戦』の幕開けだ。『幻界戦線』二番目の戦い……」

【とある財閥の会長、戦いの後にまとめる】

ネクストプロローグ　『ルーウェン・ヴァイサス』を見る目

東京都庁

「そうか、犯行グループはルーウェン・ヴァイサスに殺されたか」
東京都庁の知事室。そこで老齢の都知事が電話で事件の顛末を聞いていた。事務机に座り、電話を取る。
ルーウェン・ヴァイサスが犯行グループを全員殺害し逃走。人質は殺害された者以外無事保護された。
「ドイツ軍が来たのか？　内政干渉じゃないか」
『萌えは国境を越えるんだそうで……』
電話の相手は現場で現状を聞いた警察官。内政干渉で即刻ドイツ政府に文句を言いたかったが、世界中のネット掲示板では彼らの行動を評価しているのでそれも難しい。別に彼は今度の会見で文句を言うつもりだったが。ネットの意見など都知事は無視するのが基本だ。
「くだらん。アニメなどなければ内政干渉も無かった」
介入したドイツ軍はルーウェンの危機を聞きつけて単独で行動した。日本の警察が動かない中、本国で彼らは人道的観点からお咎め無しだそうだ。
電話を置いた都知事は4ヶ月もわけの解らない世界に放り込まれた悪夢を思いだしていた。ケニーという少年が毎日の様に死んで、翌日には生き返っているという事態が一番精神的に堪えたみたいだ。
「まったく、我欲にまみれた若者が電気を必要としたためにあんな発電所を作るハメになり、その天罰に私が巻き込まれるとは、解せぬ」
アスタリスクはルーウェンがしたように、リアルアースに侵入できる道具を持っていた。それを使い、発電所を輸入したのだ。しかし、東京都の電力は足りており、支持率のために発電所を設立した

のは都知事本人。責任を若者に押し付けてるだけだ。
「許さん。二次元世界など、滅ぼしてくれる」
都知事は一方的な怒りを吐き出した。アスタリスクが残した技術がある。それを使い、二次元世界を滅ぼすつもりらしい。
「皇帝のリング。八元素のリングとやらの試作品らしいな。試してやろう。あの気に入らぬ、秋葉原という町を潰すついでにな……！」
都知事は独善的な感情で、日本の文化を潰すつもりだ。よりによって、そのための武器が手にあった。
「ルーウェン・ヴァイサス。全てはあのガキがでしゃばったのが原因だ。先ほどの小学校立て篭もりも、ルーウェンに対する仇討ちだそうだな。あれこそ、我欲にまみれた若者の象徴だ！」
ルーウェンを我欲の象徴と見る都知事。というか、ルーウェンがタイガーフォース兵を殺したのはタイガーフォースの横暴を止めるためなのだが。
最悪の巡り合わせが再び世界を戦いの渦に巻き込もうとしていた。

東京都　居酒屋

「いや、愉快な４ヶ月間であった」
東京都のとある居酒屋。そこで初老の男が日本酒を飲んでいた。おちょこに注いだ酒を、４ヶ月間の思い出と共に煽る。
「さらにルーウェンという少年、あっぱれだ。自分が死ぬかもしれないのに、わざわざ来たのだから。あの様な若者がいるなら日本も安泰だ」
彼はかつて、首相をしていた。しかしマスコミを敵に回したため、漢字が読めないだのカップ麺の値段が解らないだので首相を下ろされた。自身の勉強不足は認めているが、彼はマスコミが報道に責任を持つよう法律を制定しただけだ。それが出来ないということはマスコミがやましいことがあると自分で言ってる様なものだ。

自分が首相を下りた結果、外国人献金を受けた人間が今も辞めずに首相をしている。

「だが、ルーウェンは我々にとって光明だ。あの様な若者がいるのだ」

都知事と元首相、二人の大人はルーウェンを見つめる。正反対の思いで。

ネクストプロローグ　『ルーウェン・ヴァイサス』を見る目（後書き）

はい、これで全て終わりです。来週以降はこのサイトで連載中の『ドラゴンプラネット』で会いましょう。

しばらくしたら『幻界戦線フロントワールド０』を連載しますので……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6486x/

幻界戦線フロントワールド

2012年1月10日08時47分発行